

受託機関名：横浜市教育委員会

実践事例：小学校

対象教員の通級による指導経験年数 2年（教員の経験年数 18年）

指導例：小学校4年生

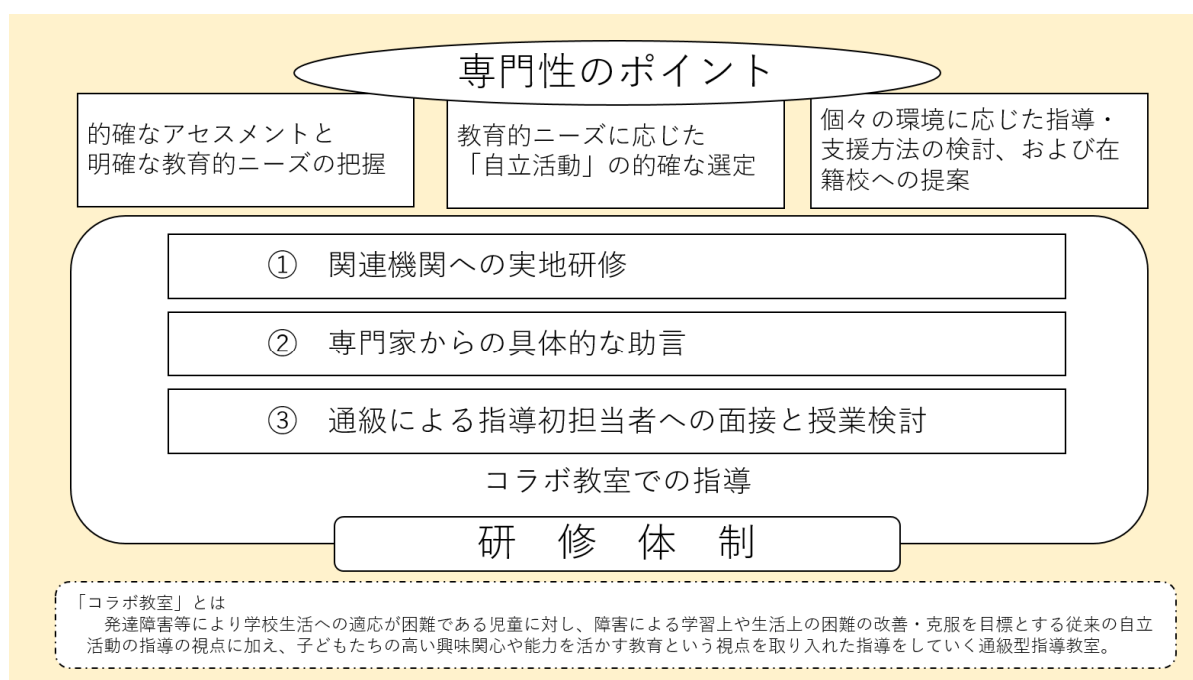
## 1. 通級による指導担当教員の専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制

横浜市は、平成29年度に新たな指導拠点「コラボ教室」を小学校に開設した。コラボ教室は、発達障害等により学校生活への適応が困難である児童に対し、障害による学習上や生活上の困難の改善・克服を目標とする従来の自立活動の指導の視点に加え、子供たちの高い興味関心や能力を活かす教育という視点を取り入れている。本教室は、発達障害等のある子供の強み（好き・得意）を活かす指導・支援を行うことで、子供たち一人一人が自尊感情を高め、自分らしく心豊かに日常生活に適応して、社会に貢献できる自己の実現を目指すという理念に基づき、指導を展開している。

本事業では、教員経験は17年目（事業開始時）であるが、通級による指導の担当未経験でコラボ教室担当となった教員（以下、「コラボ担当教員」という。）を対象とし、専門性の向上を図るための取組を行った。取組の概要はコラボ教室での指導をしながら①関連機関への実地研修、②専門家からの具体的な助言、③通級による指導の経験が短い教員（以下、「通級による指導初担当者」という。）への面接と授業検討の実施となっている。

本市では、通常の通級による指導担当教員に対して、主に「通級指導教室初担当者研修」、「通級指導教室スキルアップ研修」、「学校支援担当者研修」を実施しているが、本事業の対象教員（コラボ担当教員）は、この研修を受講していない。

### 1-1. 専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制との関連図



### 【専門性のポイント】

- ア. 子供本人のアセスメント及び子供を取り巻く家庭や学校環境を含むアセスメントを的確に行い、教育的ニーズを明確に把握すること。
- イ. 教育的ニーズに応じた「自立活動」の項目、指導内容を的確に選定して指導ができること。
- ウ. 子供の学習や生活環境に応じた指導、支援の方法を検討できること。また、在籍校に提案できること。

### 1－2. 専門性を高めるための研修体制

#### (1) 委託事業前の研修体制（目的・目標）

これまで通級による指導担当歴を3段階に分けるとすると、それぞれの専門性向上のための研修の目的・目標を概ね以下のように設定していた。

通級による指導担当歴	専門性向上のための研修の目的・目標
1～3年	「通級指導教室初担当者研修」や教室内 OJT 等を通して、通級による指導の概要を理解する。
3～5年	「通級指導教室スキルアップ研修」や教室内 OJT 等を通して、アセスメント力や指導力を高めるとともに、在籍校や他機関との連携を深めることができる。
5年以上	「学校支援担当者研修」等を通して、在籍校や他機関との連携をさらに深めつつ、指導・助言をすることができる。

#### (2) 今後の研修体制

これまでは、教員歴に関係なく、通級による指導担当歴によって研修の体制を組んできた。今後教員歴がある程度長い教員に対する通級指導教室初担当者研修では、以下の3点を取り入れていくことを検討する。

- ア. 講義形式の研修だけではなく、実際の指導の参観や実地の研修等を組み合わせて行うこと。
- イ. アセスメントや特別支援教育に関わる医学、心理学、教育学等の様々な専門的内容の研修の企画を提供し、通級による指導担当教員が多角的に指導を検討できるようにすること。
- ウ. ア、イの研修を概ね受けた後、通級による指導初担当者に通級による指導の専門性に関する面接と授業検討を実施することで、通級による指導担当教員として必要な力を知ること。

### 1－3. 専門性を高めるための研修内容

#### 【事業で実施した実践例】

\* 詳細は、「2－1. 拠点校の通級による指導担当教員の取組概要」で記載。

#### ア. 関連機関への実地研修 研修ア

市内、市外の小中学校通級指導教室、特別支援学校、就学前療育機関、大学研究センター等、発達障害等により学校生活への適応が困難である児童生徒への指導に関する12の関連機関を訪問し、実際の指導の見学等を通して、①通級による指導の教室開設

に向けての心得、②教室運営の理解、③通級による指導を利用する児童生徒の理解が促された。

#### イ. 専門家からの具体的な助言 研修イ

実際にコラボ教室の運営をする中で生じた「通級指導教室等の利用対象となる児童生徒の自己理解と支援」「指導にいかされるアセスメント」「知能検査」「保護者支援」「本人参加型会議」等の疑問に対して各領域の専門家から具体的な助言を得た。

#### ウ. 通級による指導初担当者への面接と授業検討 研修ウ

本事業の対象となったコラボ担当教員が、通級による指導初担当者に対して、専門性に関する面接と、そこで話された内容に焦点をあてた授業検討を実施することを研修とした。この研修を通して、通級による指導初担当者が、通級による指導における専門性を意識し、その向上に向けた取組が実施されたのみならず、コラボ担当教員自身が、通級による指導担当教員としての専門性の具体について改めて確認することができた。

#### 【事業で実施した実践例を踏まえた今後の研修内容】

本市で初めて通級による指導の担当となっている教員は、教員経験の短い教員と、教員としての経験はある程度積んでいる教員とに二分される。これまで、どちらの教員に対しても同じ内容での通級指導教室初担当者研修を実施してきた。しかし本事業を通して、それぞれの教員としてのキャリアに応じて、吸収できる研修の内容には差があり、身に付けることができる専門性には違いがあると考えられた。

研修ア、イより、教員経験を積んでいる者に対しては、これまでの経験を、通級による指導に意識的にいかしていくことを目的に、実践をしながらの実地研修や専門家からの助言が有効であると考えられた。

また研修ウより、教員経験を積んでいる通級による指導担当教員が、通級による指導初担当者に対して、第三者として専門性について整理し、授業検討を実施することは、①今後の研修計画を自身で考える力を身に付けること、②通級による指導担当教員としての専門性の具体を自ら意識することに有効であると考えられた。

これらのことより今後は、初めて通級による指導担当教員となる教員に対する通級指導教室初担当者研修を、それまでの教員としてのキャリアに応じた内容とすることを検討したい。

### 1-4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った工夫

本事業の対象となる研修アは現場へ赴くことを基本とし、実際の指導とそこでの児童生徒の反応等に対する疑問を、即時実践者に投げかけられるものを主にした。また、研修イは自らが指導する中で思い悩むこと、疑問に思うことについて、具体的に専門家から助言を受けることができるものとした。研修ウでは、面接や授業検討の流れが研修としての目的からそれてしまうことのないように、指導主事が同席した。

コラボ教室の担当教員2名のうち、1名（事例対象教員）は初めて通級による指導担当教員となったが、もう1名は教室内OJTの効果を期待し通級による指導の経験が豊富な教員を配置した。

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例】

### 2-1. 拠点校の通級による指導担当教員の取組概要

○学校種 小学校

○通級における指導の経験年数 2年（本事業期間）

○教員の経験年数 18年

○事業開始までに受けた研修内容

児童支援専任（教諭）研修、通級指導教室スキルアップ研修など

\* 児童支援専任教諭：児童指導と特別支援教育コーディネーターの役割を兼務する教諭

○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

＜身に付けていた専門性＞

- ・ 個からつなげる集団づくり（学級づくり、個をいかす総合など）
- ・ 保護者へのアプローチ
- ・ 一般学級に在籍する配慮の必要な児童に対する学級でできる支援 等

＜身に付けたかった専門性＞

- ・ 自立活動の理解と指導
- ・ 児童の自己理解の進め方
- ・ 通級指導教室担当者としての役割と支援

○事業実施中に受けた研修内容

研修ア 関連機関への実地研修

No	研修内容	備考
1	1 発達段階における取組の参観 2 シラバスの内容 3 生徒の活動の参観 4 ポートフォリオの実物	「横浜市立若葉台特別支援学校」 ・ 関連機関の見学
2	コラボ教室実施のための指導の参観と解説 （通級型指導）	「横浜市立平沼小学校通級指導教室」 ・ 市内通級指導教室の見学
3	コラボ教室実施のための指導の参観 （巡回型指導）	「狛江市立第三小学校ひまわり教室（特別支援教室）」 ・ 他都市の通級指導教室の見学
4	コラボ教室実施のための指導の参観 （通級型指導）	「鎌倉市立今泉小学校通級指導教室」 ・ 他都市通級指導教室の見学
5	コラボ教室実施のための指導の参観 （通級型指導）	「横浜市立西が岡小学校通級指導教室」 ・ 市内通級指導教室の見学
6	コラボ教室実施のための指導の参観 （巡回型指導）	「調布市立飛田給小学校（特別支援教室）」 ・ 他都市通級指導教室の見学
7	中学校通級指導教室の見学	「横浜市立鴨志田中学校通級指導教室」 ・ 市内他校種通級指導教室の見学
8	コラボ教室実施のための指導の参観	「横浜市立荏田東第一小学校通級指導

	(通級型指導)	教室」 ・ 市内通級指導教室の見学
--	---------	----------------------

# 研修イ 専門家からの具体的な助言

No	研修内容	備考
9	本人参加型会議について①	「横浜市教育委員会 SSW」 ・ 関連機関からの助言
10	コラボ教室の在り方、指導内容（特に専門分野指導）について	「東京大学先端科学技術研究センター」 ・ 専門家からの助言
11	就学前の療育について （見学、講話）	「ぴーす新横浜」 ・ 専門家からの助言
12	コラボ在籍児童強みのアセスメントについて	藤原 博氏（東京学芸大学） ・ 専門家からの助言
13	本人参加型会議について②	「横浜市教育委員会 SSW」 ・ 関連機関からの助言
14	本人参加型会議とキャリア教育について	菊地 一文氏（植草学院大学） 発達支援教育学科 准教授 ・ 専門家からの助言
15	ASD の人の自己理解と支援について	本田 秀夫氏（信州大学医学部） 子どものこころの発達医学教室教授 付属病院子どものこころ診療部部長医師 ・ 専門家からの助言
16	通級による指導の在り方、コラボ在籍児童のアセスメントについて	小林 潤一郎氏（明治学院大学） 心理学部教育発達学科教授・医師 ・ 専門家からの助言
17	ASD の人の自己理解と支援について	小島 道生氏（筑波大学） 人間系 准教授 ・ 専門家からの助言
18	WISC 検査のアセスメントについて	岡田 智氏（北海道大学教育学研究院） 附属子ども発達臨床研究センター准教授 ・ 専門家からの助言
19	レジリエンスと保護者支援について	日戸 由刈氏（相模女子大学） 人間社会学部心理学科/子育て支援センター 准教授 ・ 専門家からの助言
20	コラボ在籍児童のアセスメントと自己理解について	小林 玄氏（立教女学院短期大学） 幼児教育科専任講師 ・ 専門家からの助言

21	専門性充実検討会議	松村 暢隆氏（関西大学） 安藤 壽子氏（NPO 法人らんぷあんどらざ） 笹森 洋樹氏（国立特別支援教育総合研究所）
----	-----------	---

## ○教員にとって役に立った研修・指導の内容

研修 No	身に付いたと思う専門性（理由・新しい知識等）
1	「子供たちの学習意欲の向上の方法」 ・「過去/他人は変えられないけど未来・自分は変えられる」「失敗の価値づけ」「相談力」という視点 ・子供自身が好きな事、枠をどれくらい広げられるのかを整理することの必要性 ・好きな事を強みとして認められる機会としての、ポートフォリオの活用
2	「通級による指導の年間計画と流れ、職員の役割分担」 ・児童のグルーピング → 実態把握⇒指導計画 指導開始 ・サブティーチャーの役割（メインティーチャーと狙いを共有していく中で、できていないことに気づかせる。子供を変えていくのはサブの力は大きい。） ・在籍校の教員の自己肯定感の向上
3	「自己理解の促進」 ・通級による指導の対象児童の自己理解、信頼関係の築きについての一方法
4	「コラボ教室の立ち上げと巡回型指導について①」 ・在籍校の教員との連携について（実態把握シートの使用）
5	「コラボ教室の立ち上げと通級型指導について①」 ・不適応行動の児童に対する指導実践例、評価例 ・保護者との連携例
6	「コラボ教室の立ち上げと巡回型指導について②」 ・映像を使った指導例 ・巡回型指導の例（教材の扱い、在籍学級担任との関係づくり） ・支援シートや特別支援教室巡回指導実施要項等の活用
7	「コラボ教室の立ち上げと通級型指導について②」 ・「振り返り」の重視 ・進路を見据えた指導
8	「コラボ教室の立ち上げと通級型指導について③」 ・SSTによる社会性の向上と自己理解
9	「本人参加型会議での支援」 「本人の思いを大切に本人参加型会議の在り方」 ・作戦会議の手順と役割分担（関係職員の立ち位置等） ・支援の具体、修正・評価
10	「強みを伸ばすための方法」 ・児童生徒との関係づくりのコツ ・指導者のスタンス

11	「社会的な対応能力の向上～就学前の療育について」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人格形成の基盤づくりと自己理解</li> <li>・ S-M社会生活能力検査の活用</li> <li>・ 社会性を育てるための支援方法（具体的な体験例、困っている時の声かけ 等）</li> <li>・ 継続した支援</li> </ul>
12	「コラボ教室在籍の児童のためのアセスメント」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ KABC、WISC、Vineland-Ⅱの有効性</li> <li>・ アセスメントの際に必要な視点</li> </ul>
13	「本人参加型会議での支援」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保護者との記録の共有</li> <li>・ 「困っていること」の扱い</li> <li>・ 本人の言葉の重要性</li> <li>・ 人的環境との関わり</li> </ul>
14	「コラボ教室の取組に対する助言」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 座る位置と役割の工夫</li> <li>・ ふり返りのプロセスの重要性</li> <li>・ コラボでの指導の意味（特に「専門分野の特別指導」とカリキュラムマネジメント</li> </ul>
15	「コラボ教室の取組に対する助言」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「本人参加型会議」と個別の指導計画の作成</li> <li>・ 通級による指導における「自立活動」</li> <li>・ 「強み」のいかし方（本人にとっての強みと、保護者にとっての強み）</li> <li>・ 学校教育と療育（学校適応困難・生活適応困難、内在化する不登校、保健室の利用、過剰適応 等）</li> </ul>
16	「強みと苦手さについて」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子供の強み、興味、関心と生きる意欲</li> <li>・ 強みをいかすことと人との関わり（人とのやり取りの大切さ、助言の受け入れ、人とのつながりから育つ社会とのつながり、立ち直る際の人の存在 等）</li> <li>・ 指導における仕掛けづくり</li> </ul>
17	「自己理解と発達課題について」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ASDの特性のある児童生徒と定型発達の児童生徒の「心の理論」の獲得時期と方法の違い</li> <li>・ 自分の行動や感情を見つめなおし、対応の仕方を考えることの必要性</li> <li>・ 抑えられない感情を引き起こす場面を回避する支援</li> <li>・ 「人に相談できる力」＝他者と自己に対する信頼感</li> </ul>
18	「WISC-Ⅳについて」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 結果から考えられるタイプ</li> </ul>
19	「レジリエンスと保護者支援」
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ レジリエンスを育てることの意味</li> <li>・ レジリエンスを育てるための三要素</li> <li>・ 社会性の育ちと三つの柱</li> </ul>

・レジリエンスの育ちと保護者	
20	「WISCの結果と子供たちへの自己理解」
・「自己理解のためのツールとしてのWISC検査」という視点	
21	通級型指導教室の担当者への助言
①「子供の才能（強み）を活かす教育の充実」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・2E（二重の特別支援）教育について</li> <li>・2E教育の対象（発達の凸凹が大きく特有な支援ニーズのある児童）</li> <li>・「社会情緒的支援」</li> </ul> ②「通級指導教室担当者の専門性向上」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・アセスメントの必要性</li> <li>・低学年での自己理解</li> </ul> ③「今後の通級における自立活動の指導」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自立活動の目標</li> <li>・巡回型指導について</li> <li>・周囲に気づかれにくい特性の理解と支援</li> <li>・高学年での自己理解</li> </ul>	

#### 研修ウ 通級による指導初担当者への面接と授業検討

本研修では、コラボ担当教員（本事業対象教員）が、新任で通級による指導担当となった教員に対して面接と授業検討を行った。

面接は半構造化面接とし、2回の授業検討の前後で実施した。授業検討前の面接では、「身に付けたい専門性」がテーマとなり、具体的には①児童への適切な言葉がけ、②障害特性に応じた対応法、③児童の適切な見立て（アセスメント）、④児童の行動の意味、⑤在籍校、医療との連携、⑥保護者支援があげられた。この中で、この一年で身に付けたい力を①児童への適切な言葉がけに設定し、2回の授業検討を行った。

事後の面接では、最初に「この一年で身に付いた専門性」がテーマとなり、具体的には「それぞれの“個”に対する意識の高まり」があげられた。次に「今後身に付けたい専門性」がテーマとなり、「個に応じた指導ができるような適切なアセスメント方法、指導目標の選定」があげられた。

新任教員に対するこれら一連の関わりを通じてコラボ担当教員は、身に付けたい専門性を整理し、この一年で身に付けたい専門性、数年をかけて身に付けていく専門性等、自分に必要な力を整理し、自分自身で専門性向上のための研修計画をたてる力が身に付いた。さらに、助言者として一つのテーマに焦点を当てて新任で通級による指導担当となった教員の授業を参観し検討する過程を通して、教員として身に付けるべき力と、通級による指導担当教員として身に付けるべき力を分けて考えるようになった。通級による指導担当教員としては、① 児童の抱える苦手を理解し、それによる困難等の背景を意識した言葉がけをする力、② あえて間をあける、意識的な言語による即時評価等、それぞれの“個”に応じた言葉がけをする力、③ ①②を実行できるようになるためのアセスメント力 が必要であることが実感された。

## ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

\* ( ) 内は、効果があったと思われる研修番号

### ①自己理解支援についての知識・技能の向上

コラボ担当教員は、事業前、子供達への支援については、周囲との良好な関係や集団への積極的な関わりを作り出すためのものという捉えが強かった。事業後は、子供の自己理解を促す必要性を感じた（研修⑪）。その結果、実際に通級型指導の中で子供たちの自己理解に迫り、知見を深めることができたと感じている（研修③）。また、「困った時に相談する力を育てる」ためには、①成功体験の積み重ね、②他者の気づき、③わかってくれる人の存在、④わかり合える人の存在を実感すること等が必要であるということを実感した（研修①）。そのことで、まず教員自身が自分のことに向き合った上で、子供に対するアプローチの仕方について学び、それをもとに児童の発達段階、児童の抱える困難について考察し、指導内容に反映することができるようになった。

### ②アセスメントで得た情報の活用力の向上

事業前は、アセスメントによって集めた情報を活用することができず、日々の指導の中で何をねらいにするのかを意識して学習プログラムを構成することができていなかった。事業後は、アセスメントの活用の仕方（研修⑱）を理解できた。発達障害の状態像には様々な表れ方があり、それが不可解な行動や生きづらさの原因となっていることを知り（研修⑪）、発達段階や個人によってアプローチの仕方が異なる（研修⑪）ことを理解した。アセスメントを活用することで、日々の指導の中でどの内容をねらいにするのかを意識し、子供の「強み」や「興味関心」から教材作成のヒントが得られた（研修③）。またアセスメントの際、本人との対話を重視することで、「困り」「悩み」に対応する力を身に付けるための活動や教材を、それぞれの個に応じたものとして考えていくことができるようになってきた（研修⑯）。

### ③本人参加型会議とPDCAの大切さ

事業前は、通常の学級の担任や児童支援専任教諭の立場から、一斉指導を軸としてめあてを設定していた。そのため内容としては、その時間に教員側が身に付けてほしい学習内容を画一的に提示するのみとなっていた。また個別の指導計画についても、本人の思いよりも保護者や教員の困っている状況に重点が置かれていた。しかし本事業を通して、発達障害には様々な表れ方があり、それが不可解な行動や生きづらさの原因となっていること（研修⑪）、本人の主体的な思いがなければめあて自体は飾りになってしまうこと（研修⑭）を実感した。また、PDCA サイクルの積み重ねにより、子供周囲の行動変容に影響があることがわかった（研修⑬）。

これらのことを通して、本事業の後半では、「集団を育てる」から「個を育てる」という視点、「適応を促す支援」から「個の特性に応じた支援」という、指導・支援に対する視点の大きな変化があった。このような視点をもったことで、子供が自分でめあてを考える本人参加型会議では、飾りではない具体的な目標に迫ることができた。

### ④通級による指導担当教員と在籍校のチーム支援の連携の工夫

事業前は、通級による指導担当教員とは、児童支援専任教諭として電話でのやり取り、授業参観、個別の指導計画のやり取り等をする程度であった。しかし本事業の中でこれまでとは違った通級型指導の担当者という立場から児童支援専任教諭と関わることで、

それぞれが役割分担をすることが連携につながることを感じた。特に、2週に一度のペースで巡回指導をしたり、年に2回本人参加型会議を実施したりする中で、本人の思いを共有し、目標設定までの支援を関係者みんなで話すことで役割分担が明確となった（研修⑨）。

これらを通して、事業の後半からは「子供を変える」という視点が、「環境を変えて子供を活かす」という視点へと変化した。そのことで、巡回指導の中もその視点から専任との連携が進み、教室の環境調整、学校の人的資源の活用、社会的資源の活用が進み、対象児童が自信を持って友達作りを始め、イキイキと活動に取り組めるようになった。

#### **⑤通級による指導担当教員として必要な力**

事業前は、通級による指導という個に応じたオーダーメイドの学習プログラムについてはあまり理解していなかった。事業後は、集団の中の個への指導・支援のために身に付けるべきものがあることを強く感じた。また、特にその「個」に発達の偏りや特性がある場合には、それにあった関わり方があることも実感し、通級による指導担当教員ならではの必要な力を意識した（研修ウ）。その結果、これまで教員として身に付けている力以外に必要な力が明確となり、自分自身で専門性向上のための研修計画をたてることができるようになった（研修ウ）。

また、振り返りの中で通級指導教室初担当者より、「第三者が入ることで、客観的な意見をもらい授業を改善できた」との感想があった。具体的には、指導スタイル、役割、めあてについてなどの自分自身の捉え方の変容を挙げていた。

## **2-2 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究**

### **2-2-1 実態把握**

発達的な困難や適応上の困難のある子供の多くが、得意不得意といった凸凹をもつ。しかし、これまでの特別支援教育や治療教育では、困難な箇所や障害の箇所ばかりに焦点があたってきた。学習意欲や自尊心、主体的な自己を育むには、子供の肯定的側面や適性、強みを大事にする教育が重要であることは、これまでも謳われてきたが、我が国においてその具体的な取組や実践は少ない。コラボ教室では、困難をもちやすい「社会性」領域の教育に加え、個の強みを「専門分野」の指導として取り入れ、弱みだけでなく強みも「自己理解」し、主体的に歩んでいくことを目指している。そのため、実態把握では、子供の強み（好き・得意）や本人の願いも含む多面的なアセスメントによる個の教育的ニーズの把握を重視し、コラボ教室では以下のアセスメントを実施し、実態把握に努めた。

- ①興味関心・得意の把握（本人の強みアンケート）
- ②強みや苦手なことの把握（認知特性：WISC-Ⅳ）
- ③社会性や気持ちのコントロールの把握（Vineland-Ⅱ 適応行動尺度）（社会情動的発達チェックリスト）
- ④自己理解に関する情報収集（自尊心尺度、自己理解インタビューなど）
- ⑤事前面接における本人の行動観察
- ⑥相談記録や社会情動発達チェックリストによる保護者記載情報
- ⑦指導中の本人の自己陳述や行動観察、作品や教材

⑧指導前・指導後の保護者との談話

⑨巡回先での行動観察

⑩巡回先での特別支援教育コーディネーター、在籍学級担任らからの聞き取り情報

## 2-2-2 指導目標の設定

コラボ教室では、個のニーズに応じながら上記の教室理念に沿った教育を行うため、「専門分野」「社会性」「自己理解」の三つを柱に指導を構成している。また、各児童に対して、「通級型指導（週1回2時間）」「巡回型指導（2週に1回2時間）」「専門分野の特別指導（年15回程度）」「本人参加型会議（年2回）」の四つの指導形態を併用して、指導を展開している。

＊通級型指導：週に1回、2時間程度、特別な指導の場に通う方式で、児童2～3名程度の小グループを構成し、自立活動の指導を行う。通級型指導の主な内容は、①始めの会（グループで「あいさつ」「今日の予定」「提出物の確認」を通し、一日の見通しをもち、学習準備や身辺管理を行う。）②ほうれんそうタイム（「自分のめあて」「報連相タイム」「めあてカード」を通し、取り組むべき目標を確認する。）③専門分野の（事前・事後）学習（自分の強み（得意や好き）の学習計画を立てたり、専門家による特別指導の事前・事後学習を行う。）④コミュニケーションの学習（グループで、意見を出し合い、活動内容を決め、集団活動を行う。または、児童の社会性の課題に応じた集団活動を設定する。）⑤終わりの会（グループや個別に、活動やめあてのふりかえりをする。）

巡回型指導：児童の日常の学校生活でのアプローチを行う。通級指導教室で行う指導は、在籍学級や家庭への般化の課題を抱えているため、担当者在籍学級に直接支援を行うことで、児童のもてる力を発揮できる環境をつくるために支援を行う。担任等とのチームティーチングによる指導を原則とし、自立活動的視点を取り入れた通常の教科等の学習活動の中での指導を行う。原則として、コラボ担当教員による別室での自立活動の指導ではない。児童支援専任教諭を窓口とした連携を図ることにより、児童の強みを生かす土壌となる学級経営・学校組織を支援する。

専門分野の特別指導：専門分野（児童の能力や興味関心の高い分野）を中心とし、必要に応じて当該分野の専門家の協力を得て指導を行う。通常の通級型指導（社会性及び自己理解）の指導内容との関連を図ることで、児童の個性を引き出すとともに、それを活用する指導を行う。

このうち、指導の目標の設定では、「本人参加型会議」が重要な位置づけとなる。

本人参加型会議は、一年間の指導初期と指導後に行うが、指導目標の設定は指導初期の本会議が柱となる。

参加者は、本人、保護者、在籍学級担任、特別支援教育コーディネーター、通級指導教室担当者の5名を基本とする。場所は、在籍学級で放課後に行い、時間は30分程度である。本人参加型会議の目的は、本人が主体となって、「自分のめあて」を立て、日常生活の中で、P（願い・目当て）D（具体的な工夫）C（評価、振り返り）A（見直し）サイクル（後述）に取り組むための話し合いをすることである。この会議には次の2つ

の重要な側面がある。①本人の願いを実現できるように、本人の言葉を関係者みんなで聴くこと。②児童が力を十分に発揮できるよう、様々な立場から応援、助言をすることである。

会議参加のルールとして「全員が発言する」「記録を板書し視覚化、共有する」「他者の意見を否定しない」の3つを事前提示し、約束をしてから始める。指導初期の会議は以下の4ステップで行う。

- ① 本人のいいところ（好き、得意、活躍、役割など）
- ② 困っていること（願い、気になること、など）
- ③ 目標の設定（良さを活かして困りにアプローチ）
- ④ 目標に向けた支援のアイデアを出し合う

本人が学びの主体となって「自分のめあて」を立て、生活の中で、PDCA サイクルに沿って取り組むために、本人が立案する「自分のための学びプラン」という目標が、指導目標と結びつく。

### 2-2-3 適切な評価

本人が主体となって「自分のめあて」の達成度を評価する取組を行った。通級型指導のグループ指導の中で、本人参加型会議の記録や友達のアドバイスを参考にしながら、「自分のめあて」を2つ設定した。自分で考えて立てる「チャレンジめあて」と、周りからの助言を受けて立てる「アドバイスめあて」である。「自分のめあて」を、「1週間のめあて」として「めあてシート」に書き込み、毎日、周りの大人（在籍学級担任・保護者・コラボ担当教員など）と振り返りを行った。1週間後の通級型指導の際に、「自分のめあて」の振り返りを行い、それを達成できるように、次週にむけて「1週間のめあて」の見直しを行った。

○めあて (PLAN) → ○取り組む (DO)			
1 チャレンジめあて			
2 アドバイスめあて			
	今日一緒に 振り返る人	コメント	
月 日 (月)	担任の先生 保護者 ( )		
月 日 (火)	担任の先生 保護者 ( )		
月 日 (水)	担任の先生 保護者 ( )		
月 日 (木)	担任の先生 保護者 ( )		
月 日 (金)	担任の先生 保護者 ( )		
月 日 (土)	担任の先生 保護者 ( )		
月 日 (日)	担任の先生 保護者 ( )		

#### ○振り返る(CHECK)

チャレンジめあての振り返り

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

アドバイスめあての振り返り

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

#### ○見直す(ACT)

次のチャレンジめあて

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

次のアドバイスめあて

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

自分のための学びプランシート

一年間の事前・事後評価としては、社会性や気持ちのコントロールの把握（Vineland-II 適応行動尺度、社会情動的発達チェックリスト）、自己理解に関する情報収集（自尊心尺度、自己理解インタビューなど）を行った。また、保護者面談面接、相談記録や社会情動発達チェックリストによる在籍学級担任や保護者記載情報等を活用し、子供理解を深めた。

また、評価の柱となるのは年度末に実施する本人参加型会議となる。参加者、時間、場所、重要となる２側面、ルールは指導初期の本会議と同じである。目的は、本人が主体となって「自分のめあて」や、一年間の生活の振り返りを行うことで、自己成長感をもちながら、次年度の学びへとつなげるための話し合いをすることとなる。年度末の会議は以下の５ステップで行う。

- ① 一年間で、成長したこと、がんばったこと、学んだこと
- ② 最近困っていること、４月から心配なこと、周りからこうなってほしいという願い
- ③ ○年生になってからの目標
- ④ 目標達成にむけての支援
- ⑤ 来年度からのコラボ教室について

年度末の本人参加型会議後の本人の感想は、「たくさん話せてよかった。」「自分では気づかなかったことを、教えてもらえた。」「最初は緊張したけど、みんなが成長したところをたくさん言ってくれたのが嬉しかった。」などあげられた。

#### <事前事後評価 ～自己理解と Vineland-II の結果～>

Aさんは、１年間の学びアンケートで、「すねる回数が減ってきた。」と自分の成長を実感した答えをした。自己理解アンケートで、「自分の好きじゃないところ」の質問に、以前は「小さくて、高いところに手が届かないところ」と答えたが、「すぐ怒るところ。すねるところ。」と自分の課題に迫る回答をし、今後改善の意欲をみせた。

Bさんは、１年間の学びアンケートで、「自分のことを相談できるようになったし、相談できる人が増えた」と自分の成長を実感している回答をした。また、自己理解インタビューで、以前は「自分にいいところなんて一つもない」と答えたが、自分のいいところを「先生たちと話さないとわからない。自分のことをもっと知りたい」と答え、信頼できる他者との関係性の中で自己理解について深めていく意欲をみせた。

Cさんは、１年間の学びアンケートで、通級で学ぶ意義を「友達とコミュニケーションを楽しくできるから」と、自分の課題に向かって学ぶことの大切さについて答えた。また、自己理解インタビューで、「自分はどんな人だと思うか」の質問に、以前は「わからないし、考えたことがない。」と答えたが、「算数が得意で、電車博士」と自分の強みについて自信をもって答えた。

Aさん、Bさん、Cさんともに、１年間の事前と事後では、行動面とともに内面の成長を実感している回答をしている。また、１年間の指導開始前と指導後で、Vineland-II の結果の特にコミュニケーション領域に大きな変容がみられた。

対象児童	A さん		B さん		C さん	
実施時期	事前	事後	事前	事後	事前	事後
適応総合得点	78	83	73	75	76	80
コミュニケーション	79	99	67	82	71	81
日常スキル	87	82	86	93	91	91
社会性	76	72	75	60	74	74

A さん B さん C さんの Vineland-Ⅱ 結果比較

### ＜行動変容のエピソード＞

一年間のコラボ教室の取組から、各児童の変容の様子は以下のようなものがあった。

A さんの指導前の様子は、対人恐怖があり学級集団に入れなかったため毎日保護者が引率していたり、集団生活への自信を喪失し昇降口で大泣きして教室までいけなかったりしていた。指導開始後は、「プログラミングを極める」ことをめあてとして取り組んだ。みんなに楽しんでもらえるようなゲームを作成し披露する中で、Viscuit を作成した博士やコラボ教室の友達から助言やコメントを得ながら、改良を進めている。在籍校のクラブ活動にて、プログラミング学習を計画して、自分の作品を友達に披露するなど、日頃の学校生活において学習意欲が高まっている様子が見られた。

B さんの指導前の様子は、他者とのかわりが一方的で、意見の相違があると相手を論破してしまうため、良好な友人関係を築けなかった。指導開始後は「返事ははいと言ってみる」ことをめあてとして取り組んだ。相手の話を一旦受けとめることができるようになり、他者からの注意や助言を受け入れることができるようになってきた。

C さんの指導前の様子は、日々、クラスメイトとの対人トラブルが絶えず、休み時間に友達とかかわりながら、遊びを最後まで継続することができなかった。また、授業中に、思いついたことを大声で発言するため、周りの子からうるさがられ、授業中でも口論になることがあった。指導開始後、「声の大きさをマイナス 15 パーセントにして話す」ことをめあてとして取り組んだ。学校生活や家庭生活において、大声で叫ぶ姿が減り、声の大きさを調節してやり取りができるようになった。

### ＜在籍校での変容＞

#### ① 在籍校での行動の変容

発達障害等のある児童に、通常の通級型指導の他に、日常生活を直接的に支援する「巡回型指導」の実施、強みを生かす教育として「専門分野の特別指導」の導入、「本人参加型会議」の実施、「本人が立案する個別の指導計画」を作成し、1 週間毎に自分のめあての実現にむけた PDCA サイクルに取り組むことで、在籍校での適応が向上し、行動面で肯定的な変容が見られた。

#### ② 本人の内面の評価

また、事前事後の Vineland-Ⅱ、自己理解インタビュー及び 1 年間の学びアンケートの結果比較から、コミュニケーション領域の肯定的な変容、自己理解の深まり、学習意欲の向上の成果が得られた。

## 2-3 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法の研究

コラボ教室では、子供一人一人の強み（好き・得意）を生かす教育として、「自立活動」の指導へ「専門分野の特別指導」を年 15 回程度導入し、強み（好き・得意）の効果的な活用を行っている。専門分野の特別指導は、児童の能力や興味関心の高い分野を中心とし、必要に応じて当該分野の専門家の協力を得て指導を行っている。各分野の専門分野の特別指導は、あくまで自立活動の目標を実現するための材として、各教科等の内容を取り扱う。分野は、文芸、数学、社会、生物、気象、物理、プログラミング、パソコン、芸能、自己理解、脳科学など多岐にわたり、児童が学びたい分野や内容について、児童と教員、専門家らが協働して学ぶ内容を決める。児童と教員や専門家等との対話により、自分の強み（好き・得意）を中心とした自己理解を深める支援を行うことで、児童が主体的・意欲的に学びに向かう力を最大限に高めることができる。専門分野の特別指導においても「自分のめあて」を意識して学習することで自己の課題に対しても意欲的に向き合い、克服・改善していこうとする主体的な姿を引き出すことができる。

分野	授業テーマ	◎特別指導の内容 主なねらい（○専門分野 ●自立活動）
情報	3Dゲームをつくろう	◎ビジュアルプログラミング言語 Viscuit を使い、プログラミング活動をする。 ○論理的思考、順序立てて考える能力、分析する能力などを育てる。 ●コミュニケーション力、見通した行動、行動の切り替え、援助要請の力をつける。
数学	トポロジーを生活の中で生かそう	◎トポロジーを理解し、生活の中でそれを生かし社会の役に立つ授業。 ○社会に役に立ち生活に生きる算数・数学を学び、数学的思考を身に付ける。 ●課題に取り組む姿勢、援助の発信、グループの協力、行動を修正する力をつける。
社会	偏西風はあるのに、偏東風はないのか？	◎世界の不思議について児童からの疑問・質問に答える授業。 ○世界と日本の違いを考えたり、社会問題の解決策を探ったりすることができる。 ●自己理解、発表、注目傾聴、発言ルール、適切な質問応答、課題へ取り組む力をつける。
生物	生き物の体の仕組みを知ろう	◎横浜の田んぼと池の生物を顕微鏡で確認する。また海の生き物を解剖し描画する。 ○魚の体のつくりと人間の体のつくりの違いや、生物の体の仕組みを理解する。 ●意欲を高め、適切に質問する、役割交換、言語理解を高める。

### 専門分野の特別指導の例

#### 2-4 通級による指導担当教員と通常の学級の担任との連携の工夫

コラボ教室の巡回型指導では、コラボ教室担当が児童の在籍校へ出向き、在籍学級に入り込み、在籍学級担任と協働してチームティーチング支援を行っている。そして対象児童が、本教室の通級型指導で培った社会性や学びに向かう力を十分に発揮できるように、日常生活場面における支援を行う。また、在籍校の特別支援教育コーディネーターを窓口とした連携を図り、当該児童への指導・支援の充実に加え、校内支援体制の構築、拡充につながるよう学校支援を行う。

通級による指導担当教員と在籍校の通常の学級の担任との連携は、窓口を「特別支援教育コーディネーター」とすることが鍵である。通常の学級の担任と直接の連携をしているだけでは、在籍校の校内体制整備や、年度をまたいでのスームズな連携ができないためである。横浜市では各小学校に、特別支援教育コーディネーターを兼務する児童支援専任教諭が1名配置されているため、児童支援専任教諭を中心とした連携を行うことで、児童の校内支援の充実に図ることができる。

また、これまでの通級による指導は、個別性の高い指導・支援が中心であったため、集団性の高い通常の学級における指導・支援とのつながりに大きな課題があった。通級担当が、在籍学級へ入り込み、チームティーチング支援を行うことで、学級全体への支援を行うことが可能となり、環境との相互作用による困難さを抱えることが多い発達障害等のある児童の支援を、環境面を整える視点からも、アプローチができるメリットがある。

巡回型指導の際は、必ず在籍学級担任と児童支援専任教諭との話し合いの時間を、中休みまたは昼休み、または放課後に設定した。在籍学級担任と通級担当との情報交換を、学級内の同じ場で同じ時、同じ姿を観察しながら話し合いを日常的に行うことで、より日常生活に生きる支援について検討し、即導入することができ、お互いの子供理解や支援の優先順位について共通理解をもつことができる。

今後も、通級担当による巡回型指導は、連携する在籍校学年間での情報共有、横浜型特別支援教室への活用、校内における他の児童の支援への応用など、多くの可能性を秘めている。横浜市において、今後、通級担当による巡回型指導の充実に図っていききたい。

## 指導例

○対象児童生徒：小学校４年生　Ｄさん（ＡＳＤ、ＡＤＨＤ）

### ○発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

#### ＜Ｄさんの事例＞

小学校第４学年男子児童Ｄさん（ＡＳＤ、ＡＤＨＤ）の事例。IQの値による知能評価の基準は、平均の上の範囲にある。また、WISC-IV（個別式知能検査）の指標・下位検査の個人内差が大きく、このことが生きづらさや学校適応困難の一因となっていると考えられる。また行動特性に、強みと適応困難を併せもつ児童である。

Ｄさんの強みは、算数が大好きで計算処理能力に長けている。ゲームが大好きで、プログラミングを学びたいという学習意欲がある。もっとレベルの高い算数の問題に挑戦したいと思っている。適応困難な面は、友達とのかかわりをうまくもてず、口論や喧嘩になりがちなことから、学校生活上のストレスをため込んでいる。授業中、うまくいかないことがあると、走って教室から抜け出し校舎内を徘徊することが度々あった。感情のコントロールができず、周りから見ると些細なことで怒ったり泣いたりすることが多く、常に個別的な支援を必要としている状態であった。

４月に、本人の強み（好き・得意）の把握を行い、５月に「プログラミング」「算数・数学」「理科」の各分野の特別指導について、本人との対話により学習計画を立てた。６月以降に、プログラミングの専門家や、中学校数学の教員、気象予報士などに協力を得て、専門分野の特別指導を行う中で、プログラミング言語 VISCUIT を使い、みんなに喜んで遊んでもらえるような「３Ｄゲームづくり」の授業を受けたり、「トポロジーで電車の路線図をつくろう」「フラクタル幾何学で日よけづくり」などの授業で数学を使って身の回りの役に立つことを考えたり、「気象の不思議を身近な道具で解き明かす理科実験」の授業に取り組んだりすることで、低下していた学習意欲や生きる意欲を高め、日常生活の中で強みを活かしながら学びに向かう力を高めることができた。これら個の強みを伸ばす教育を行う過程で、自らが「もっとすねないようになりたい」という自己の課題（自己理解）に関する学びの意識が高まり、本人参加型会議の場で、自分のめあて「いじけないで、まっいいかと、気持ち切り替える。」「やりたいことが途中で、５秒以内に切り替える。」を、本人、保護者、在籍学級担任、特別支援教育コーディネーター、通級指導教室担当者らと共有し、具体的な支援について、皆でアイデアを出し合い話し合った。日常生活の中で、在籍学級担任や保護者、通級による指導担当教員と協力しながら、自分のめあての実現に向けた「自分のための学びプラン」に取り組むことで、行動面と心理面に大きな変容がみられた。

<p><b>①本人のいいところ</b></p> <p>(よさ、得意、好き、がんばり、強み、活躍の機会)</p> <p>○すねないでがまんづよかった。</p> <p>○言葉づかいがていねい。</p> <p>○気がきく。教員や友だちのことも気づく。</p> <p>○友達のよいところをみつけるのが得意。</p> <p>○明るくて元気なところがいいところ。</p> <p>○言葉で気持ちを伝えてくれる。</p>	<p><b>②困っていること</b></p> <p>(願い、気になること、身に付けてほしい力)</p> <p>○言うことを聞かなくて、オレも困っている。例えばゲームの時間とか。</p> <p>○つらいときに、だまって一人ぼっちにならないでほしい。</p> <p>○気がちりやすく、すぐに立つことがある。</p> <p>○友だちとのきよりが、ちかい。</p> <p>○やるべきことはやってほしい (ふろ、はみがきなど)</p>
<p><b>③目標を考える</b></p> <p>(よさをいかし、困りごとへアプローチする)</p> <p>○えんきより友だちになる。</p> <p>○自分の失敗を許す「失敗は成功のもと」</p> <p>○まあいいかと言えるようになるといい。</p> <p>○音がしても話している人のほうを見る。</p> <p>○ゲームとのつきあい方を考える。</p>	<p><b>④目標実現に向けた支援</b></p> <p>(みんなで支援のアイデアをたくさん考えよう)</p> <p>○ぼくが苦手な教科をてっていきに教えてほしい。</p> <p>○すぐにやめる練習をする。すごろくなど。</p> <p>○目標ができたらポイントシールなど工夫する。</p> <p>○まほうのこつば集めをする。 (どんまい、まっいいかなど)</p> <p>○クールダウンの場所を決めておく。</p>

#### 本人参加型会議の記録の一例

年度末の本人参加型会議で、一年間の成長を振り返り、「いじけないで、気持ちを切り替える」ことをめあてとして取り組んできたことで、嫌な事があったときに教員に相談することができるようになり、教室から飛び出すことがなくなってきた。また、「どんまい」「まっいいか」など気持ちを切り替える言葉をうまく使いながら、生活できるようになってきたことを、皆で共有した。次年度の自分の目標や、次年度に目標実現に向けて、してほしい支援について自分から要請する姿もみられ、セルフアドボカシーの力の高まりがあったことも、成長として捉えることができた。

受託機関名：市川市教育委員会

実践事例：小学校

対象教員の通級による指導経験年数 7年（教員の経験年数 19年）

## 1. 通級による指導担当教員の専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制

### 1-1. 専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制との相関図



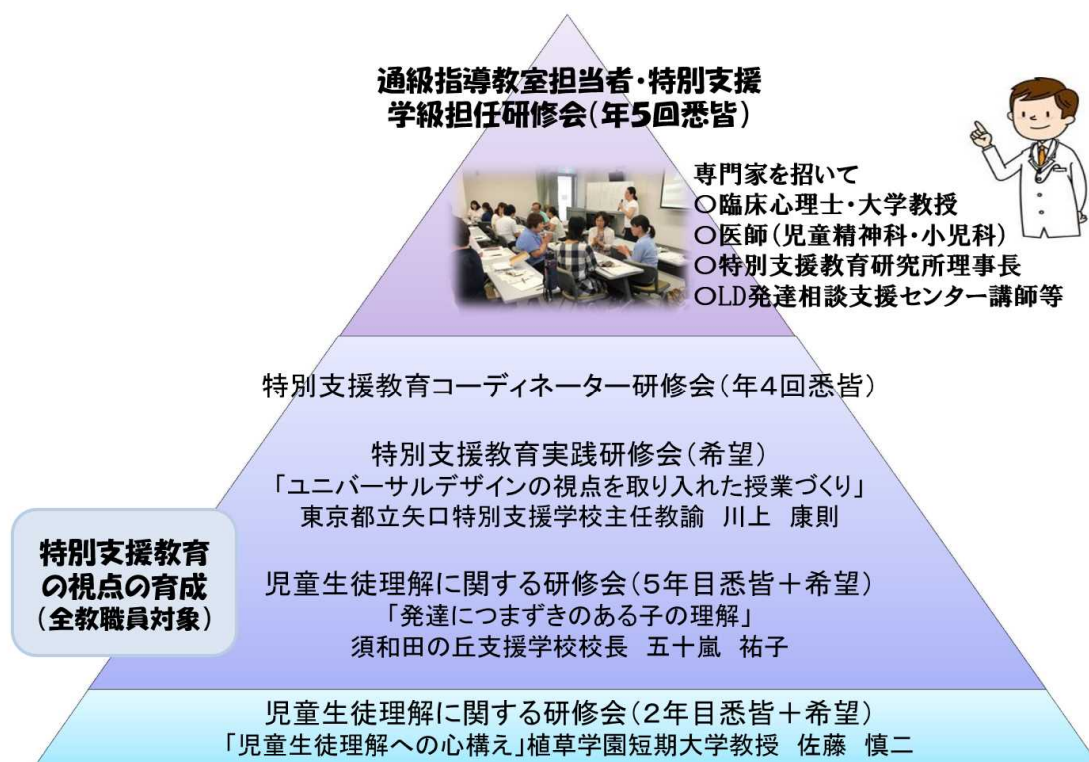
市川市教育委員会

#### 《専門性のポイント》

「通級による指導担当教員」は、通級指導教室においても、校内においても、特別支援教育の専門家としての力量が求められている。そこで、「通級指導専門性充実検討会議」において、下記3点を通級による指導担当教員が身に付けるべき専門性と捉え、研修体制を構築した。

- 「見立てる力」 児童生徒の困難さを見極め、個別の指導計画を作成する力（適切な長期目標、短期目標の設定）
- 「指導力」 児童生徒のニーズに応じた指導力
- 「連携力」 在籍学級担任、保護者、児童生徒を支援する関係機関等と共通理解を深めながら支援を進める連携力

### 1-2. 専門性を高めるための研修体制



＜研修体制の位置づけ＞

特別支援教育の  
視点の育成



専門性の育成

○経験年数に応じた悉皆研修及び特別支援教育実践研修会  
「特別支援教育の基礎となる、児童生徒を適切に理解し支援する力の育成」・・・全教職員対象

○障害種別悉皆研修会 「見立てる力、指導力、連携力の育成」  
・・・特別支援学級担任・通級による指導担当教員対象

○県 悉皆研修会・・・通級による指導担当教員対象

「通級指導者等連絡協議会（年１回）」 実践提案・学校別分科会・協議会

「管内難聴学級等指導力向上研修会（年３回）」 指導上の課題等

○県 希望研修会・・・全教職員対象

「葛南五市共同研修会」各市で開催の特別支援教育関係の研修会

○市川市 障害種別悉皆研修会（年５回）

・・・特別支援学級担任・通級による指導担当教員対象

	自閉症・情緒等担当教員研修会 内容	難聴・言語担当教員研修会 内容
第１回 ５月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室経営、学級経営について（各自作成の経営概要により、年間指導計画、自立活動等の検討）</li> <li>・個別、ペア、小集団の指導</li> <li>・教材、教具の紹介</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室経営について（各自作成の経営概要により、年間指導計画、自立活動等の検討）</li> <li>・吃音、発音、言語発達等について</li> <li>・教材、教具の紹介</li> </ul>
第２回 夏季	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例検討会（児童生徒の見立てと指導方法の研究）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例検討会（児童生徒の見立てと指導方法の研究）</li> </ul>
第３回 夏季	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門家による講演・演習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合理的配慮、在籍校の在籍学級担任との連携</li> </ul>
第４回 10～11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会（指導の検討と協議）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会（指導の検討と協議）</li> </ul>
第５回 ２月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法や在籍校の在籍学級担任との連絡会等</li> <li>・成果と課題</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導法や在籍校の在籍学級担任との連絡会等</li> <li>・成果と課題</li> </ul>

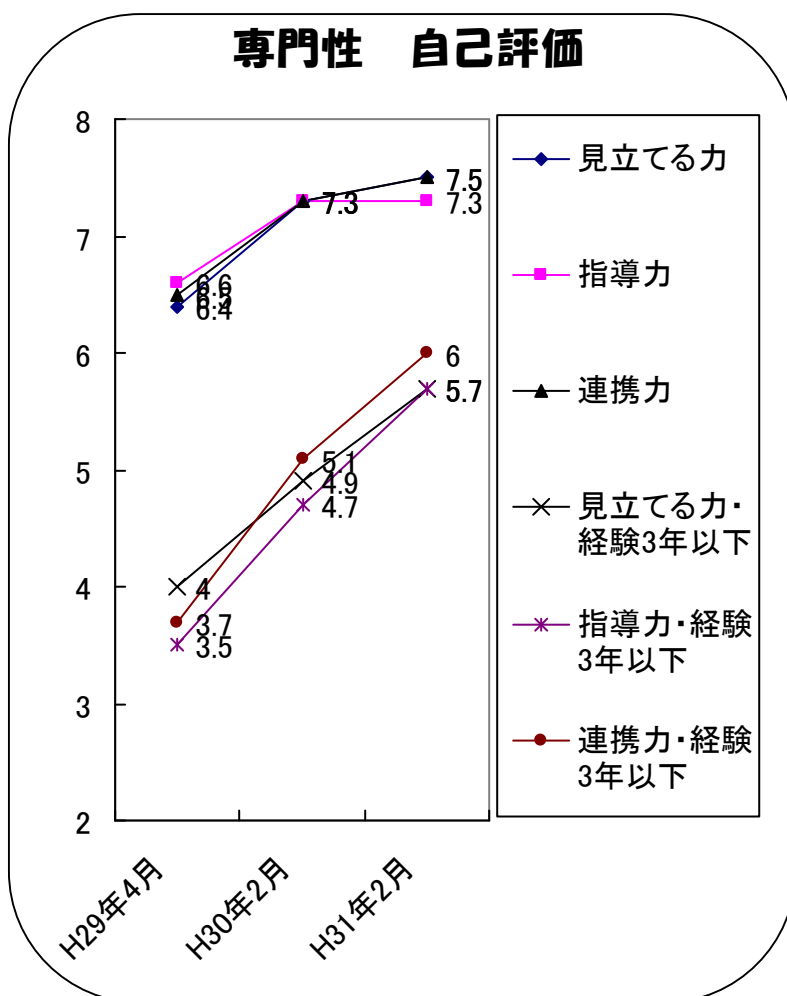
○市川市 希望研修会

	他障害種の研修会 内容
夏季	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見え方きこえ相談会（対象：保護者、児童生徒、教員等） 講師：県立船橋特別支援学校自立活動部 通級指導教室 視覚支援担当教員 聴覚支援担当教員</li> <li>・特別支援学級（知的・肢体）小中合同研修会</li> <li>・難聴・言語教育研修会</li> </ul>

悉皆研修会においては、経験豊富なベテラン教員が司会者や助言者となり、協議の内容を深めていく。また、経験の短い教員は交互に記録者を務め、研修会の内容をまとめることで専門性を育んでいく。希望研修会においては、様々な困難を抱える児童生徒へ対応できる専門性を身に付ける。

## 《専門性の向上の評価》

自己評価シート：「見立てる力」「指導力」「連携力」を通級による指導担当教員が、10点満点で自己採点し、自らの専門性を評価する。



★自己評価シートより  
平成 29 年 4 月

- ・ディスレクシアの実態の見立てが不足
- ・実態把握ができていない(経験 3 年以下)
- ・個別の指導計画作成に時間がかかる(経験 3 年以下)

平成 30 年 2 月

- ・研修を重ねて、見立て→目標→指導に生かした
- ・実態を理解し指導計画を立てることができた(経験 3 年以下)
- ・保護者に具体的に話をするようになった(経験 3 年以下)

平成 31 年 2 月

- ・見立ての参考となるチェックリストの導入を始めた
- ・評価する力がついた
- ・児童をとりまく支援機関と連携をとれるようになってきた
- ・通級による指導の仕組みを理解し保護者との連携が密にとれるようになった(経験 3 年以下)
- ・検査と子供の言動を関連付けて子供を見ることができるようになってきた(経験 3 年以下)

## ○今後の研修体制

- ・教育委員会主催の悉皆研修（年 5 回実施）

通級による指導担当教員への年度末アンケートをもとにし、ながら「見立てる力」「指導力」「連携力」に関わる研修を設定し、その専門性の向上を図る。

- ・希望研修会の開催（他障害種や他市開催の研修会等）

夏季に開催される知的・肢体特別支援学級担任の「小中合同研修会」、県立特別支援学校と連携した「見え方きこえ相談会」、葛南教育事務所管内 5 市で開催される特別支援教育に関する研修会への参加希望を募り、様々な困難さを抱えた児童生徒へ対応できる専門性の向上を図る。



見え方きこえ相談会

### 1-3. 専門性を高めるための研修内容

○研修内容について

【事業で実施した実践例】

《自閉症・情緒等担当教員研修会》

	平成 29 年度 ○内容 ★育成する力	講 師
1	○協議 ★指導力 「特別支援学級、通級指導教室の経営について」	
2	○講演 ★見立てる力・連携力 「子供の感情をコントロールする力を育てるためにはどのように関わればよいか」 ○事例検討会 ★見立てる力・指導力 「通級による指導担当教員全員による 1 事例提案」 小学校・中学校グループ別	東京学芸大学教授  児童精神科医 淑徳大学准教授
3	○講義・演習 ★見立てる力 「WISC-IVの結果を活用した児童生徒の特性理解」 ○講義・演習 ★指導力 「読み書きのつまずきに関する支援、指導法について」	臨床心理士  はなみずき特別支援教育 研究所理事長
4	○授業研究会 授業参観・協議 ★見立てる力・指導力 「中学校自閉症・情緒等特別支援学級 自立活動 ～いごごちのよいクラスづくり～」	NP0 法人空の色はそらいろ代表
5	○協議 ★指導力 「個別指導、グループ指導について」 「個別の指導計画の書き方」「教材・教具の紹介」	

	平成 30 年度 内容 ★育成する力	講 師
1	○協議 ★指導力 「特別支援学級、通級指導教室の経営について」	
2	○講義・実技 ★指導力 「SST プログラム作りと課題設定のコツ～子供が夢中になる指導～」 ○事例検討会 ★見立てる力・連携力 「通級による指導担当教員全員による 1 事例提案」 グループ別検討会 ①小学校通級指導教室担当・小学校特別支援学級担任 ②中学校通級指導教室担当、③特別支援学級担任	NP0 フトゥーロ LD 発達相談支援センターかながわ講師 淑徳大学准教授 立正大学名誉教授 船橋市立湊町小学校教頭 (元通級による指導担当教員)
3	○講義 ★見立てる力 「発達障害と社会的不適応～不登校と暴力的言動とは～」 ○講義・演習 ★指導力・連携力 「読み書きでつまずいている子供へのアセスメントと支援について」	神奈川大学大学院講師・臨床心理士 はなみずき特別支援教育 研究所理事長

4	○授業研究会 ★指導力・連携力（卒業生・保護者） 「通級指導教室における高学年グループ学習～子供たちが適切な進路を考えられる指導とは～」	小児科医
5	○講義・実技「身体の動きの指導」 ★指導力 ○講義「在籍学級担任との連絡会について」 ★連携力	拠点校通級による指導担当教員 通級による指導担当教員

《難聴・言語等担当教員研修会》

	平成 29 年度 内容 ★育成する力	講 師
1	○協議 ★指導力 「特別支援学級、通級指導教室の経営について」 「『発音に誤りのある子』への声かけについて」	
2	○講義（VTR 視聴）★指導力 「聴覚障害児の理解と指導」 ○提案・協議 ★見立てる力・連携力 「小学校ことばの教室、きこえの教室との連携について」	難言アドバイザー（元難聴言語教室担当教員） こども発達センター相談室・言語聴覚士、幼児ことばの教室教員
3	○協議 ★見立てる力・連携力 「ことばの育ちについて」「在籍学級担任との連携」	
4	○授業研究会（VTR 視聴） ★指導力 「ことばの習得・発達の促し A さん」「コミュニケーションの適正さの習得 B さん」「コミュニケーション意欲の育み C さん」	難言アドバイザー（元難聴言語教室担当教員）
5	○協議 ★見立てる力・指導力 「片耳難聴について」	

	平成 30 年度 内容 ★育成する力	講 師
1	○協議 ★指導力 「特別支援学級、通級指導教室の経営について」 「吃音について」	
2	○事例検討会 ★見立てる力・指導力 「いろいろな課題をあわせ持つ子供の教育的診断と指導について」 ○講義 ★見立てる力 「“困難さ”の本質を見極めよう」	小児科医
3	○協議 ★見立てる力・連携力 「合理的配慮について」「在籍学級担任との連絡会」	
4	○授業研究会（通級による指導 VTR 視聴）・協議 ★指導力 「吃音のある児童の指導」	幼稚園教頭（前幼児ことばの教室教員）
5	○協議 ★見立てる力・指導力 「言語発達について」	

【事業で実施した実践例を踏まえた今後の研修内容】

### 《見立てる力の育成》

年度末に実施した通級による指導担当教員へのアンケートで、要望の多かった専門家からのスーパーバイズ「事例検討会」を、十分に時間が確保できる夏季休業中に設定し、各校の事例について助言をいただいた。

日頃の指導の中で、個々の実態をとらえ、課題を設定する「見立て」は、通級による指導担当教員に任せられており、各担当教員の「これでいいのか」という自問自答に應えるために、医療機関や大学等より、専門家を招いた「事例検討会」はなくてはならない研修である。

また、児童生徒が医療や療育施設、教育センター等で受けた各種検査結果を読み解き、児童生徒の個別の特性を理解し、具体的な支援を考え、指導に生かす力も通級による指導担当教員には求められている。そのため、臨床心理士等からの WISC-IV などの検査の理解と読み取りの研修もまた必須である。



### 《指導力の育成》

情緒等通級指導教室担当教員だけでなく、難聴言語の通級指導教室担当教員からも、児童生徒の実態に応じた「読み書きのつまずき」への指導法を学びたいという要望は多い。

はなみずき特別支援教育研究所の理事長から学んだアセスメントと指導法は、29 年度の研修以降、拠点校の平田小研修会においても引き継がれ、継続的に学ぶ機会を確保した。



### 《連携力の育成》

【在籍校の在籍学級担任との連携】

教育委員会より在籍校と通級指導教室設置校に依頼文を送付し、出張扱いとする「在籍学級担任との連絡会」を年3回設定した。連絡会の機会を確保することが、在籍校の在籍学級担任にとって、児童生徒への理解を深め、効果的な指導につながった。

◇日常の情報共有・・・電話やメール、連絡帳のやり取り

◇お互いの学習場面の様子を知る・・・学級だよりの交換、**連絡会の開催（年3回）**

【保護者との連携】

保護者との連携の重要性や面談について、専門家（医師や心理士等）や経験豊富な担当教員からの具体的な助言は、経験年数の短い担当教員にとって価値ある学びとなった。

◇初回面談、定期的な面談、通級による指導の時に行われる短いやり取り、保護者からの訴えに応じた面談・・・主訴の確認、逐次説明、具体的な支援の情報の伝達等

◇対話の三本柱・・・「よく聞くこと」「共感を示すこと」「励まし、支えること」

◇目指すのは「子供の自立を支援すること」

## 1-4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った工夫

### 《通級による指導担当教員のためのハンドブック作成》

#### 【目 的】

本事業の研修会の成果と、これまで培ってきたベテラン通級指導教室担当の経験（専門性）を、「市川市版 通級指導教室ハンドブック」にまとめ、通級指導教室の担当教員の育成及び在籍学級担任との連携に役立てる。



#### 【内 容】

平成 29 年度版は通級指導教室の対象者、通級による指導の内容、時間、指導形態、特性に応じた指導等の基本編とした。平成 30 年度版はさらに「個別の指導計画」の書き方、在籍学級担任や保護者との連携等を追加した。

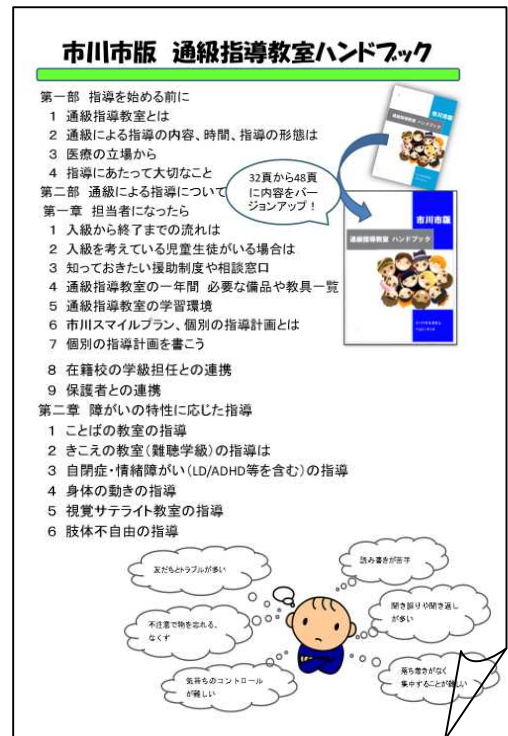
#### 【活 用】

市内小学校、中学校に 5 部、公立幼稚園、保育園に 1 部、また関係機関等に配布し、通級による指導担当教員の専門性向上とともに、市内各学校において、理解を深め、連携を進めるために活用を図る。

#### 【通級による指導担当教員の感想】

・ 4 月の在籍学級担任との連絡会や通級指導教室を知りたいという保護者との面談で活用した。わかりやすいと好評だった。

・ 初めて、通級による指導担当教員になったので、読んで大体のことがわかり安心した。在籍学級担任への支援の際にも活用し、通級による指導について知って頂いてから、在籍学級担任と連携をとることができた。



### 《専門性育成のための悉皆夏季研修会を「在籍学級担任も希望可能な研修会」に設定》

通級指導教室の新設に伴い、通級指導教室を担当する教員の育成は喫緊の課題である。そこで、通常学級の教員にも、希望により夏季開催の「発達障害と社会的不適応」「読み書きでつまづいている子供へのアセスメントと支援について」「SST プログラム作りと課題設定のコツ」などの研修会を参加可能とし、特別支援教育のキャリアアップを図ってもらった。

#### 【在籍学級担任の感想】

- ・ 昨年度担任した子が「ここでつまづいていたのだ」とわかり後悔した。勉強になった。
- ・ 障害について自分自身がもっと知るべきだと感じた。
- ・ 生徒の特性を理解し適切な対応をしなければと思う。生徒を第一に考えていきたい。

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例】

○学校種：小学校

○通級による指導の経験年数 7年

○教員の経験年数 19年

### ○事業開始前までに受けた研修内容

- ・千葉県通級指導者等協議会
- ・千葉県教育委員会が主催する研修
- ・市川市教育委員会主催 自閉症・情緒障害担当教員研修

### ○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けなかった専門性

特別支援学校を経験し、知的障害、肢体不自由教育等の専門性を高める研修を積み重ねてきた。通級指導教室の担当になり、発達障害について一般的な知識や効果的な支援の理解に努め、指導を行っている。しかし、通級指導教室の経験が少ないため、読み書きの困難な児童の実態把握と指導方法について専門性を身に付けることが必要であった。

### ○教員にとって役立った研修・指導の内容

#### ＜読み書きでつまづいている児童のアセスメントと支援＞

自閉症・情緒等担当教員研修会において、はなみずき特別支援教育研究所理事長により児童の実態把握と支援方法について、具体的に学んだ。実際にアセスメント（音読検査、音韻検査、聴写課題）を行い、指導に生かすことができた。

#### ＜ICT機器の活用に関する研究＞

大学助教授から効果的なICTの活用について研修を受けた。タブレット端末を利用し、コミュニケーションや学習に生かせるアプリや活用方法を知ることができた。



#### ＜臨床発達心理士による事例検討＞

児童の実態把握、目標設定、指導内容、評価について、学校・家庭・医療からの情報の整理方法を学



んだ。児童の困っている状況の背景などを様々な視点で捉え、事例を検討することが有意義であった。また、通級指導教室の担当教員は各校1人であるため、日々の指導の悩みや連携についてアドバイスをいただいた。

#### ＜放課後等デイサービスの代表、一般社団法人読み書き配慮の代表による研修＞

発達特性のある当事者の母からの立場と、発達に課題をもつ子供たちの療育をする立場の、両視点から読み書き支援を中心に研修を受けた。保護者からの思いを直接聞くことができ、当事者や家族の思いを知ることができた。

## ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

### ＜連携について＞

児童は学校生活の大半を在籍学級で過ごしているため、情報交換は重要である。どのような課題があるのか、その課題にどのように対応していくのか保護者、在籍学級担任、通級指導教室担当教員で情報を共有し、一緒に考えていくことの重要性を理解できた。通級による指導の開始時、開始後の連携について、通級指導教室担当教員の役割を明確にできた。

### ＜読み書きでつまづいている児童の支援について＞

発達検査の結果や保護者、在籍学級担任からの情報を収集する他に、読み書きの指標を使って現状を把握するアセスメント方法を学んだ。客観的評価を考察し、それをもとに児童が興味関心を持てるような指導に反映させることができた。

## 2-1 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

### (1) 実態把握

児童一人一人の発達段階や実態に応じた指導を行うためには、保護者や在籍学級担任との連携が不可欠である。連携によって共通理解を図ることができ、指導目標や対応方法等が明確になる。また、保護者の思いや願いを共有することができ、今後の支援の見通しをもつことができるようになる。

取 組	内 容
<b>【通級による指導の開始時の実態把握】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通級による指導の開始の主訴を確認し、児童がどのような姿に成長してほしいと願っているのかを丁寧に聞く。これが課題を克服した児童のイメージ像であり、指導終了の目安にもなる。</li> </ul> <div> <b>【資料の確認】</b>            ○ライフサポートファイル○成育歴○療育記録            ○発達検査等○関係機関等         </div>	<b>○確認事項</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の思いや願い</li> <li>・これまでの経緯 (発達過程、療育、相談歴、教育歴等)</li> <li>・学級の様子、困っている状況</li> <li>・発達検査等</li> <li>・通級指導教室の指導終了時の目標設定</li> </ul>
<b>【通級による指導開始後の実態把握】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校入学後の学校生活について、どのような困っている状況があるのか、児童、保護者のニーズを受け止める。</li> <li>・関係機関等（病院、放課後等デイサービス、習い事等）の情報を共有する。</li> </ul> <div> <b>【資料の確認】</b>            ○個別の教育支援計画○関係機関            ○発達検査等         </div>	<b>○保護者面談</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童、保護者のニーズ</li> <li>・個別の教育支援計画 個別の指導計画の確認</li> </ul> <b>○担任連絡会</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・在籍学級の様子を確認</li> <li>・在籍学級訪問</li> <li>・通級による指導後の連絡</li> <li>・相談</li> <li>・連絡帳</li> <li>・電話など</li> </ul>



## (2) 指導目標の設定

在籍学級と通級指導教室の指導について、役割を明確にしなければならない。児童の得意なことやできることに目を向けながら目標を立てること、肯定的な目標設定が大切である。自立活動の項目の中から最優先項目を選定し、指導に必要な内容を決定した。

## (3) 適切な評価

通級による指導の中で、学期ごとに児童によるチェックシートの評価を実施している。個別の指導計画において設定した長期目標・短期目標に対しては保護者、在籍学級担任と振り返りを行った。通級指導教室で学習したことが在籍学級で般化できているか、在籍学級担任と確認をし、達成できなかった目標に対しては手立てを再検討して情報を共有している。

## 2-2 通級による指導担当教員と在籍学級の担任との連携

在籍学級担任とどのような課題があるのか、その課題にそれぞれの学習の場でどのように対応していくのかを一緒に考えていく必要がある。通級指導教室は1年間に3回の在籍学級担任との連絡会を教育委員会が主催し、開催している。その他必要に応じて、連絡を取り合い、児童について同じ方向性で支援を行えるように心がけている。

### 第1回 連絡会

＜4月 在籍学級担任と通級による指導担当教員との顔合わせ＞

#### 【通級による指導担当教員から】

- ・ 通級による指導の時間の確認と通級による指導への協力をお願いをする。
- ・ 年度初めの在籍学級での様子を確認する。
- ・ 在籍学級での配慮や手立てについて情報提供を行う。

### 第2回 連絡会

＜6月から9月ごろ 個別の指導計画の内容の確認＞

#### 【協議】

- ・ 個別の指導計画について確認をする。
- ・ 学級での様子を聞く。
- ・ 合理的配慮について話し合う。

※在籍学級担任からの要望があれば、個別の教育支援計画の作成や確認作業を行うこともある。

### 第3回 連絡会

＜秋ごろ 通級による指導担当教員が在籍学級での学習の様子を参観・協議＞

#### 【参観】

- ・ 挙手や発言、話の聞き方、一斉指示の理解及び自己表現、座位姿勢等、学習への取組の様子を参観する。
- ・ 学活や学習準備、掃除等の活動を参観する。(休み時間の過ごし方、学級の中の

存在感、交友関係等)

- ・ロッカーや引出し等の持ち物の整理、図工美術・習字の作品や個人ファイルの文章等を確認する。
- ・給食の食べ方(咀嚼の様子、偏食、友だちとの交流の様子)。

【協議】

- ・前回の連絡会や日常生活のやり取りで話題になっていたことのその後を確認する。
- ・集団での学習の様子から、個別の指導の成果が表れていることや課題として残っていることなどを話し合う。
- ・在籍学級担任のニーズの確認と在籍学級の対応に必要な情報を提供する。

◇日常の情報共有・・・電話や市川市の統合型校務支援システムのメール機能を活用。連絡帳のやり取りをする。

◇お互いの学習場面の様子を知る・・・学級だよりの交換

※「市川市版 通級指導教室ハンドブック」P22 在籍校の学級担任との連携より  
(千葉県市川市教育委員会ホームページよりダウンロードできます。)

受託機関名：山形県教育委員会

実践事例：対象教員の通級による指導経験年数4年（教員の経験年数20年）

指導例：高等学校3年生

## 1. 通級による指導担当教員の専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制

### 1-1. 専門性のポイント

- 生徒の実態を的確に把握し、効果的な自立活動を行うためのアセスメントができる。
- 小中高の校種間の連携による継続性のある指導ができる。
- カリキュラム編制や単位の認定の在り方についての知識を持つ。

### 1-2. 研修体制について

本県では、通級による指導の担当者を対象とした研修を下記のとおり行っている。

#### (1) 通級指導教室新担当者教員基礎研修（年1回）

通級指導教室の担当1年目の教員を対象とし、特別支援教育に関する基礎的な知識や通級による指導及び通級指導教室の経営等について学び、担当としての意欲と指導力の向上を図ることを目的として、5月に2日間の日程で実施している。

令和元年度の研修では、1日目に「通級による指導について」「発達障害の理解と対応」についての基礎的講義を行い、2日目に「教室経営と授業実践」として、実際に通級による指導を行っている担当教員による実践事例の紹介等を交えながら行った。

#### (2) 通級による指導担当者連絡協議会（年2回）

LD、ADHD通級指導教室を担当している教員を対象とし、通級による指導の担当者の養成及び資質向上、また、通級指導教室設置校の学校教育支援体制の充実を図ることを目的として、6月と10月に実施している。

研修は、第1回で講師を招いた研修会と分科会に分かれての事例検討を行い、第2回で、実際に通級による指導を参観した後に、授業研究会を行い、その後、講師からの指導助言を受ける内容となっており、2回に分けて理論と実践を研修できる体制を構築している。事後アンケートを活用して、研修の評価も行っている。

小学校から高等学校までの他校種を交えることや、さまざまな経験年数（義務教育段階）の担当教員がそれぞれの知見を交わし研修することにより、実践力を向上させるための非常に有意義な研修となっている。

なお、高等学校の通級による指導は、平成30年度からの導入ということもあり、教育委員会としての研修体制は毎年見直しを行いながらすすめている段階である。義務教育段階の教員に向けた研修体制をベースとしながらも、高等学校における通級による指導をより効果的に行うための専門性の向上が図れるよう、実際に担当す

る教員の現状も踏まえたうえで検討している。

### 1-3. 事業で実施した研修例

#### 【事業で実施した実践例】

##### (1) 校内研修会

本事業で、高等学校における拠点校で校内研修会を実施した。2拠点校において計3回行い、拠点校の通級指導教室担当教員の他、管理職をはじめ全教職員を対象とした専門性向上のための講話等を開催した。また、県内の高等学校や通級指導教室設置校への公開研修会とすることで対象者を幅広に行うことができた。

日	拠点校	講師	内容	外部参加者
5月28日	新庄北高等学校最上校	隣県大学教授 (教育学部)	高等学校における通級による指導での発達障害のある生徒への支援	5名
11月14日	新庄北高等学校最上校	隣県大学教授 (特別支援教育講座)	発達障害のある生徒の理解と「通級による指導」への期待	10名
12月27日	霞城学園高等学校	隣県大学教授 (教職大学院)	高等学校におけるインクルーシブ教育システムの構築	19名

高等学校の拠点校は2校であるが、通級指導教室の設置年度が異なることなどから、取組状況や課題はそれぞれ異なっているため、各校の状況に応じた研修内容とした。例えば、通級指導教室を今年度から設置した霞城学園高等学校では、インクルーシブ教育の考え方の理解啓発を目的とした研修内容であったのに対し、通級指導教室が既に設置されていた新庄北高等学校最上校では、校内の全教職員の通級による指導への理解が進んでいるため、1回目の研修では通級による指導の実際の効果と、その効果を通常の学級で生かすための支援という点に重点を置き、2回目の研修では、「ワーキングメモリー」や「同時処理・継続処理」といった認知の仕方について扱う研修内容となった。

このように、拠点校ごとのニーズに合わせた研修会を開催できたことにより、自校の教員の通級による指導の専門性の向上に大きな効果があった。また、教員間の連携の強化を図るためには、通級指導教室担当教員以外の教員が、通級による指導を適切に理解することが非常に重要であるが、拠点校において、全教職員を対象に研修を実施したことは、全教職員の特別支援教育に関する理解を促進することにつながり、非常に有効であった。

さらに、公開研修としたことで、県内の他の学校の教員の参加も多数あった。高等学校における通級による指導が導入されて間もないこの時期に、実際に通級による指導を実践している高等学校で公開研修を行うことにより、その様子を発信することもでき、県内全体への理解啓発に大いに役立った。

#### 1－4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った取組

- ・新規に開設する高等学校に、特別支援学校経験者の教員を配置した。
- ・高等学校特別支援教育コーディネーター養成研修会において、通級による指導についてもふれ、校内における全教職員の適切な理解を促した。
- ・外部専門家として、作業療法士が通級指導教室を訪問し、実際の授業参観を通して、指導助言を行った。
- ・『「通級による指導」について』の教職員向けのリーフレットを作成し、県内の公立の小学校、中学校、高等学校の全教職員の他、特別支援学校や私立高等学校に配布し、通級による指導の理解啓発を図った。  
優良な事例について指導の参考とできるように、通級による指導の実践事例集を作成し、通級指導教室設置校や特別支援学級設置校、全高等学校等に配布して周知を図った。
- ・通級指導教室の経営にいかせるよう、高等学校用の個別の教育支援計画、個別の指導計画の参考様式を作成し、各校に紹介した。

#### 1－5. 今後の研修体制

現在の研修体制をより有用なものにするには、高等学校において通級指導教室の担当教員が複数名おり、経験年数を積んだ担当教員がいることで、通級による指導の指導方法や指導効果について情報交換できる環境が整うことが重要となる。教育委員会として、高等学校の通級による指導を拡充すること、及び特別支援教育に関する適切な校内体制づくりが進むように働きかけていく。

さらに、通級による指導の理解を含め、教員が身につけるべき発達障害に関する専門性の向上について、明確な指標を目的に据えた研修の実施が大切となる。教育委員会主催の研修会であっても、校内研修会であっても、指標を明確に示すことにより、目的に合った研修内容が生まれ、また、受講者も目的意識を持って参加できるように、改善していく必要がある。

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例】

○通級による指導の経験年数：4年

○教員の経験年数：20年

### ○事業開始前までに受けた研修内容

特別支援教育校内研修会

「ちょっと気になる子の理解と支援」（主催：山形県教育庁義務教育課特別支援教育室）

講師：土田 玲子氏（作業療法士 広島大学名誉教授 発達障害ネットワーク理事）

「発達に遅れや偏りがある子どもの支援～自尊感情と幸せに生きる力～」（主催：山形県教育委員会）

講師：安部 博志氏（筑波大学付属大塚特別支援校 主幹教諭）

※文部科学省指定事業「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」（平成27年～平成29年）で実施

### ○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

事業実施前に身に付けていた専門性

- ・発達障害の生徒の理解と対応について
- ・自立活動の指導内容について
- ・自立活動の個別の指導計画の作成について

身に付けたかった専門性

- ・学校全体で取り組む通級による指導の大切さ
- ・生徒の実態把握を丁寧に学校全体で行うこと
- ・卒業後の自立を見通したうえで、今身につけるべきことと自立活動を通して学習することを整理し、指導目標を立てること
- ・外部機関との連携について

### ○事業実施中に受けた研修内容

- ・学校全体で取り組むための特別支援教育の研修

複数回の校内研修を通して、学校の教職員全体で専門性を高めることができた。

そのことにより、校内委員会等の機能を向上させることができた。

- ・専門性充実検討会議（本事業の県内の拠点校が集い研究の成果や課題を検討、共有するため県教育委員会が主催した会議）を通じた他校種との情報共有

高等学校入学前の義務教育段階で、どのように通級による指導が行われているのかを把握することは、高等学校の通級による指導の内容を考える際に、学びの連続性の観点からも重要である。会議を通して義務教育段階における取組を知ることができ、高等学校における取組の参考にすることができた。また、高等学校の

通級による指導の情報を発信することにより、卒業後を見据えた義務教育段階の通級による指導の内容を考える際の参考にしてもらうこともできた。

### ○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

- ・ 外部専門家や外部講師の専門的な知見からの、通級による指導の対象となる生徒へ指導の観点を助言いただいた。例えば、「過去の出来事との向き合い方」を指導する際の観点や、対象生徒への理解を深め今後の通級による指導の指針を考えるためのアドバイスが挙げられる。

### ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

本事業前に、通級による指導で何をすべきかの理解、生徒に関する障害の状態、長所や課題などの情報収集の仕方、収集した情報について学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から自立活動の区分に即して整理する方法等は身につけることができていた。

平成 30 年度から令和元年度の本事業を通して、外部専門家や町の福祉課などの関係機関の方の指導や助言が、指導方法を検討する際に非常に有用であることを知った。例えば外部専門家からは、「学校で行うべきこと」「医療で行うべきこと」の区分や生徒理解に関してのアセスメントの視点等の助言をいただいた。福祉課からは、「雇用体制」や「年金」等福祉に係る社会体制の助言をいただいた。このように関係機関と連携することにより、生徒の卒業後の社会生活もより具体的にイメージすることができるようになり、多角的な視点から現在の指導方法の見直しや、より効果的な自立活動の内容の検討を行うことができた。

また、全教職員が通級による指導について理解を深めること、情報を共有することは、学校全体で通級による指導の体制づくりを行うにあたり非常に重要なことである。特別な支援を必要とする生徒への接し方、関わり方等の専門性を身につけることにより、共通した対応ができるようになったり、通級による指導を受ける生徒の特性や通級による指導の目標を共有することにより指導内容の般化をすすめることができたりする。そのためにも、定期的な校内研修の場は有効であり、さまざまな学習場面で、多角的な視点で生徒を捉えていくことができるようになったことで、適切な実態把握につながった。

## 2-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

### 2-1-1. 実態把握

対象生徒の障害や特性、課題について丁寧に情報収集し、その情報を自立活動の6区分27項目に即して整理しながら、優先すべき課題を導き出し、指導目標を設定する。そして、目標の達成に向けた具体的な指導内容を決めていく。指導計画は学期ごとに立てるようにし、生徒の状態や学習の効果をその都度計画に反映できるようにしている。

なお、実態把握に際しては、通常の学級における困難さの克服につながるよう全教職員がチェックリストを提出した。そのことにより、対象生徒を多角的な面で捉えることができ、一層効果的な実態把握につながる。

下記に実態把握のためのチェック表の例を示す。

【全職員による生活チェック表】

		番号	1	2	3
<ul style="list-style-type: none"> <li>・該当する項目に○をつけてください。</li> <li>・基準は「気になる」でお願いします。</li> </ul>		氏名			
読む	読み飛ばしや、読み違いが多い				
	文で記述してある内容理解が困難である				
書く	字の形がうまくとれない、判読が難しい字を書く				
	板書を写すのに極端に時間がかかる				
	文法的に正しい文章で記述することが出来ない				
聞く	一度に複数の指示が聴き取れず混乱する				
	書けば覚えられるが口頭の指示は覚えていられない				
話す	たびたび言葉につまり「その」「あの」になる				
	文法的に誤りの多い不完全な話し方をする				
	事実を関連づけて述べるのが困難である				
	知識は豊富だが一方的に話す				
推論	因果関係の理解が困難で早合点や飛躍した考えをする				
	順序立が出来ず先の予測が立ちにくい				
集中	注意を集中することが難しい				
	人が話していても割り込んでくる				
	注意しても多弁が止まらない				
社会性	友人関係の持ち方が下手で孤立しやすい				
	自分の仕事に対して責任を取ることが出来ない				
	約束事や提出物など注意されてもやり遂げられない				
	片付けられず、忘れ物や物を無くすことが多い				

	自己抑制の未熟さからトラブルになりやすい			
	ニュアンスが分からない 空気が読めない			
	冗談を額面通りにうけとってしまう			
協 同 運 動	全身運動がぎこちない			
	左右や方向の指示を聞いても的確に行動できない			
	同じ姿勢を保っていることが難しい			
手 洗	極端に手先が不器用である			
自 立 活 動	清潔を心がけることができないことが多い			
	情緒が不安定なときがある			
	状況を理解して変化に対応することが難しい			
	落ち着きがない			
	目立つ行動を好む			
	自分の考えに固執してしまうことが多い			

## 2-1-2. 指導目標の設定

高等学校段階の通級による指導は、生徒が「社会自立」を目前に控えているという視点に立ち、丁寧な実態把握に基づいて、生徒個々に応じた目標を設定することが必須である。卒業後の自立を見据えた長期的な目標に加え、生徒のその時その時の状態に応じた指導が行えるように、短期的な目標を設定することが重要となる。

手順としては、実態把握ののち、生徒の課題を自立活動の区分に即して整理する。そこから優先する課題を導き出し、指導目標を定める、である。

設定された指導目標について、その達成に向けて必要な事項を整理し、具体的な指導内容を決定していく（下記指導例参照）。

## 2-1-3. 適切な評価

評価に際しては、短期目標に対して、生徒がどのように変容していったかを適切に評価する個人内評価が大切となる。加えて、通級指導教室担当教員の判断だけでなく、多くの評価者の目を通した客観的な評価も、生徒を多角的な面から評価するという点において重要となる。

下記に、評価計画の例を示す。

4月 個別の指導計画と1学期の単位時間ごとの指導内容・目標を設定。

8月 毎時間の記録を参照しながら、個別の指導計画の目標や自立活動の6区分に即して整理した課題と照らし、評価する。指導内容の振り返りを行い、目標の見直しを行い2学期の計画を立案。

12月 1学期と同様にし、3学期の計画を立案。

3月 個別の指導計画の目標や自立活動の6区分に即して整理した課題と照らし合わせ、できたこと・できなかったことを評価し、次年度に引き継ぐ。

\* 教職員全体からの情報提供や情報共有なども大切にし、校内の生活全体から評価していく。

## 2-2. 通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

校内委員会を有効活用することが、連携に効果があると考えられる。例として、全教職員に校内委員会の報告をする際に、通級指導教室の状況についても報告するということが挙げられる。先に述べたとおり、実態把握の段階から全教職員に関わってもらうことで、通級による指導の指導内容の報告やそれに伴う生徒の変容等も随時共有することができるため、通常の学級での教科指導やホームルーム活動での指導にも活かすことができる。情報共有のツールとして個別の教育支援計画があるが、自立活動の区分に即して、実態把握から具体的な指導内容を設定するための整理表の作成方法等、通級による指導の担当教員が知り得る知識を、校内の教職員にも知ってもらえるよう、校内研修会等を有効に活用していく必要がある。

また、学校の規模が大きくなればなるほど、全教職員で情報を共有することに困難さも生じる。その場合の有用な手立てとして、「通級指導教室通信」のような、情報の配信が挙げられる。通級による指導の内容等を、個人情報に配慮しながら教職員で共有することにより、教科指導、ホームルーム活動での指導、部活動指導等、様々な学校生活の場面で、全教職員が連携して取り組むことができる。

併せて、外部専門家の指導助言を聞く際に、通級指導教室担当教員以外の教員が相席し、生徒の情報や支援の有効な方法を聞き、共有することも、校内の連携を密にするうえで非常に有効であった。

上記の例からもわかるように、担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携には、通級による指導の情報を積極的に発信し、共有していくことが重要である。

## 指導例

○対象生徒：高等学校3年生

### 1. 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

#### (1) 指導目標、指導内容の設定

障害名等：広汎性発達障害・精神発達遅滞・多動

#### 〈実態把握〉

障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境について情報収集した内容（ICF）

収集した情報を自立活動の区分に即して整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入院。</li> <li>・薬の服用で少し改善傾向。</li> <li>・異性への興味が強い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が興奮してきたことが分かり、自らクールダウンに行く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・以前より家族関係が改善傾向にある。</li> <li>・友達と過ごす時間はふえたが、異性への接し方は注意が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正確な作業ができない。ウロウロしていることが多い。</li> <li>・偏った内容の小説を持ってくる等奇異な行動をすることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アニメが好きで、絵を描くことが得意。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のことを話し始めると止まらない。</li> <li>・職員室へ来て、様々なことを報告しにくる。</li> </ul>

幾つかの指導目標の中で優先する目標として

指導目標	<p>○社会生活上のルールを理解し、周囲の人と適度な行動をすることができる。</p> <p>○自分のライフプランを明確にすることで、実現するための必要なスキルを身につけることができる。</p> <p>（ロッカーや机、ワーク等の整理整頓、提出物の期限を守る、正確な作業の継続、薬の服用等）</p>
------	---

指導目標を達成するために必要な項目の選定

〈選定された項目〉

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること	(1) 情緒の安定に関すること	(2) 他者の意図や感情の理解に関すること (3) 自己の理解と行動の調整に関すること	(2) 感覚の認知の特性への対応に関すること	(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	(1) コミュニケーションの基礎能力に関すること (2) 言語の受容と表意に関すること

<p>○自分の特性を理解することができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自己について知る。</li> <li>・健康状態の維持と生活習慣の形成</li> </ul>	<p>○ライフプラン作成を通して将来のイメージを持つ。</p> <p>○パーソナルスペースの確認。</p>	<p>○作業課題を通して、基本的な巧緻性を身につける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験活動 (清掃、ファイル整理等、折り紙等)</li> </ul>
--	---	---

(2) 指導事例

①個人の学習（１５分）…最近の生活状況・手先の巧緻性（折り紙を使って）

②全体学習（３５分）…「ライフプランシートを作成しよう」

目標：「１０年後、２０年後の意味を理解し、将来のイメージしたことを書き出し必要なスキルを考えることができる。」

・学習プリントを使用（資料参照）

・授業の流れ

ア ライフプランシートを作成する。（資料参照）

イ 前回と変化した点や目標達成のための必要なスキルを発表する。

※就職を控えていることもあり、スキル内容も希望の就職先を意識した内容になっていた。

※家族と進路について相談したことも書かれている。

ウ 教師のアドバイスを受たり、疑問点について質問したりする。

※教師と、必要なスキルを身に付けるために「実生活でどんなことをしていくのか」について話す。

エ 今できることの確認やその日の授業の反省・感想を発表する。

※進路と関連させながらプランを立てていた。

### (3) 成果

- ①ライフプランシートを作成することで将来を現実的に考えるようになり、どこでどんな職業に就きたいのか明確になった。また、家族にも自分の希望を伝えるなど積極的な姿勢がみられ、進路選択にも効果的だった。
- ②漠然としていた必要なスキルが、職業（介護職）を意識したスキルに変化しより具体的（介護の資格取得、指導助言を素直に聞き入れる力、細かい手先の動き、体力作り等）になった。
- ③職業やスキルだけでなく、生活全般に渡って将来をイメージするようになった。

### (4) 課題

- ①自立活動の視点・特別支援教育に関する有識者の意見を常に確認して指導を継続していく必要がある
- ②現状の実態把握を行いながらも、様々な可能性を見据えた卒業後の目標を検討し、指導内容を吟味していく必要がある。

## ライフプランシートの作成

(4月)

内容	20歳	30歳	40歳	50歳	60歳～
仕事	就職(介護)	→			
家族	結婚(介護)	→			
趣味	家のコンクリート見に行く!!	野球観戦!!(巨人)	水泳	新運動	
社会活動	ボランティア				
スキル	介護福祉士				
友達	職場で友達を見つける。	→			

(12月)

内容	20歳	30歳	40歳	50歳	60歳～
仕事	就職(介護)	→			
家族	結婚(介護)	→			
趣味	家のコンクリート見に行く!!	野球観戦!!(巨人)	水泳	新運動	
社会活動	ボランティア				
スキル	介護福祉士				
友達	職場で友達を見つける。	→			

受託機関名：石川県教育委員会

実践事例：対象教員の通級による指導経験年数2年（教員の経験年数30年）

指導例：高等学校1年生

## 1. 通級による指導担当教員の専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制

### 1－1. 専門性のポイント

#### (1) 指導における専門性

- ・児童生徒の障害による困難さの把握に関して、行動観察、自己評価、関係者の評価等を多面的に捉え、諸検査等の結果も参考に、総合的に把握することができる。
- ・児童生徒の実態把握に基づき、本人の願いを踏まえながら、自立活動における個別の指導計画を立案し、本人を含め他者が評価可能な指導目標を設定し、妥当性のある評価を行うことができる。
- ・児童生徒の興味・関心や強みを生かし、主体的に取り組むことができる題材等を取り入れた単元開発と授業づくりができる。
- ・評価に基づいて、実態把握を捉え直すとともに、指導目標や指導の手立てについての検討と修正を行うことができる。

#### (2) 学級担任等や保護者との連携に関する専門性

- ・学級担任とともに、児童生徒が何に困っているかについて共通理解を図り、通級による指導での指導目標の達成に向けて、協働して指導・支援を行うために連携することができる。
- ・学級担任や教科担任に対して、学級経営や授業において実践できる具体的な支援策や指導方法の工夫等について提案することができる。
- ・特別支援教育コーディネーターと連携し、障害のある児童生徒に対する指導方法の工夫や合理的配慮の決定等に関する校内支援体制の推進を図ることができる。
- ・保護者に対して、学級担任と協働しながら、通級による指導の目的と自立活動における指導目標及び指導の手立て、評価について説明できる。

### 1－2. 研修体制について

#### (1) 県教員総合研修センターにおける研修体制

##### ア. 通級による指導担当教員を対象とした研修講座等

県教員総合研修センターにおいて、H27年度より通級による指導担当教員を対象とした研修講座を開講した。小中学校において初めて通級による指導を担当する教員が必ず受講する研修と新任担当教員も含め通級による指導担当教員がスキルアップのために受講できる希望研修2講座を開講し、通級による指導担当教員の専門性向上に努めている。

##### イ. 特別支援教育担当指導主事による出前講座

学校からの要請に応じて県教員総合研修センターの指導主事が、依頼のあった

学校に出向いて行う「指導主事派遣サポート」では、通級による指導の授業参観、授業整理会を通して実践力を高める取組を行っている。

年々、通級指導教室が新たに設置され、特に、LD・ADHD等を対象とした教室が増加傾向にあり、利用する児童生徒数も増加している。こうした現状を踏まえ、市町教育委員会には、通級による指導担当教員や教室を新たに設置する学校に対して「指導主事派遣サポート」を積極的に活用するよう依頼している。

## (2) 特別支援学校のセンター的機能の活用

小中高等学校からの要請に応じて、特別支援学校の教員が学校を訪問し、通常の学級や特別支援学級に在籍する児童生徒の支援等について学級担任等にアドバイスを行う特別支援学校専門相談員派遣や小中学校の要請に応じて特別支援学校教員が兼務し、個別の指導計画の作成支援や教材作成のアドバイス、チームティーチングによる指導援助などを行う特別支援教育地域サポート教員派遣の活用により、通級による指導担当教員の具体的な相談や指導・支援の充実を図っている。

## (3) 市町教育委員会による取組

県教育委員会では、市町教育委員会に対して、通級による指導担当教員による連絡会等を開催する際には、特別支援学校のセンター的機能を活用するなど、地域の状況に応じた対応をお願いしている。

## (4) 校種に応じた研修体制について

通級による指導担当教員に対する研修講座については、高等学校における通級を導入したことにより、当初は、小中学校の通級による指導担当教員とともに、必要な研修を受講することとした。しかし、対象の発達段階が異なることや大学進学等や就労など卒業後を見据えた指導・支援が必要となることから、令和元年度には、高等学校における通級による指導担当教員に特化した研修講座を開講した。

表1は、令和元年度の通級による指導担当教員を対象とした研修講座と発達障害に関連した研修講座である。

## (5) 研修のねらい

表1に示す研修講座について、具体的な内容やねらい等について以下に示す。

### ア.「A：担当者研修」（通級による指導1年目を対象）

初めて通級指導教室を担当する全ての新任教員を対象とした研修である。

この研修では、通級による指導の目的、指導内容である自立活動に関する事項、実態把握の方法、自立活動における個別の指導計画の作成、個別の指導目標の設定等について、指導の基礎となる内容の理解を目指している。

### イ.「B：希望研修」（通級による指導1年目から5年目を対象）

通級による指導担当教員を対象としたB希望研修は、発達障害と言語障害とに分けて開講している。

発達障害を対象とした研修では、発達検査の読み取り方、児童生徒の困難さに応じた目標設定、実際の授業づくり等について学ぶことを目的としている。通級指導教室のベテラン担当教員からの実践報告や実践事例の交流も取り入れ、講師による講義や助言も含めて、指導経験の浅い教員の養成を主な目的としている。

### ウ.「C：通級による指導に関連する希望研修及び発達障害に関する研修」

ここでは主に学級担任の受講を想定し6つの研修講座を開講している。特に、発達障害に関しては、初めて学級担任をする者を対象とした「発達基礎研修」、学級担任として更に指導力を身に付けたい者を対象とした「指導力の深化を図る発達障害実践研修」を開講している。

「発達基礎研修」では、通級による指導を初めて担当する教員にとって、発達障害に関する基本的な理解と支援、支援方法が学べるほか、学級担任との連携についても学ぶことができる。また、「指導力の深化を図る発達障害実践研修」では、個別に対応するだけでなく、一斉指導場面における支援についても学ぶことができるとともに、児童生徒が通級による指導において身に付けた力をどのように学級集団で発揮させることができるかについても考えるきっかけとなる研修となっている。

表1 令和元年度 通級による指導担当者等を対象とした研修講座

研修の種類	講座名	対象者
A 担当者研修	新任通級指導教室担当者研修	初めて通級指導教室を担当する小中学校教員
	高等学校通級指導教室担当者研修	担当教員と特別支援教育コーディネーター
B 希望研修	通級指導教室の授業づくり① LD 等通級指導教室	通級指導教室担当教員 特別支援学校教員
	通級指導教室の授業づくり② ことばの教室	通級指導教室担当教員 特別支援学校教員
C 通級による指導に関連する希望研修及び発達障害に関する研修	アセスメントをもとにした自立活動の目標設定と指導・評価	通級指導教室、特別支援学級、特別支援学校教員
	発達障害基礎研修① 困難さのある子が安心して学べる授業づくり	全校種教職員
	発達障害基礎研修② 行動の問題の背景に迫る	全校種教職員
	指導力の深化を図る発達障害実践研修① 高等学校における特別支援教育の在り方	全校種教職員
	指導力の深化を図る発達障害実践研修② 困難さのある児童生徒の将来を見据えた支援	全校種教職員
	困難さのある子の「わかる・できる」を支えるタブレット活用	全校種教職員
	養護教諭発達障害対応力向上研修 (オンデマンド研修)	(悉皆) 養護教諭・養護助教諭

#### (6) 県教育委員会における通級による指導担当教員の専門性の把握

高等学校における通級による指導については、県教育委員会の指導主事が定期

的に授業参観を行い、実施状況を把握している。必要に応じて、指導・助言を行っている。

小中学校の通級による指導担当教員に関する専門性や指導力については、市町教育委員会による学校訪問において適宜行っている。県教育委員会では、定期的開催される指導主事会議において、各市町からの通級指導教室等の状況について報告を受けている。

### 1-3. 事業で実施した研修例

#### (1) 高等学校における通級による指導に特化した研修

高等学校における通級による指導が導入されたことを受け、生徒の発達段階やニーズに応じた指導内容の一層の充実を図ることをねらいとした「高等学校通級による指導教室担当者研修」を新設した。高等学校全体の特別支援教育の推進と、通級による指導と通常の学級との連携をねらいとし、特別支援教育コーディネーターも受講対象としたことが特徴である。

#### (2) 研修の概略とポイント

- ・ 講座名 「高等学校通級による指導教室担当者研修」
- ・ 目的 生徒の自己理解を深め、将来につながる効果的な指導を行うため、担当者の指導力を高める。

- ・ 研修日数 2日間 (0.5日×2回)

- ・ 研修内容 大学教授による講義・演習

【第1日】令和元年5月31日(金)

講義「高等学校における通級による指導の目的と役割」

ポイント・高等学校における通級による指導の目的と役割

- ・ 自立活動の捉え方と指導の特徴
- ・ 社会的自立に向け、ライフステージを意識した支援の在り方

【第2日】令和元年11月8日(金)

講義「高等学校における通級による指導～指導の評価と内外の連携～」

ポイント・生徒の実態把握の視点とニーズの把握

- ・ P D C Aサイクルによる評価、指導の段階
- ・ 共通ツールを使った情報の共有とチームとしての役割分担と校外連携
- ・ 事例検討

#### (3) 効果

- ・ 講師より大学生が学生生活を送る上での困難さ、就職を前にした時の課題等についてエピソードを交えて紹介があり、受講者は通級による指導対象生徒の様子と重ね合わせて、今必要な指導は何かについて考えることができた。
- ・ 事例検討を行ったことで、情報収集に必要な視点や、指導の優先順位を考慮することなど、支援を検討する際の手順も含めて学ぶことができた。
- ・ 各拠点校の取組を紹介する中で、一人一人の生徒のニーズに基づき指導内容を検討すること、特に高等学校段階では「指導目標・指導内容」について生徒と教員が共通理解して進めていくことが大切であることが実感できた。

- ・特別支援教育コーディネーターも合わせて受講対象としたことで、通級による指導の目的や自立活動における指導内容等について理解が図られ、拠点校内の校内連携を深める一助となった。今後は、学級担任を受講対象として、通級による指導に対する理解や学級担任としての連携の在り方についても学ぶ機会としていきたい。

#### 1－4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った取組

##### (1) 高等学校における通級による指導

- ・各拠点校には指導主事が授業参観や校内委員会に参加し、その都度、助言を行った。
- ・高等学校教員とともに特別支援学校教員が兼務し通級による指導を担当していることから、その専門性を活用し拠点校の実情に応じた校内研修会の開催を促した。
- ・県教育委員会が全ての高等学校に対して発達障害の専門家を巡回させている発達障害アドバイザー派遣事業を活用し、拠点校の依頼に基づき、実態把握、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成、指導方法について、通級による指導担当教員の相談に対応することや校内研修会の講師の派遣を行った。
- ・拠点校3校の通級による指導担当教員が一堂に会して、実践の共有や校内支援体制等について情報交換ができるよう担当者連絡会を開催した。

##### (2) 小中学校における通級による指導

- ・小中学校の要請に応じて特別支援学校の教員を派遣し、週1日兼務しながら通常の学級や特別支援学級の学級担任を支援する特別支援教育地域サポート教員が、派遣校の通級指導教室に対する支援を重点的に行うようにした。
- ・同じく、特別支援学校から教員を派遣する専門相談員は、通級による指導担当教員に対して、対象児童生徒の発達検査等の読み取り、個別の指導計画における指導目標の設定、具体的な指導内容等に関するアドバイスをを行った。
- ・県教育委員会では、通級指導教室での学習指導案の書式の統一を図るため、個別の指導計画の指導目標や関連する自立活動における指導区分と指導項目を明記する欄を設けた自立活動学習指導案の参考書式を特別支援学校及び小中高等学校に周知した。

#### 1－5. 今後の研修体制

県教員総合研修センターが開講する通級による指導に関連した研修講座は、初めて通級による指導を担当する教員全員が受講するものとなっており、専門性の向上は、通級による指導担当教員が自らのニーズに応じて希望研修を受講することとなっている。

今後、通級による指導担当教員の養成を図っていくためには、求められる専門性のポイントに基づき以下のとおり研修体制を整えていきたい。

##### (1) 県教員総合研修センターでの通級による指導担当教員を対象とした研修講座

○新任担当教員を対象（年間４講座の受講）

「Ａ：担当者研修」

【内容】・自立活動に関する内容

・個別の指導計画の作成と目標設定

「Ｂ：希望研修」

講座名：「通級指導教室の授業づくり」から１講座を選択し受講

【内容】・大学教員等からの講義・演習

・実際の指導に関する内容

「Ｃ：通級による指導に関連する希望研修及び発達障害に関する研修」

タブレット端末の活用に関する講座を必須とし、他２講座を担当教員のニーズに応じて選択し受講

○２～３年目の担当教員を対象（年間４講座を受講）

「Ｂ：希望研修」

講座名：通級指導教室の授業づくりから１講座を選択し受講

【内容】・大学教員等からの講義・演習

・実際の指導に関する内容

「Ｃ：通級による指導に関連する希望研修及び発達障害に関する研修」

タブレット端末の活用に関する講座を必須とし、他１講座を担当教員のニーズに応じて選択し受講

以上のように、今後は、通級による指導を担当することになった教員に対しては、既存の研修講座を組み合わせる年間４講座を受講することとし、３年間で専門性を高めることができるようにする。

**(2) 外部人材の活用による指導の力向上**

ア．特別支援学校のセンター的機能の活用

○特別支援学校専門相談員及び特別支援教育地域サポート教員による支援

・市町教育委員会に対して、特別支援学校センター的機能を積極的に活用するよう働きかける。

・特に、初めて通級による指導を担当する教員に対しては、学校全体の通級による指導の理解と担当教員の指導力向上を図るため、継続した派遣要請を行うよう働きかける。

イ．外部専門家の活用

○高等学校発達障害アドバイザーによる支援

・通級による指導を実施する高等学校については、引き続き月１回巡回する発達障害アドバイザーに、対象生徒の実態把握や指導法の工夫等に関する助言、校内研修会での講師を依頼することにより、通級による指導担当教員の指導力の向上や校内支援体制を充実できるようにする。

ウ．各教育事務所管内にある小中高等学校の連携

○エリア別研究協議会の開催による指導実践の共有

・４つの教育事務所管内にある小中高等学校の通級による指導担当教員による研究協議会を開催し、実践の共有や校種間連携の促進、エリア内の地

域資源に関する情報共有等を行う。その際、エリア内の特別支援学校を核として、通級による指導における優れた指導実践や課題を収集し、県教育委員会等と連携して、研究協議会の企画運営を行う。

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例】

○通級による指導の経験年数：2年目

○教員の経験年数：30年目

○事業開始前までに受けた研修内容

- ・県教育委員会による通級による指導に関する行政説明
- ・神戸市立香風高等学校通級による指導視察（平成29年）

○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

【身に付けていた専門性】

- ・特別支援学校勤務経験：新採として知的障害特別支援学校に5年間勤務
- ・養護学校教諭免許状2種取得

【身に付けたかった専門性】

- ・各種検査の特徴と結果の読み取り方法、指導への活かし方
- ・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説「自立活動編」の活かし方

○事業実施中に受けた研修

- ・石川県教員総合研修センター主催の研修講座

講座名「高等学校通級指導教室担当者研修」

～高等学校における通級指導の役割と指導の実際～

概要：平成30年度より開始した高等学校における通級による指導について、実施校3校の通級による指導担当教員を対象に研修を行った。中でも新規に開設した2校の通級による指導担当教員の通級による指導への理解を図ることを主なねらいとし、対象生徒とともに考えるという姿勢で取組の方策を見出していく、発達障害の特性への理解を深める、自立活動の指導について理解する、対象生徒の強い力や特性を活かす指導について、講義と事例検討を通して学んだ。

（5/31 宮城学院女子大学 梅田真理氏）

講座名「高等学校通級指導教室担当者研修」

～指導の評価と校内外へ指導をつなぐ～

概要：通級による指導の評価、関係機関との連携をテーマとし、学習上の困難を引き起こす背景、実態把握の基本的な在り方について整理するとともに、評価に向けては「観察」と「改善」がポイントになること、情報収集の方法、関係機関との連携のポイント等について、講義と事例検討を通して学んだ。

（11/8 宮城学院女子大学 梅田真理氏）

講座名「発達障害基礎研修①困難さのある子が安心して学べる授業づくり」

概要：発達障害等のある児童生徒の困難さを理解し、安心できる授業づくりを学ぶことで、特別な支援を必要とする児童生徒への指導力の向上を図ることをねらいとし、本人の特性のみならず周辺環境に起因すること、本人の自己肯

定感の重要性、保護者への理解と共感、安心できる集団づくり、本人との共感から始まる「わかる」授業づくり等について学んだ。

(6/21 大阪大谷大学教授 小田浩伸氏)

講座名「通級指導教室の授業づくり①LD等通級指導教室」

概要：LD等のある児童生徒に対するアセスメント・指導の方法を学び実践的指導力の向上を図ることをねらいとし、読み書き困難を例に挙げ、「訓練」で伸ばすより「適切な支援」を受ける方が本人の学びを進めること、「適切な支援」の一つとして身近にあるテクノロジー（例：タブレット端末）を活用することなどについて学んだ。

(6/24 東京大学先端科学技術研究センター 特任助教 平林ルミ氏)

講座名「アセスメントをもとにした自立活動の目標設定と指導・評価」

概要：自立活動の目標設定や、指導・評価する力の向上を図ることをねらいとし、自立活動の基本的な考え方、通級による指導の「特別の教育課程」と「自立活動」の内容（6区分27項目）、個別の教育支援計画の作成の流れ（実態把握→課題の整理→目標設定→項目設定→項目間の関連→指導内容・指導場面の設定）等について、事例をもとに学んだ

(7/23 岡山大学教授（特任） 仲矢明孝氏)

講座名「特別支援教育における主体的・対話的で深い学び」

概要：新学習指導要領の「育成を目指す資質・能力」を踏まえた特別支援教育における指導力の向上をねらいとし、特別支援学校学習指導要領も小中高等学校と同様に3つの資質・能力を育成する観点で整理されたこと、「どのように学ぶか（指導形態）」に力点が置かれてきたが「何を学ぶか（教科等の教育内容）」に改めて着目すること、知的障害児の「主体的・対話的で深い学び」等について学んだ。

(9/4 山形大学教授 三浦光哉氏)

講座名「困難さのある子の「わかる・できる」を支えとなるICT機器の在り方」

概要：学習指導への効果的なICT活用及び将来の生活の支えとなるICT機器の在り方について理解を深めることをねらいとし、本人の「モチベーションを支援する」ことを軸に支援を考えること、そのための一つの方法がICT活用であること、アプリで目的を達成するのではなく目的達成の一つの手段がアプリであること等について学んだ。

(9/20 兵庫教育大学准教授 小川修史氏)

・通級による指導を担当する特別支援学校兼務教員による学習会（4回）

特別支援学校の担当教員を講師に、教職員のニーズに応じて、校内学習会を開催した。

第1回目 「発達障害について」

自閉症スペクトラム障害、学習障害、ADHD等の発達障害の特性と理解、障害による学びにくさ等について学習した。

第2回目 「インシデントプロセス法を用いたケース会議」

インシデントプロセス法を用いて、時間制限のある中での効果的なケース会議の手順と方法について学んだ。

### 第3回目 「LD等に関する疑似体験」

発達障害のある生徒が、具体的場面でどのように困っているかについて、教員が疑似体験を通じて知り具体的な指導方法や必要な配慮について学ぶ。

### 第4回目 「読み書き困難のある子の合理的配慮について」

読み書きアセスメントに関する概略を学び、読み書きに困っている生徒への支援方法と本人の願いに基づく合理的配慮の提供について学習した。

#### ・特別支援学校専門相談員による校内研修会

研修会テーマ「個別の教育支援計画作成研修会」

概 要 特別支援学校専門相談員が講師となり、学級担任を対象に個別の教育支援計画の作成に関わる演習をグループに分かれて実施した。

#### ・他機関視察

卒業後の就労を見据え、発達障害の相談や支援を行う関係機関を視察した。

##### ・就労移行支援事業所の視察

手帳取得による障害者枠での一般就労の流れや就労に関する評価、就労移行支援を利用した際のサービス等について学んだ。

##### ・県発達障害支援センターの視察

発達障害に対する相談機能についてや、近年の課題等について説明を受けた。また、通級による指導対象生徒が関わっていることから、今後の連携を依頼した。

#### ・高等学校における通級による指導担当者連絡協議会

県内国立大学で障害学生支援室を運営している大学教授を招いての講義

演 題「大学における合理的配慮の考え方」

概 要 大学に入学する発達障害のある学生の現状と本人の意見表明に基づき合理的配慮が提供されることを学び、高等学校段階において自己理解を深めるための指導・支援や個別の教育支援計画による進学先への引継ぎの重要性を学んだ。

### ○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

- ・講師から「興味・関心は意欲につながる」との言葉があった。実際の指導においては、生徒の興味・関心のあることはモチベーションも高く、多少の負荷をかけても課題に向き合おうとすることができ、本人にとっては達成感や自己有用感により、自信となる場面もあった。指導する通級による指導担当教員側の判断で、対象生徒が苦手なことであっても、社会に出る上では必要だからという理由で目標を設けるより、本人が主体的に取り組み、できる範囲を広げることの方が効果的だということを実感した。
- ・月に一度の発達障害アドバイザーの来校では、通級による指導担当教員と学級担任から生徒との日頃のやり取りを報告したり、学級担任が抱える疑問・質問に対してアドバイザーから明確な指導・助言を得られたりしたことが効果的であった。例えば、ゴミ箱がいっぱいで綺麗にして欲しい場合は、「ごみを捨ててください」ではなく、「ゴミ箱の中を見てください」「ゴミがありますね」「このゴミを〇〇に捨ててください」と1つずつ区切った指示にすると伝わりやすい。同時に2つ以上の指示は伝わりにくい。また、そもそもゴミをどこに捨てたらよいかわからない可能性もあるなど、別の視点から具体的な例示による助言が対象生徒への指示の出し方や小集団指導での個別

の配慮に役立った。

- ・県内の大学で障害学生支援を担当する教授からは、「入学してくる発達障害の診断のある生徒と保護者との多くが、配慮は必要ないと言う。学生本人は高等学校で支援を受けてきたという自覚はなく、保護者は不利益になることを心配し支援を拒む傾向にある。大学生活で支障が出てはじめて、本人も保護者も配慮を希望する。大学では、本人の意思表示がなければ配慮を提供できない。まずは、自分が高等学校において、何に困っていて、どんな配慮や支援を受けてきたのかを説明する力、そして大学ではどんな配慮を希望するかを本人が表明できる力を身に付けてきて欲しい。」「これまで、県内外を問わず個別の教育支援計画による引継を求めてきた高等学校もなければ、提示した保護者もいない。」という現実を聞いた。発達障害に限らず障害のある生徒に対しては、支援や配慮について本人との合意形成のもと実施する必要があること、生徒が何に困っているかの自己理解に基づき、受けた支援や配慮について自身で説明することができること、進学や就職に限らず引継により支援をつなげていくことが大切であることがわかった。
- ・特別支援学校教員が通級による指導担当教員として週に一度勤務しており、諸検査の実施やその読み取り、自立活動の内容に即した指導内容や指導方法等について、その都度質問することができ、わかりやすい言葉で助言してもらえることで、自信をもって指導にあたることができる。また、勤務2年目となり本校の他の教員とも関係性ができたことで、学級担任の要望に応じて気になる生徒の授業参観を実施し、タイムリーに助言を得られることで、学校全体の特別支援教育の推進にも大きな役割を果たしている。
- ・就労移行支援事業所の視察では、これまで障害のある方の就労に関して全く意識をしていなかったが、一般就労に向けてのアセスメントや訓練、就職活動や体験実習を通して就労にまでつなげ、就労後においてもジョブコーチ等により継続や定着をサポートしてもらえることを知り、卒業後を見据えた指導のための大切な経験となり、多くの学びがあった。

#### ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

- ・実際の通級による指導においては、自立活動の内容に合わせて指導することが必要となるが、指導目標を生徒と共有し、指導方法においても生徒の興味・関心のある事柄を題材として取り上げながら、主体的に取り組むことができるよう工夫することが必要であることがわかった。まずは「待ち」の姿勢で生徒が発信することを尊重するよう心掛けるようになった。
- ・合理的配慮の決定や提供については、「先回りしない」「スタート地点を整える」「合意形成」「本人からの申し出」がキーワードであることを学んだ。目の前の生徒に対して、教員がつい先回りして障害に応じた支援を考えてしまうことを自覚できた。今後は、支援や配慮の実施に関して本人と対話しながら、1つ1つ冷静に進めていきたい。「教育は福祉ではないので多少の負荷が必要である」との発達障害アドバイザーの言葉を意識しながら指導にあたりたい。
- ・就労移行支援事業所や発達障害に対応する相談機関を視察したことで、個別の教育支援計画に記載されている関係機関の役割を知ることができた。今後は、個別の教育支

援計画を活用し、生徒を支援する医療、福祉、労働等の多職種との連携を図って支援をしていきたい。

## 2-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

### 2-1-1. 実態把握

#### (1) 実態把握の内容

実態把握については、以下の内容で行っている。

- ・ 本人の願い、保護者の願いの聞き取り
- ・ 授業観察
- ・ 学級担任、教科担任からの聞き取り
- ・ プロフィール票、気づき票
- ・ 中学校からの申し送り、個別の教育支援計画（中学校で作成されていた場合）
- ・ 知能検査
- ・ その他の諸検査
- ・ アンケート（自立活動アンケート、こころのアンケート）

#### (2) 実際の指導にあたり、特に役に立った実態把握の視点

##### ア. 本人、保護者からの聞き取り

「通級による指導でこのような力を付けたい」「このようなことに取り組んでみたい」という通級による指導を希望する生徒自身の願いが大切であると考え、利用決定前と決定後の2回面談を実施し、希望を確認するようにしている。利用決定前の面談では、通級による指導担当教員から通級による指導の意義や内容を伝えた上で、「この時間にどのような力を付けたいのか」、「どのような活動に取り組みたいか」について、丁寧に聞き取りを行うように心がけている。聞き取った内容や面談時の生徒の様子は、指導目標や指導内容を考えるための貴重な情報の一つとなっている。また、利用前の面談で、通級による指導に対するイメージがある程度明らかになっているため、利用決定後の面談では、生徒自身がこの時間で取り組みたいことを自分なりの表現で伝えられるようになっている。

##### イ. 通級による指導担当教員による情報収集（学級担任、教科担任等）

通級による指導担当教員が、積極的に学級担任や教科担任から対象生徒に関する情報を得るようにしている。学校生活でのエピソードを通級による指導担当教員間で共有することで、検査結果などと照らし合わせ、よりの確な実態把握につながるよう心がけている。

### 2-1-2. 指導目標の設定

対象生徒全員に対して、京都清明高等学校が作成した「自立活動アセスメントチェック」を取り入れている。この様式は、ソーシャルスキル（心理的な安定、人間関係の形成、コミュニケーション）、ライフスキル、アカデミックスキルといった項目で構成されており、指導目標や指導内容を組み立てる際に参考になっている。「苦手と覚えること」と「改善したいこと」を対象生徒自身が点数化することにより、本人の願いを焦点化することにも役立っている。

次に、アンケート結果を含めた実態把握をもとに、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編にある作成手順に沿って指導目標を立案している。障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題といった情報を収集し、自立活動の区分に即して整理している。その上で通級による指導の時間における個別の指導が適切と考えられる内容を選ぶようにしている。

### 2-1-3. 適切な評価

毎時間毎に、各対象生徒の目標に対する評価規準を設けて3段階で評価している。本校では、昼間制において午前部と午後部で学ぶ生徒の中に、それぞれ通級による指導を利用する生徒がおり、令和元年度は午前部1名が授業終了後の5限目に、午後部4名が授業終了後の7限目に通級による指導を利用している。複数の生徒が利用する午後部のエンパワメントについては、小集団活動による指導がほとんどであったが、同じ活動であってもそれぞれの目標は異なるため、評価規準を個別で設けて評価を行っている。(表2参照)

授業の終了後には、毎回、振り返りシートに生徒が自己評価を記入する時間を設けている。対象生徒の評価が概ね通級による指導担当教員の評価と一致している場合は、本人がより一層自信をもてるように、意識してその場で、具体的に何が良かったかなど伝えるようにしている。通級による指導担当教員から見て、十分目標に達していたにもかかわらず、本人自身の評価が低い場合には、できたこと、努力していたことを口頭、またはコメントとして振り返りシートに記載して、本人に返すようにしている。自由記述欄での対象生徒からの率直な感想に対しては、通級による指導担当教員が肯定的な見方でコメントを記述するように心がけている。学年末にも一年間の活動について自己評価を行う時間を設けている。

対象生徒に関する支援目標、支援内容の見直しは随時行っている。通級による指導担当教員3名が相談室に在室しており、授業の前後に、対象生徒に関する学校生活全体に関する情報共有や活動内容に関する話し合いが気軽にできる環境にある。この話し合いが、通級による指導担当教員間の共通理解、指導や支援の見直しにつながる機会となっている。

通級による指導担当教員が、学級担任と保護者との面談に参加し、情報交換を行う機会をもっている。指導上必要な情報や、指導が日常生活や学校生活で般化されているか、対象生徒の言動等に変容があったかどうかを確認する上で大変参考となっている。

### 2-2. 通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

・学級担任・保護者・通級による指導担当教員との三者懇談を7月・12月の2回実施しており、家庭、学校、通級による指導におけるそれぞれの様子から対象生徒の実情、変容、願いを共有することができた。学級担任と保護者との面談では一般的な学校や家庭での様子の情報交換で終わってしまうが、通級による指導担当教員が加わることにより本人の趣味の話や小中学校での様子、生育歴等これまでの道のりなど多岐にわたる話題に広がり、保護者の苦労を労うことにより保護者支援の機会となる場合が多かった。学級担任にとっても、本人を多面的に知る良い機会となった。

- ・対象生徒から得た情報や相談に関する内容については、その都度、学級担任や教科担任に伝え情報を共有し、支援や指導にあたっている。また、学級担任や教科担任からの対象生徒に関する相談についても随時対応し、チームによる対応案や支援策の検討を行っている。
- ・月1回開催される「通級指導推進プロジェクト会議」や職員会議においては、通級による指導での授業の取組や対象生徒の様子や変容に加え、年間指導計画に基づき今後の取組や活動に関する予定等を報告し共有している。
- ・通級による指導担当教員以外の教職員にも声をかけ、就労移行支援事業所や県発達障害支援センター等施設の視察を行い、卒業後を見据えた指導に活かせるようにした。
- ・全ての教職員に通級による指導を理解してもらうために、全ての教員がゲストティーチャーとして1回以上授業に参加する計画を立案、実施した。学級担任や教科担任が対象生徒の普段とは異なる姿を見ることができ、生徒理解の一助とともに自立活動の指導内容と生徒の障害に応じた題材を取り入れた指導方法についても理解が図られた。

表2 授業における実施記録と評価

SE 実施記録		クラス 午後部	
実施日時	1月 11日 木曜日 7時間目 担当:東野 前田 嶋		
指導内容	コグトレ(認知トレーニング)、体幹トレーニング、文化祭の話(1分間スピーチ)、オセロ		
教材など	本 オセロ 発表用お助けシート iPad(ストップウォッチ)		
指導のながれと手立て	<p>コグトレ(認知トレーニング):プリント終了直後に採点し全問正解であればそれを認める。間違いがあれば、補助線を入れるなどして、もう一度考えるように促す。</p> <p>体幹トレーニング:昨年度参加していた生徒による説明の後、参加者から質問を受ける場面を設け、その後、実際にやってみる。</p> <p>&lt;インストラクター:体の動かし方をわかるように説明する。他生徒の意見を考慮しながら進行する。他の生徒:わからないことが質問できる。自分ができる運動量を伝えることができる。&gt;</p> <p>文化祭の話(1分間スピーチ):文化祭で取り組んだことを1分間で話すように促し、話が難しい場合は、発表のためのシートを提示する。</p> <p>オセロ:和やかな雰囲気を作ることができ、対戦のコツを伝えあいができるような場面を作ることができるよう教師が仲立ちする。</p>		
対象生徒	評価	活動の様子	
1年	A	しっかり話することができた。お助けシートは少しだけ見ていたが、ほとんど自分で考えて話していた。	
<文化祭の発表>目標:話し方を工夫して順序立てて話することができる			
自立活動の内容との対応	3人間② 6コミュ⑤		
評価規準	A	自分で工夫して話することができた。	
	B	教師の手助けで、順序立てて話することができた。	
	C	順序立てて話することができなかった。	
対象生徒	評価	活動の様子	
2年①	A	久しぶりにインストラクターになって説明したが、周囲の意見を聞きながら、楽しく進めることができた。	
<体幹トレーニング>目標:トレーニングについて説明、質問しようとする			
自立活動の内容との対応	2心理①	3人間②	6コミュ⑤
評価規準	A	意欲的に説明、質問できた。	
	B	教師に促されたりサポートを受けて、説明、質問できた。	
	C	説明、質問ができなかった。	
対象生徒	評価	活動の様子	
2年②	A	自分から友達に声をかけ、積極的に対戦できた。	
<オセロ>目標:自分の好きな活動を楽しみリラックスして過ごす			
自立活動の内容との対応	2心理①	3人間②	6コミュ⑤
評価規準	A	積極的に対戦できた。	
	B	教師に促されたりサポートを受けて対戦した。	
	C	活動に参加できなかった。	
対象生徒	評価	活動の様子	
2年③	A	負けが続く、あまり得意ではない活動だったと思うが、熱心に取り組んでいた。	
<オセロ>目標:友達と過ごす活動でリラックスして過ごす			
自立活動の内容との対応	2心理①	3人間②	6コミュ⑤
評価規準	A	積極的に対戦できた。	
	B	教師に促されたりサポートを受けて対戦した。	
	C	活動に参加できなかった。	
次時に向けて			
<p>1年:1分間であること、「いつ」「どこで」「たれか」と発表の形を最初に提示すること、順序立てて話すことへの支援として有効だとわかった。今後の予定を自分の携帯電話で撮影していた。このような工夫を活用できるようにしていきたい。</p> <p>2年①:出席できる日には穏やかに過ごせるように、活動も本生徒の興味関心のあるものを中心に選定する。</p> <p>2年②:進路について悩み始めているので、終了後1時間話を聞いた。見え方へのサポートを開始する必要がある。</p> <p>2年③:ひらがなで振り仮名シートに自分の思いを書くようになってきている。いずれ、ワープロ入力にしてみようとする。</p>			

## 指導例

○対象生徒：高等学校1年生（生徒A）

### 1. 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

#### (1) 実態把握

障害名：自閉症スペクトラム障害

##### ア. 行動観察

生徒Aは、学校生活全般において、自分から周囲の生徒に関わろうとする様子はなく、一人で過ごすことが多かった。

初回面接では、自分から話そうとすることはなく、教員からの問いかけに対して視線を合わせずに「はい」「いいえ」程度で答えることがほとんどだった。一方で、自分の興味・関心のある相撲に関する話題になると、それまでとは違い、生き生きとした表情で話し始めた。

家庭では、インターネットや情報誌から相撲全般や力士に関する様々な情報を収集して過ごしている。相撲中継が始まると、最初から最後まで毎日欠かさず視聴している。

##### イ. 生育歴

幼少期には、同じ場所で同じものを見聞きしなければならないというこだわりがあった。小中学校段階では、間違っただけをした相手に対して、周囲の雰囲気を感じることなく、直接注意してトラブルに発展することが頻繁にあったというが、高校入学後にはトラブルは起きていない。

小学校では、自校の通級指導教室を利用していたことから、高等学校での通級による指導については「学習面や困りごとに対してサポートをしてくれるところ」といった肯定的なイメージがあったようだ。

##### ウ. 心理検査、アンケートの結果

##### （ア）発達検査

知的発達水準は「境界域～平均の下」の範囲だった。指標得点間には明らかな差はなかったが、下位検査得点間で大きな差がみられた。視覚面では、絵や写真といった具体的な情報から推論することに比べて、意味づけしにくい抽象的な情報から推論することに苦手がみられた。また、視覚的、聴覚的両面で、単純な情報の処理に問題はないものの、複数を同時に処理することに苦手が強い傾向がみられた。

検査結果は、検査実施者である通級による指導担当教員（特別支援学校からの兼務教員）が、保護者や生徒本人にわかりやすく伝える

○得意な方法でがんばり、苦手な方法の乗り切り方を考えましょう。



イラストや写真、映像などの具体的な情報があると、理解が進むと思われます。学習マンガや図鑑、映画やビデオなどで知識の積み上げができるとよいでしょう。

聞く時には聞くことに集中する、書く時は書くことに集中する といった方法、「一度にすることは一つ」のほうが集中して取り組めるのではないかと考えられます。

教科書の勉強だけでなく、好きなことを通して、様々な知識を増やしていくとよいでしょう。例えば、力士の四股名を通して漢字の読み方を覚える、床山さんの修行の仕方から仕事でのマナーやエチケットを学ぶなどです。

英語、計算が特に苦手と話していました。勉強方法を一緒に考えましょう。

図 1 生徒Aの検査報告書（一部）

こととしている。生徒A本人に対しても、別途検査報告書を作成し、生徒に提示しながら説明を行った。(図1参照)

#### (イ) こころのアンケート

アンケート結果は概ね学年平均の域にあり、「自己受容」や「充実感」など心理面は概ね安定していることが考えられた。

#### (ウ) 自立活動アセスメントチェック

自立活動アセスメントチェックの結果では、交通機関の利用や整理整頓などの日常生活上のスキルに関して困っていることはないと答えた一方、英単語や計算といった学習面に苦手意識があり、「できれば改善したい」という要望があった。説明や大切なことを聞き漏らしてしまうことについても「できれば改善したい」と答えていた。対人関係上のスキルは「どちらともいえない」と答えていた。(図2参照)

結果を受けた生徒Aとの面談では、「特に、ルート計算がわからない」と訴えた。相撲に関する発表に取り組んでみないかと通級による指導担当教員から提案すると「やってみたい」と答えた。

生徒Aは「将来は相撲関係の仕事につきたい」と話し、「タブレット端末の見過ぎによる目の疲れをなんとかしたい」との訴えもあった。

A 5-あてはまる 4-ややあてはまる 3-どちらとも言えない 2-あまりあてはまらない 1-あてはまらない					
B 5-ぜひしたい 4-できればしたい 3-どちらともいえない 2-あまりしたくない 1-したくない					
ライフスキル（一部抜粋）	1	公共交通機関を利用する	5	1	
	2	地図で目的地を確認する	5	1	
	3	整理整頓する	4	1	
	..	..	..	..	
	11	身だしなみに注意する	4	1	
	12	家庭での仕事の分担の役割を果たす	4	1	
A 5-あてはまる 4-ややあてはまる 3-どちらとも言えない 2-あまりあてはまらない 1-あてはまらない					
B 5-ぜひ改善したい 4-できれば改善したい 3-どちらともいえない 2-あまり改善したくない 1-改善したくない					
アカデミックススキル  （一部抜粋）	聞く	2	説明や大切なことを聞き漏らすことがある	4	4
		..	..	..	..
	読む・書く	11	アルファベットのpとq、bとdをよく間違える	4	4
		..	..	..	..
	計算する	15	四則混合の計算、2つ以上の立式を必要とする計算が苦手である または時間がかかる	4	4

図2 自立活動アンケート結果(抜粋)

#### (2) 指導目標、指導項目の設定

生徒Aの願いと実態把握より、自立活動の内容の区分及び項目を選定して、目標と指導内容を設定した。(図3参照 最終頁に掲載)

#### (3) 指導期間と指導形態

週1回1時間(後期:10月~3月)

令和元年度の午前部のエンパワメントの授業を受ける生徒は生徒A1名であった。通級による指導担当教員と1対1の活動の他に、小集団での話し合いの場面を設定するために、複数の通級による指導担当教員で授業に参加するようにした。また、対象生徒同士での活動場面を設定するために、午後部の利用者との合同授業を年間4回実施した。

#### (4) 活動内容

##### ア. 授業のながれの提示

授業の冒頭に、その時間の授業のながれを、口頭だけでなくプレゼンテーション画面で視覚的に提示するようにした。生徒Aは、画面を見て確認し、内容について自分から質問する様子もみられた。(図4参照)

## イ. ビジョントレーニング体操

活動の初めに毎回行った。自分の利き腕を大きく上下左右に動かして、自分の親指の動きを追視する目の運動である。事前に「頭部を動かさず、眼球だけを指先の動きに合わせて動かすことが大切である」と伝えて、トレーニングを始めるようにした。回数を重ねる中で、通級による指導担当教員がトレーニングの注意点を生徒Aに質問すると「頭を動かさない」と答え、頭部の揺れがないように意識して取り組むようになった。(図5参照)

通級による指導担当教員が見本を示す際には、正しい動きを随時確かめることができるように、生徒Aの正面に向かい合わせに立つようにした。最初は、腕の動かし方で左右の間違いがよくみられたため、動きの切り替わりの際に、必ず左右を確認することを伝えるようにしたところ、間違いはほぼなくなった。

生徒Aにビジョントレーニングの効果について感想を尋ねると「目の疲れが、少し軽くなった気がする。」と答えていた。

## ウ. ルート計算

通級による指導担当教員の中には、数学の教科担任が含まれており、この担当教員が中心となって指導を行った。苦手意識のある計算に対する心理的負担を軽減するために、指導時間を10分程度に限定して実施した。つまずきを把握するために、素数→素因数分解→有理化→計算の順に、段階を追ってプリントでの学習を進めた。

計算プリントは、見やすく短時間で取り組むことができるように、一枚あたりの問題数を4題に絞り、行間をあけて書き込みやすいレイアウトにした。四則計算は可能であるが、ルートの記号に対する意味づけが苦手であるという仮説を立てて、計算手順を思い出せない時のために、手順を記入したメモを生徒Aの手元に置き、いつでも参照できるようにした。(図6参照)

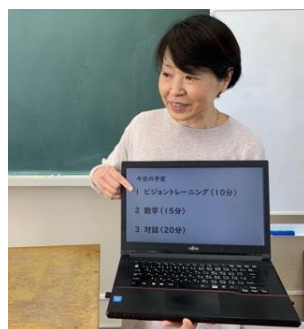


図4 授業のながれの提示



図5 ビジョントレーニング体操

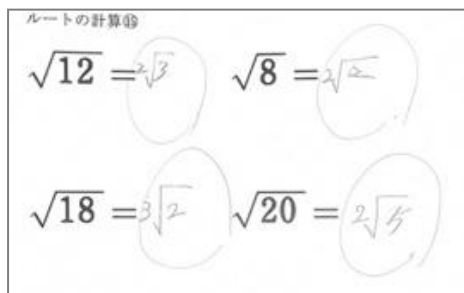
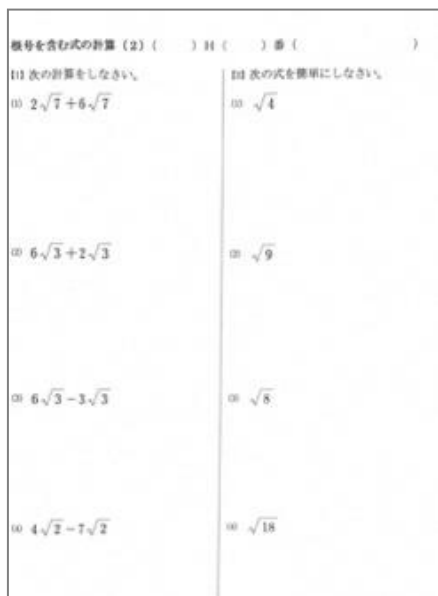


図6 プリントの改善

自分からわからないところを何らかの形で発信できるように、ヒントカードを机上に用意した。質問がある時にカードを指さすように促したが、理解したい気持ちが強かったためか、すぐにカードを使用しなくても自分から質問できるようになった。次第に、自分で解ける問題が増え、解き方を忘れた時にも、メモを見ながら、最後まであきらめずに自分で解こうとする様子がみられた。

生徒Aは、その後、テスト前になると数学の質問がある時には、相談室の通級による指導担当教員（数学科担当）のところを訪れるようになった。

#### エ. 対話とクイズ作成

対話の時間には、毎回、校内の教員がゲストとして参加した。ゲストの教員に大相撲に関する知識を披露したり、相撲に関する質問に答えたりしていた。

相撲に関する話題では、一方的に話し続けることはなく、質問を受けて相手にわかるように具体的に説明しようとしたり、相手に質問したりするなど、会話のルールにそって自然に会話を続けていた。相撲とは異なる話題が続いた時には、自分の興味のある会話に引き込もうとせず、「そろそろ、（相撲の話を）始めませんか」と、相手を気遣う表現で、話題を切り替えようとすることもあった。通級による指導担当教員が、生徒Aが話したことをメモで書き留めるようにしたところ、メモを見て話の内容を確認し、同じ話題にならないよう気を配る様子もあった。

通級による指導を利用している生徒全員で実施する合同授業では、生徒Aの課題として、相撲に関する発表を予定していた。そこで、リハーサルも兼ねて「四股名の読み方クイズ」の作成やその提示の方法について、ゲストの教員に自分で考えたクイズを答えてもらいながら、難易度の調整やヒントの出し方を工夫させた。3回目の合同授業のためのクイズ作成には、タブレット端末を使ってクイズを出題するように勧めた。最初は躊躇する様子があったが、一度操作方法を覚えると、通級による指導担当教員の手助けがなくても自分でプレゼンテーション用のスライドを増やしていくことができた。

4回目の合同授業では、通級による指導担当教員のアドバイスを取り入れて内容をさらに工夫し、力士に関する様々な情報クイズをタブレット端末で作成した。（図7参照）

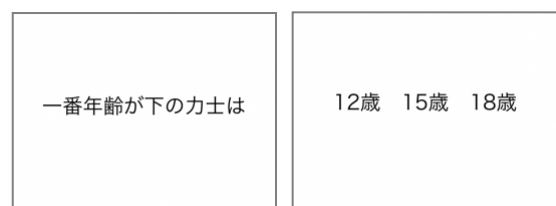


図7 第4回クイズのスライド（一部）

合同授業では、参加した他の生徒達が答えやすいように、タイミングを見計らってヒントを出していた。参加したゲスト教員や他の生徒からの質問に対しても、一方的に自分の知識を披露するのではなく、相手にわかりやすく伝わるように意識しながら説明していた。

学年末には、生徒Aとの対話の時間に学校生活での悩みも相談することができるようになった。その時には、生徒Aが話したことを通級による指導担当教員が付箋に書き留めるようにした。（図8参照）

その付箋を並べ替えて「生徒Aが考えていること」「通級による指導担当教員に手助けしてほしいこと」、「生徒A自身ができること」を考えるように促したところ、自分なりの考えを通級による指導担当教員に伝えることができるようになった。「自分はこのように受け止めているが、友達はどのように感じているのだろうか」と、相手の気持ちを推し量るような発言もあった。



図8 話し合いのための付箋

作文に時間をとったこともあった。「提出の締め切り日まで間に合わない」と通級による指導担当教員の在室する相談室へ直接訴えに来たためである。すでに、ホームルームの時間に作文を書くことに苦労している様子に気づいた学級担任が通級による指導担当教員に、生徒Aから聞いた内容を書き取って渡してしてくれたおかげで、そのメモをもとに生徒Aと通級による指導担当教員とで話し合いながらほぼ完成させることができた。

#### (5) まとめ

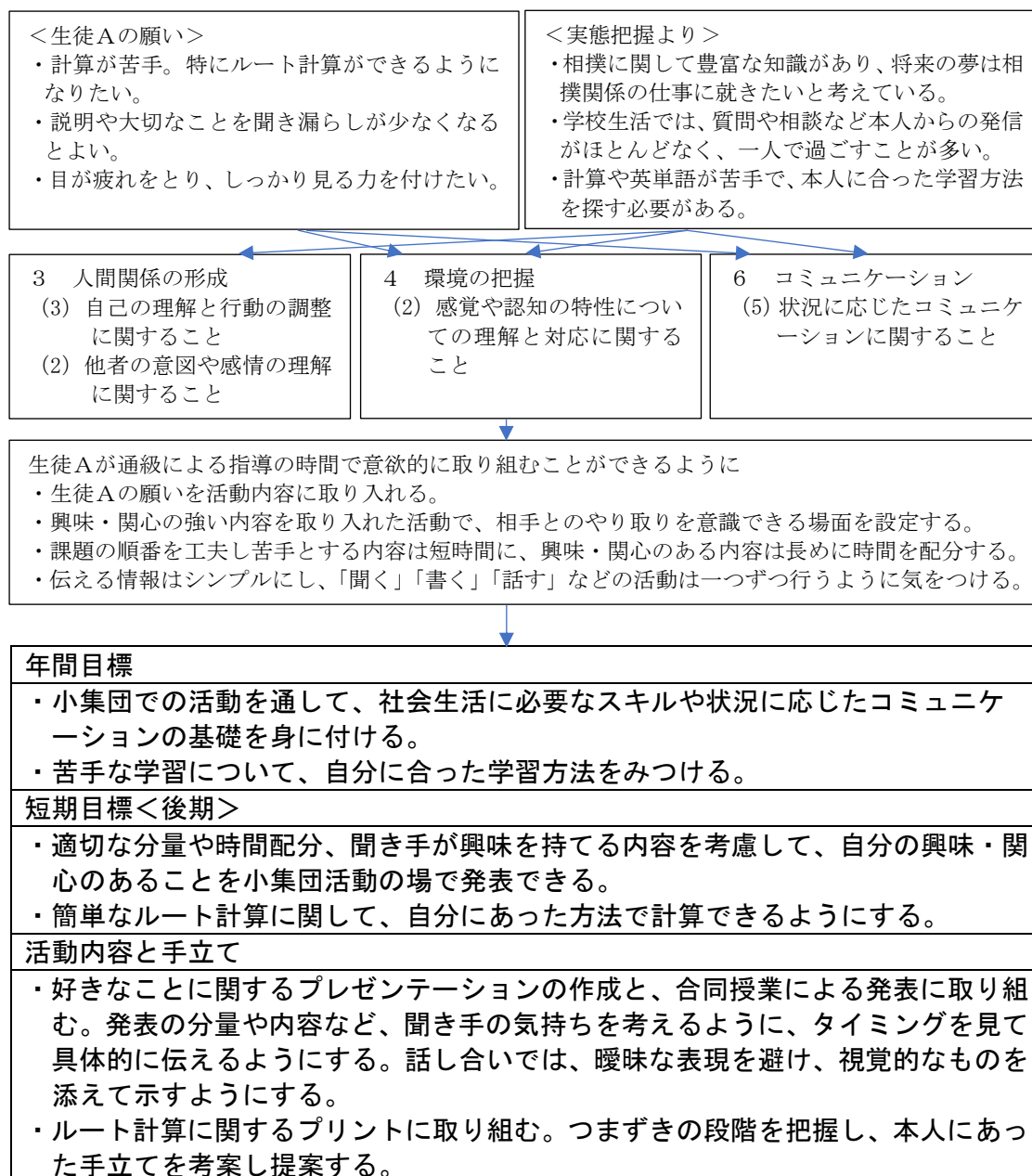
生徒Aは通級による指導の時間に一度も欠席はなく、授業後の振り返りシートでの自己評価も毎回高かった。一年間を通して、意欲的かつ主体的に活動に取り組めたのではないかと考える。生徒Aの指導計画を立てる際に、本人の興味・関心のある内容を取り入れて、生徒Aと話し合っただけで活動内容を決定したが、この結果につながったものと考えられる。

生徒Aは、興味・関心のあることを話し合う場面であれば、会話のやりとりを楽しんだり、相手を気遣ったりできることがわかった。対話の時間を通じて、生徒Aが相撲に関する様々な情報を収集し、相撲観戦を通して社会的なルールや漢字の読み書きといった様々な知識を学んでいるということもわかった。さらに、話し合える関係を築くことができるようになれば、その他の話題に関しても自分から質問や相談ができることもわかった。このように、通級による指導の時間において生徒Aの学び方に関する理解が深まったことは、今後の学校全体での指導や支援の一助となるのではないかと考える。

生徒Aの学級担任や保護者との連携としては、通級による指導担当教員が、学級担任と保護者との個人懇談に2回参加した。学級担任、保護者から得た学校生活や家庭での様々な情報は、指導上大変参考になった。保護者からは、通級による指導の時間に実施した就労移行支援事業所の見学後に、生徒A自らが希望し、夏季休業中に事業所に出向き、作業を体験したというエピソードを聞くことができ、卒業後の進路に関して本人なりのイメージをもって考え始めていることを知ることができた。

通級による指導の時間を通してわかった生徒Aの力や、できるようになったことを校内で情報共有をしながら、学校全体で支援を続けていきたい。

図3 生徒Aに対する指導目標及び指導項目の設定に関する手順と内容



受託機関名：福井県教育委員会

実践事例：対象教員の通級による指導経験年数2年（教員の経験年数18年）

指導例：高等学校4年生

## 1. 通級による指導担当教員の専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制

### 1-1. 専門性のポイント

- 発達障害等の障害特性やそれに応じた指導内容や方法について理解する。
- 高等学校卒業後を見据え、自立と社会参加のためのよりよい指導内容や方法を検討する。
- 生徒の気持ちに寄り添い、意見を尊重しながら指導内容や方法を検討する。
- 通級による指導だけではなく、学校の特色や学科・コース、科目・単位等、高等学校における教育課程を適切に理解している。
- 生徒の実態や本人・保護者の希望なども踏まえ、個別の教育支援計画・指導計画を立て、組織的・継続的かつ計画的に指導を行う。
- 学校全体での情報共有や連携した取組等、校内支援体制の構築を図る。また、保護者、地域、医療機関、関係機関等と適切に連携する。
- 必要な支援や配慮が卒業後も活かされるよう、確実な引継ぎを行う。

### 1-2. 研修体制について

- 4月末までに、通級による指導担当教員および通級指導実施校に対し、通級による指導の意義や目的、指導内容や方法等について共通理解を図る。
- 学期に1回程度、発達障害や障害特性に応じた指導・支援に関する研修会や事例検討会を行い、通級による指導に関する専門性の向上を図る。この時、特別支援教育センターなど県の関係機関も参加して協議に加わったり助言したりする。なお、小・中学校に関しては経験の豊富な担当者が初めての担当者にアドバイスなどをする場を設けているが、まだ高等学校における通級による指導が始まって2年目であるので、研修会では全担当者で学び合うことを主とした。
- 小・中学校の通級による指導担当教員との合同の研修会等を設け、校種間の連携を強化したり、継続した支援につなげたりする。
- 授業研究会では、通級実施校の高等学校教職員とともに、有識者（大学教授）や県の関係機関も授業参観や協議会に参加し、発達障害等の特性に応じた指導・支援について協議する。
- 通級による指導担当教員の代表が、県外の先進校視察をし、他の担当教員と情報共有するとともに、自校の取組の参考とする。
- 実践事例や各校の研究内容は、高校通級実施校連絡協議会にて共有し、成果や課題について協議した上で、代表者が県内の実践発表会等で発表する。また、各校の実践のうち一部を実践報告集としてまとめ、県内小・中・高等学校、特別支援学校に配布し、研修会等で紹介することで、小・中学校と高等学校のつながりや違いなどを周知する。

### 1-3. 事業で実施した研修例

#### 【事業で実施した実践例】

通級による指導 担当者研修会	<p>【対 象】小・中・高等学校通級による指導担当教員</p> <p>【目 的】・通級による指導の目的や指導内容・方法の理解 ・発達障害等の特性やそれに応じた指導・支援の理解</p> <p>【実施者】県教育委員会</p> <p>【時 期】4月、8月、3月</p> <p>【内 容】・通級による指導の意義（県発行「通級による指導サポートブック」、「通級指導実践報告集」使用） ・発達障害や言語障害の理解 ・各校の通級による指導の成果と課題発表、情報交換</p> <p>【方 法】・講義（県外講師、県担当者）、グループ協議など</p>
通級による指導 担当者 地区別研究会	<p>【対 象】各地区小・中・高等学校通級による指導担当教員や地域の特別支援学校教育相談担当者</p> <p>【目 的】・通級による指導の知識と技能の向上 ・各地区における連携強化</p> <p>【実施者】県教育委員会</p> <p>【時 期】各地区 年2回程度</p> <p>【内 容】・事例検討または授業研究、情報交換、研究協議</p> <p>【方 法】・地域の医療・福祉等機関関係者による助言</p>
高校通級担当者 研修会	<p>【対 象】高等学校における通級による指導担当教員</p> <p>【目 的】・通級による指導の知識と技能の向上 ・各校の現状と課題の共有、改善に向けた協議</p> <p>【実施者】県教育委員会、特別支援教育センター（県関係機関）</p> <p>【時 期】学期に1回</p> <p>【内 容】・事例検討または授業研究、情報交換、研究協議 ・県外視察の報告、情報共有</p> <p>【方 法】・県内有識者（大学教授）や特別支援教育センター指導主事による助言</p>
高校通級実施校 連絡協議会	<p>【対 象】高等学校における通級による指導担当教員、高校通級実施校の教職員</p> <p>【目 的】・各校の取組内容や成果と課題の共有</p> <p>【実施者】県教育委員会</p> <p>【時 期】11月</p> <p>【内 容】・事例発表、研究協議</p> <p>【方 法】・県内有識者（大学教授）による助言</p>

上記の研修等を通して、担当教員の発達障害等やそれに応じた指導・支援に関する知識・技能等を高めることができた。特に、事例検討や授業研究において多数のケースについて協議できたことは、各校における個に応じた多様な実践において大変有効であった。また、

ほぼ全ての研修会で有識者や専門機関、関係機関と連携し、様々な立場からの専門的意見を聞くことができたことも、通級による指導の深い理解と専門性の向上に意義があった。さらに、小・中学校の通級による指導担当教員との研修等の機会を共有することによって、校種間連携が図られ、継続した支援につなげることができた。

これらの取組を通級による指導担当教員以外の教職員にも周知し、今後ますます、高等学校において、通級による指導をはじめ、発達障害等のある生徒に対する支援や配慮への理解と対応を進めるために、県内実践発表会等で担当教員代表が高等学校における通級による指導の内容や成果と課題について発表した。

#### 【高等学校における通級指導に関する実践発表】

福井県特別支援教育センター 実践研究発表会	<p>【対 象】希望教職員、医療・福祉機関等関係者</p> <p>【目 的】・高等学校における通級による指導の理解促進、周知 ・教職員の資質向上、特別支援教育の推進</p> <p>【実施者】特別支援教育センター（県関係機関）</p> <p>【時 期】2月</p> <p>【内 容】・福井県の高等学校における通級による指導の概要 ・高等学校における通級による指導の実際</p> <p>【方 法】・有識者（大学准教授）による助言</p>
福井県 教育総合研究所 研究発表会	<p>【対 象】希望教職員（県外を含む）</p> <p>【目 的】・高等学校における通級による指導の理解促進、周知 ・教職員の資質向上、特別支援教育の推進</p> <p>【実施者】教育総合研究所（県関係機関）</p> <p>【時 期】2月</p> <p>【内 容】・高等学校における通級による指導の現状 ・「自立的活動」を高等学校で豊かに展開するために</p> <p>【方 法】・実践発表およびグループ協議</p>

当日は、通級による指導の実施校のみならず、様々な校種や関係機関から多数の参加者が見られた。特に、特別支援教育センターの実践研究発表会は、午後の部の3つの発表全てを通級による指導を含めた高等学校における支援や配慮に関するものとし、約100名が参加して会場は満員となった。まだ検討を重ね、実践の積み上げをしている段階ではあったが、大きな場で実践発表を行い、多くの人に聞いてもらったことは、高等学校における通級による指導の周知や理解に大変有効であった。また、担当者にとっても、有効な実践や情報を発信する力を伸ばし、地域における指導・支援の核となることにつながった。

#### 1-4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った取組

○担当教員の代表2名の県外先進校視察を行った。

○中・高等学校特別支援教育コーディネーター連絡協議会にて、担当教員の代表が高等学校における通級による指導の取組を紹介する機会を設けた。また、その後の協

議では、中学校からの個別の教育支援計画等による支援の引継ぎや高等学校の支援体制などについて協議をした。

○県の教育委員会と県の関係機関である特別支援教育センターが連携し、適宜担当教員の授業観察や指導内容の確認を行い、指導・助言を行った。

○通級による指導の手引き※を改訂し、高等学校における通級による指導についても加筆した。

○実践報告集※に、高等学校における通級による指導の情報や実践を掲載した。

※「通級指導実践報告集」「特別支援学級・通級による指導に関する手引」  
掲載 URL:<http://www.fukuisec.ed.jp/>  
(福井県特別支援教育センターHP その他「福井県教育委員会の刊行物」のページ内)

## 1－5. 今後の研修体制

小・中学校において、発達障害等により支援や配慮を必要とする児童生徒が増加しているが、これは高等学校においても同様であり、今後ますます高等学校における支援体制の強化が必要になると思われる。また、小・中学校における支援環境の整備や合理的配慮の理解によりきめ細かに行われてきた支援や配慮を、高等学校においても確実に引き継いでいくことが重要である。

これらのことから、今後も高等学校における通級による指導や支援体制の充実を目指すとともに、小・中学校との連携も強化していきたい。今後の研修体制については、通級による指導担当教員の専門性を伸ばし、関係者との連携を深めるために大変有効であったこれまでの取組を引き継いでいきたい。ただし、研修会等の機会については内容を精選し、それに代えて、高等学校における通級指導に関する資料の作成や実践発表など、情報発信による、取組の周知や理解に努めていきたい。また、高等学校を対象とした特別支援教育に関する説明会や研修会などの充実にも関係機関と連携しながら取り組んでいきたい。

### 【今後の研修体制等に関する検討課題】

- 高等学校特別支援教育コーディネーター対象の特別支援教育に関する説明会の充実  
(個別の教育支援計画等の作成と活用、校内支援体制の充実、支援会議の開催など)
- 高等学校の管理職および教職員対象の発達障害等に関する研修会の充実
- 小学校から高等学校卒業後までを見据えた連携強化や支援等の引継ぎに関する研修会の充実
- 高等学校における通級による指導の取組の成果と課題についての情報発信の強化  
(研究授業、資料の作成、実践発表など)
- 小・中・高等学校の通級による指導担当教員による共同研究

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例】

○通級による指導の経験年数：2年

○教員の経験年数：18年

### ○事業開始前までに受けた研修内容

- ・特別支援教育コーディネーター養成研修

### ○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

【身に付けていた専門性】

- ・発達障害等の特性に関する知識
- ・特別支援学校における指導・支援に関する知識と技術
- ・思春期の生徒に対する教育相談での指導や対応
- ・保護者対応と保護者支援

【身に付けたかった専門性】

- ・高等学校における通級による指導の内容や方法
- ・発達障害等の特性に応じた指導・支援方法
- ・高等学校の支援体制の充実や他機関との連携
- ・中学校や就学・就労先との連携、支援等の引継ぎ
- ・進路指導に対する知識

### ○事業実施中に受けた研修内容等

- ・通級による指導担当者研修会

【対象】小・中・高等学校通級による指導担当教員

【目的】通級による指導の目的や指導内容・方法の理解

- ・通級による指導担当者地区別研究会

【対象】各地区の小・中・高等学校通級による指導担当教員や地域の特別支援学校教育相談担当者

【目的】通級による指導の知識と技能の向上および各地区における連携強化

- ・高校通級担当者研修会

【対象】高等学校における通級による指導担当教員

【目的】通級による指導の知識と技能の向上、各校の現状と課題の共有、改善に向けた協議

- ・高校通級実施校連絡協議会

【対象】高等学校における通級による指導担当教員、高校通級実施校の教職員

【目的】各校の取組内容や成果と課題の共有

### ○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

高校通級担当者研修会では、指導に関する資料や教材を互いに持ち寄って情報交換を行うことができ、自身の実践の大きな参考となった。また、指導内容や方法、校内支援

体制、他教職員や保護者との連携などについての現状や課題についても共有でき、他の担当教員の取組や意見を聞くことで、少しずつ改善に向かうことができた。他の担当教員とは、研修を通して連携が深まり、研修会以外でも通級による指導に関して相談したり指導方法や教材を紹介し合ったりできるようになった。また、研修会で有識者（大学教授）や特別支援教育センター（県関係機関）指導主事から専門的な助言を受けたことは、自身の不十分であった重要なポイントや改善点に気付いたり、さらに取り組んでみたいことが見つかったりすることにつながり、大変有効であった。

小・中学校の通級による指導担当教員との合同の研修会等では、普段関わりの少ない小・中学校の担当教員と情報の共有や協議を行い、お互いの学校における通級による指導について理解を深めることができた。特に、地区別研究会では、地域の現状や課題について深く協議することができ、自身も地域の一員として関係教職員等と連携しながら、支援や配慮を必要とする児童生徒を支えたいと一層強く感じるようになった。

### ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

本教員は、事業に取り組む以前から、高等学校の教育相談担当を務め、悩みや困難がある多くの生徒と関わってきた。そのような中には、発達障害等の可能性のある生徒もいたが、その時は発達障害等の理解が十分ではなく、また校内の支援体制や連携も整備途中であったため、適切に支援や配慮を行うことができないことがあった。そこで、発達障害等について詳しく学び、必要な生徒に特性に応じた適切な指導・支援ができる力を高めたいと考えた。

事業では、通級による指導の意義、指導内容や方法、評価などの教育課程等に関することはもちろん、指導に必要な発達障害等についての知識や指導の技術やポイントなどを有識者（大学教授等）や専門機関から学ぶとともに所属する特別支援学校の取組を活かすことができ、発達障害等に関する知識やそれに応じた多様な指導・支援などの専門性を高めることができた。また、通級による指導は、在籍学級担任をはじめ、関係教員との連携も不可欠であるが、校内支援体制についても実施校の特別支援教育コーディネーターと連携して整備していくことができた。他教職員についても、県の関係機関と連携して校内研修会を開くことで、通級による指導や特別支援教育に対して理解を深めるきっかけとすることができた。また、小・中学校の通級による指導担当教員と合同の研修会等に参加することで、小・中学校の特別な指導に関する情報を知ることができ、早期からの支援や引継ぎの大切さを高等学校でも伝えらるとともに、高等学校における通級による指導でも活かすことができた。

高等学校における通級による指導が制度化されてまだ2年であり、本教員も担当者となって2年であるが、事業による大変内容の深い研修会等を多く受けることによって、通級による指導の教育課程等に関することはもちろん、発達障害等の理解や特性に応じた指導、校内支援体制の整備、関係者や保護者との連携など、様々な力を伸ばし、専門性を高めることができた。また、校内だけではなく、県全体の通級による指導の基盤作りにも寄与した。今後は、これまでに取り組んだ事例や内容の発信方法を考えていきたい。

## 2-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

### 2-1-1. 実態把握

通級による指導の開始にあたっては、県内全高等学校に対象生徒の有無やその実態、必要な指導・支援について調査を行った。そして、挙げられた生徒一人一人について、県と学校とが連絡を取り合いながら実態や必要な指導・支援について検討を重ね、保護者や本人の了承を得た上で、通級による指導を受けることを決定した。

実態把握において参考としたことは、主に以下の5点である。当県独自の取組としては、県の支援ツール「子育てファイルふくいっ子」(※)の基礎調査票がある。こちらは、幼児期段階から取り組むことができ、これまでの状況や指導・支援の様子も継続的に把握できるので、県内において活用が進められている。高等学校においてもこれを活用することによって、生徒の実態やこれまでとの状況の変化を客観的かつこれまでと同じ視点で捉えることができると考えた。

※「子育てファイルふくいっ子」

掲載 URL: <https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/shougai/fukuikko-file.html>

これら5点を主な参考として、個別の教育支援計画等に現在の実態をまとめた。

#### 【実態把握上参考としたこと】

- ・学校での様子（学習状況、友達や先生との関わり、部活動等での様子、得意なこと、よさ、苦手なこと、これまでの具体的なエピソードなど）
- ・家庭での様子（家族や友達との関わり、興味・関心、これまでの具体的なエピソードなど）
- ・障害の状況（診断名、これまでの療育歴など）
- ・支援等の状況（これまでの個別の教育支援計画等、関係機関との関わりなど）
- ・「子育てファイルふくいっ子」の基礎調査票

※これらの内容をもとに、個別の教育支援計画等に現在の実態をまとめた。

### 2-1-2. 指導目標の設定

通級による指導の開始前には、県教育委員会や関係機関の担当者が関わり、通級による指導の意義や目的、教育課程上の位置づけ、指導の目標や通級による指導終了後の生徒の姿の見通し等を、関係職員とともに本人や保護者に丁寧に説明し、意思確認をしながら合意形成を図った。

指導目標の設定については、中学校からの情報の引継ぎや的確な実態把握、そして卒業後を見据えたそれぞれの願いをもとに検討した。一人一人の特性に応じた指導・支援のためには、きめ細かな実態把握とそれに応じた指導目標や内容を適切に関連付けることが重要だと考えた。そこで、「子育てファイルふくいっ子」の基礎調査票の結果を中心に、実態把握からうかがえる困難が自立活動の6区分27項目のどの内容にあてはまるかを考え、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編を参考に指導目標や内容を検討した。なお、卒業後の進学・就職の見通しがあり、そのための指導・支援が必要な生徒には、卒業後を見据えた内容も取り入れた。

そして、それらの指導目標や内容等は個別の教育支援計画等にまとめ、通級による指

導担当教員や在籍学級担任、特別支援教育コーディネーターなどの関係教職員、本人および保護者と共通理解を図った。

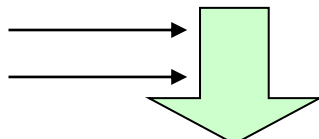
【指導目標の設定】

- ・「子育てファイルふくいっ子」の基礎調査票（得意なことと苦手なことの把握）

基礎調査票の項目：対人関係・社会性、コミュニケーション能力、興味と  
こだわり、注意の集中（注意欠如）、行動面（多動性・  
衝動性）、認知・推論・学習面・運動面、行動・情動

- ・実態把握の内容

- ・卒業後に必要な力



- ・自立活動の6区分27項目にあてはめる

- ・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説

自立活動編を参考に指導内容や目標を検討

※これらの指導目標や内容は、個別の教育支援計画等にまとめた。

## 2-1-3. 適切な評価

評価については、通級による指導担当教員だけでなく在籍学級担任、教科担当・特別支援教育コーディネーターなどの関係教職員が、通級による指導の時間にとどまらず日頃の学校生活の様子も含めて情報を共有し、複数の目で行った。また、本人や保護者からの評価も定期的に行い、指導内容や方法の見直し、指導の継続や縮小・終了の検討の参考とした。

評価の内容としては、毎回の通級による指導における評価、定期的な個別の教育支援計画等の目標の達成状況についての評価、支援終了後の総合的な評価がある。毎回の評価に関しては、日常的に保護者や関係教員との連携や共通理解を図るためにも活用した。定期的な評価は、主に学期に一度、生徒の変容や通級による指導の成果と課題をもとに、指導内容や方法を見直すために行った。支援終了後は、支援内容や方法、支援の時期や頻度、指導時間などが適切であったかを評価し、指導の継続や縮小・終了も含めて、今後の指導・支援に活かした。

【評価の方法と内容】

- ・毎回の通級による指導における評価

【評価者】通級による指導担当教員（必要に応じて閲覧者がコメント）

※在籍学級担任や関係教職員、保護者等に回覧し、情報共有

- ・定期的な個別の教育支援計画等の目標の達成状況についての評価

【評価者】通級による指導担当教員、在籍学級担任、関係教職員、本人・保護者、医療・療育機関や関係機関の関わりがあればその担当者

※評価内容は、個別の教育支援計画等にまとめ、今後の指導に活かす

- ・支援終了後の総合的な評価

【評価者】通級による指導担当教員、在籍学級担任、関係教職員、本人・保護者、医療・療育機関や関係機関の関わりがあればその担当者

※評価内容は、個別の教育支援計画等にまとめ、今後の指導に活かす

## 2-2. 通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

通常の学級における課題を通級による指導により改善・克服し、得られた成果を通常の学級で活かすためには、通級による指導担当教員と在籍学級担任の連携は不可欠であると考えた。

当県の高等学校では、連携の深化のために、昨年度から、通級による指導担当教員が在籍学級での生徒の様子を観察したり、通級による指導における対象生徒の様子や評価を授業終了後に在籍学級担任に随時伝達したりした。令和元年度はその取組を強化するとともに、在籍学級担任が通級指導教室を訪れ、指導内容や生徒の様子を観察する機会を積極的に設けた。これらの相互観察から、それぞれの場においての生徒の様子や変容をうかがうことができ、校内支援委員会やケース会での評価や指導・支援内容の検討等の大きな参考とすることができた。

さらに、通級による指導と学校設定教科の共同実践として、対象生徒が通級による指導で学んだことを集団内で実践する機会も設けた。その指導では、通級による指導担当教員がサブティーチャーとして在籍学級の授業に関わり、教科担当と連携しながら、生徒の学びを共に支えることができ、生徒も安心して授業に取り組むことができた。

これらの取組や連携の様子は、「個別の指導計画」「相談・会議の記録」「授業記録シート」などにまとめ、情報共有のためのツールとして校内で活用するとともに、高校通級実施校連絡協議会で報告し、よりよい連携の方法や必要な専門性について協議した。また、中・高等学校特別支援教育コーディネーター研修会や県内の実践発表会等で発表し、取組の広い周知が図られた。

## 指導例

### ○対象生徒：高等学校４年生

#### 1. 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

対象生徒は、定時制高等学校の４年生であり、障害種は自閉症である。

指導内容や方法については、特別支援学校における自立活動の６区分２７項目を参考にして、対象生徒の実態把握や願いから課題を整理し、指導目標を達成するために必要な項目を選定したり関連付けたりしながら、具体的な指導内容や設定した。

実態把握については、学校や家庭での様子をまとめるとともに、それらを当県方式の支援ツール「子育てファイルふくいっ子」の基礎調査票で数値化し、生徒の得意なことや支援を必要とすることの参考とした。また、医師の診断書や意見、療育歴、これまでの個別の教育支援計画や関係機関との関わりも、継続した支援のために有効であった。これらの内容について、年度はじめに支援会議を開き、通級による指導担当教員、在籍学級担任、特別支援教育コーディネーター、保護者、特別支援教育センター指導主事（県関係機関）、県教育委員会担当者等で実態の確認と、それに応じた指導目標や内容の検討を行った。そして、本生徒について、以下の指導目標と内容を設定し、その実施方法についても同様に検討した。

##### 【本生徒への通級による指導】

- 指導目標
  - ・自己理解を進め、集団の中で状況に応じた行動ができるようになる
  - ・場や相手の状況に応じて、主体的にコミュニケーションをとることができる。

- 指導内容 自立活動の以下の内容に関連すること

##### 3 人間関係の形成

- (3) 自己の理解と行動の調整に関すること
- (4) 集団への参加の基礎に関すること

##### 6 コミュニケーション

- (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

- 実施方法 週４単位（うち、２単位は放課後、２単位は学校設定教科の一部に替えて合同で実施）

実施方法は、４単位のうちの２単位は放課後実施、残りの２単位は本人の意思を確認した上で学校設定教科の一部に替えて実施した。本生徒が通う高等学校は、学校設定教科として「生活と職業Ⅰ」を設定しており、通級による指導との共同実施では、本生徒が学習の一部について、通級による指導担当教員と自立活動として参加し、通級による指導で学んだ社会性やコミュニケーションに関する力を実践する場として活用した。

本生徒が参加した学校設定教科の年間計画は、以下の通りである。

	実施時期	学習内容（具体的内容は抜粋）
前期	4月	○はじめに（教科内容説明）
	5月	○自分への理解を深めよう <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分への理解を深めよう、私の長所・短所</li> <li>・短所の言葉を長所の言葉に変えよう</li> <li>・あなたから見た〇〇さんのよいところは？</li> </ul> ○ストレスマネジメント <ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちはどこから来るの？</li> </ul>
	6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな考え方をしてみよう</li> <li>・認知を変えてストレスを小さくしよう</li> </ul>
	7～9月	○農業実習（他者との共同作業、地域社会との関わり）
後期	10月	○農業実習（他者との共同作業、地域社会との関わり） ○自分に適した仕事を探そう <ul style="list-style-type: none"> <li>・登場人物はどんな仕事に向いているのか（アニメを例に）</li> </ul>
	11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のストレングス（強み）について</li> <li>・自分の適性を活かせる仕事を探そう</li> </ul> ○農業実習（他者との共同作業、地域社会との関わり） ○ストレスマネジメント <ul style="list-style-type: none"> <li>・行動とストレスの関係</li> </ul>
	12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上手に仲間に入ってみよう</li> <li>・上手な聴き方、答え方</li> <li>・あたたかい言葉がけをしてみよう</li> </ul>
	1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言いたいことをうまく伝えよう</li> <li>・気持ちのよい断り方・頼み方、上手な謝り方</li> </ul>
	2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知と行動の学習を振り返ろう</li> </ul>
	3月	○学習全体のまとめ

合同授業では生徒同士が関わりをもちながら集団内でしか身に付けることができないスキルの獲得を図り、個別指導では集団活動の事前学習や振り返りを行った。振り返りでは、本生徒がうまくできたところや困ったことなどを自己分析し、今後の活動に活かそうとしていた。学校設定教科との共同実施を通して、本生徒は通級による指導で学んだことを担当教員のもとで安心して実践することができ、集団活動に意欲を高め、他者や集団への関わりを望むようになった。

このように、個別または小集団での通級による指導で指導目標のためのきめ細かな指導・支援を行い、集団内での指導においてその通級による指導で学んだことの確認や実践ができたことは、生徒の社会性を伸ばし、自己肯定感を高める上で大変有効であった。

### 【授業の様子】



グループでの話し合い活動



農業実習における共同作業

### 【一年間を終えての振り返りより】

通級 ワークシート 2/6 (水) 天気

名前 ( )

## 1 年を振り返って

1 通級の授業お疲れ様でした。休まず出席したことはすごいと思います。当てはまるものに○をつけて振り返ってみて思ったことを書いてください。

①がんばった      2 まあまあがんばった      3 ふつう  
4 あまりできなかった  
思ったこと⇒

2 次は自分のことを答えてください。  
この1年で自分が変化したかた、と思うことがありましたか？当てはまるものに○をつけてください。

1 結構変わったかも…  
② 少し変わったかも…  
3 あんまり変わってない…  
4 同じかな…

① 1, 2に○をつけた人は…どんなところが変わったと感じていますか？  
まだなっとけで少しだけお世話になった。

## 2. 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法

本生徒については、社会性やコミュニケーション面、情緒の安定、人間関係の形成に関する内容を中心として指導しているため、各教科の内容を取り扱いながら行う「特別の指導」方法の研究は行わなかった。

受託機関名：三重県教育委員会

実践事例：対象教員の通級による指導経験年数1年（教員の経験年数35年）

指導例：高等学校4年生

## 1. 通級による指導担当教員の専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制

### 1-1. 専門性のポイント

- 障害に対する知識
- アセスメントについての知識・活用
- 適切な個別の指導計画を立案する力
- 生徒を適切に指導できる実践力と教材・教具を選択する力
- 保護者や担任等からの教育相談に応じる力
- 関係者間をコーディネートする力

### 1-2. 研修体制について

- ・通級による指導担当教員として資質向上に関する指標

通級による 指導経験年数	通級による指導を担うにあたり必要とされる専門性
～2年	通級による指導を必要とする児童生徒の特性や実態の把握に基づく指導・支援を行うことができる。また、他の教職員と連携・協力しながら、児童生徒が共に学ぶという視点に立った教育活動を実践することができる。
3年～4年	通級による指導を必要とする児童生徒の特性や実態を把握し、指導内容や指導方法を工夫して適切な指導・支援を行うことができる。また、教職員間の共通理解を図りながら、児童生徒が共に学ぶという視点に立った教育活動を実践することができる。
5年～	通級による指導を必要とする児童生徒の特性や実態に応じた指導・支援を、地域や関係機関と連携し、適切に行うことができる。また、教職員間の共通理解を深めながら、児童生徒が共に学ぶという視点に立った教育活動を実践することができる。

- ・研修会ごとに、振り返りアンケートを実施・分析することで、研修内容等を見直し、次年度の発達障害支援の専門性の向上のために効果的な研修体制を構築する。

### 1-3. 事業で実施した研修例

高等学校および小中学校の通級による指導担当教員の発達障害の可能性のある児童生徒への指導と支援に係る専門性の向上と、通級指導教室の運営に係る専門性を身につけることを目的とし、111名が受講した。

講座ごとに振り返りシートに研修内容に係る評価や自己評価を行い、受講者の90%以上から、有意義な研修であったとの回答を得た。通級による指導担当教員として必要な知識、心構えを身につける機会となるとともに、多面的に児童生徒を見る視点、

一人の「人」の成長を途切れなくとらえる視点、専門的に深く見極めていく視点等を整理する機会となったと考えられる。

# ○発達障害専門研修

実施日	回数	内容	方法	対象※	実施内容および講師名
8月29日 (木)	第1回	通級指導教室の基礎・基本	講義	①	講師：皇學館大学准教授 山本智子 「通級による指導」の連携 つむぐ、つながる支援の実践
	第2回	通級による指導の実践	講義	①	講師：皇學館大学准教授 山本智子 「通級による指導」の実践 身体性を高める
9月20日 (金)	第3回	通級指導と支援システムの連携	講義	①②	講師：広島県廿日市市教育委員会特別支援教育アドバイザー 山田充 「通級指導と支援システムの連携」
	第4回	通級指導教室の運営	講義	①②	講師：広島県廿日市市教育委員会特別支援教育アドバイザー 山田充 「通級指導教室の役割」
10月18日 (金)	第5回	発達障害の特性の理解	講義	②③	講師：国立特別支援教育総合研究所 海津亜希子 「LDのある子どもの実態把握とその指導①」
	第6回	発達障害の特性の理解	講義	②③	講師：国立特別支援教育総合研究所 海津亜希子 「LDのある子どもの実態把握とその指導②」
11月12日 (火)	第7回	発達障害の特性の理解	講義	②③	講師：三重大大学教授 松浦直己 「『神経発達障害』と知的障害とボーダーラインについて」
	第8回	発達障害の特性の理解	講義	②③	講師：三重大大学教授 松浦直己 「ADHDと教員が知るべき投薬治療の留意点について」
12月5日 (木)	第9回	進学・就職を見すえた支援	講義	①②③	講師：桃山学院教育大学教授 松久眞実 「進学・就職を見すえた支援①」
	第10回	進学・就職を見すえた支援	講義	①②③	講師：桃山学院教育大学教授 松久眞実 「進学・就職を見すえた支援②」

※ ①：通級による指導経験年数2年目までの教員

②：通級による指導経験年数3年～4年目の教員

③：通級による指導経験年数5年目以上の教員

(令和元年度については①～③の全員が受講)

## 1-4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った取組

### ○発達障害エリア研修（5地域 各1回）

・県内5地域（北勢・中勢・南勢・伊賀・東紀州地域）の通級による指導担当教員と特別支援学校特別支援教育コーディネーターが、地域の現状と課題を共有し、連携を図ることを目的とする。

・対象者：すべての通級による指導担当教員

### ○高等学校特別支援教育コーディネーター会議（3回）

・高等学校における発達障害支援に係る研修

・高等学校と特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが各学校及び各地域の発達障害支援の状況について情報共有

・対象者：高等学校の通級による指導担当教員（第2回は、特別支援学校特別支援教

育コーディネーターとの合同開催)

## 1-5. 今後の研修体制

発達障害の可能性のある児童生徒への指導・支援に係る教員の専門性の向上を図るため、教員としての資質の向上に関する指標に対応した研修等を実施する。

### ○発達障害専門研修（8回）

実施日	回数	内容	方法	対象※
9月上旬	第1回	通級指導教室の基礎・基本	講義・演習	①
	第2回	発達障害支援に係る校内体制の整備	講義	①
9月下旬	第3回	通常の学級の担任と通級による指導担当教員等との連携	講義	①
	第4回	発達障害の特性に応じた教科指導における教材教具の工夫	講義・演習	①
10月中旬	第5回	「読み書きのつまずきに関するチェックリスト」を活用した実態把握の方法と具体的な指導	演習	①②
	第6回	VR機器を活用したソーシャルスキルトレーニング	講義・演習	①②
11月中旬	第7回	発達障害のある児童生徒の実態把握・支援の方法	講義・演習	②③
	第8回	発達障害のある児童生徒の評価	講義・演習	②③

### ○発達障害支援研修（3回）

- ・県立子ども心身発達医療センターの医師等による発達障害支援に係る助言（講義）
- ・外部の専門家等による発達障害支援に係る指導・助言（講義）
- ・県立かがやき特別支援学校の医療と連携した発達障害支援に係る取組のシンポジウム形式による実践報告会（講義）
- ・対象者：すべての通級による指導担当教員

### ○発達障害エリア研修（5地域 各2回）

- ・県内5地域（北勢・中勢・南勢・伊賀・東紀州地域）の通級による指導担当教員と特別支援学校特別支援教育コーディネーターが、地域の現状と課題を共有し、連携を図ることを目的とする。
- ・各地域の通級による指導担当教員と特別支援学校特別支援教育コーディネーターが支援の状況について情報共有（演習）
- ・各地域における発達障害支援に係る事例検討（演習）
- ・特別支援学校特別支援教育コーディネーターや、指導的立場にある通級による指導担当教員等による経験の浅い教員への支援（講義）
- ・対象者：各地域の通級による指導担当教員

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例】

○通級による指導の経験年数：1年

○教員の経験年数：35年

### ○事業開始前までに受けた研修内容

- ・平成 30 年度 通級による指導担当教員等研修講座  
発達障害支援研修講座（第 1 回～第 5 回）  
学習障害（LD）の支援研修講座（第 1 回～第 4 回）

### ○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

（実施前に身に付けていた専門性）

- ・保護者や担任等からの教育相談に応じる力
- ・関係者間をコーディネートする力

（実施前に身に付けたかった専門性）

- ・障害に対する知識
- ・アセスメントについての知識・活用

### ○事業実施中に受けた研修内容

- ・発達障害専門研修（第 1 回・第 2 回、第 5 回・第 6 回、第 9 回・第 10 回）
- ・発達障害エリア研修
- ・発達障害支援研修

### ○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

- ・支援者がポジティブな気持ちで指導・支援を考えること
- ・子供・保護者対応の前提になるアセスメントは、指導の過程で進んでいく側面があり、教員には、自分の見立てを「修正する力」が求められること
- ・子供が学習につまずく前に、また、子供の学習のつまずきが深刻化する前に指導・支援を提供することを目指すこと
- ・高等学校卒業後を見すえた支援でなければならないこと

### ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

- ・生徒のどんな様子に目を向け、どんな状態に気づかないといけないか、どうすれば自身の課題に気づかせ、取組に意欲を持たせるかを考えることができるようになった。
- ・生徒の障害の特性を理解した指導・支援を行うことで、生徒の主体的な行動に変化が見られた。

## 2-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

### 2-1-1. 実態把握

- ・生徒の「できないこと」に視点を向けるのではなく、「強み」を活かした指導につなげる。
- ・生徒本人や、家族などまわりの人が「困っていること」を中心的課題としてとらえる。
- ・実態を把握するために「チェックシート（資料 1）」を活用した調査をすべての教員で行う。（6 月）
- ・調査結果から抽出された生徒について、KJ 法を用い「強み：得意なこと」「弱み：苦手なこと」「指導するうえで効果的な声かけ等」「支援の必要性等」別に情報を収集する。（7 月）

- ・次年度に通級による指導を受ける予定の生徒の情報や保護者アンケートの結果等を「アセスメントシート（資料２）」にまとめる。（12月～1月）

### 2-1-2. 指導目標の設定

- ・通級による指導担当教員がアセスメントシートや本人・保護者との面談内容を考慮し、1年後の姿を長期目標とし設定する。また、段階的に指導できるよう学期毎の短期目標を設定する。
- ・目標については、自立活動の6区分27項目を踏まえ、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターの助言をもとに設定する。

### 2-1-3. 適切な評価

- ・通級による指導の取組を振り返ることで、成果や課題を整理し、次の指導内容の改善を図る。
- ・通級による指導の取組後、担当教員全員で振り返りの時間を設け、生徒一人ひとりの取り組み方、目標の達成状況や、成果について話し合い、記録する。また、生徒が授業の初めと終わりに記入する「デザインファイル（資料３）」に基づき、「達成状況」と「今後の課題」を記録し、評価につなげる。
- ・生徒の実態に合わせて見直し変更した目標や指導内容については、通級による指導担当者、管理職、在籍学級担任により構成される「通級関係者会議」で協議・確認する。
- ・3学期の評価を終えた後、個別の指導計画の内容について生徒の指導に関わる教員全員で確認し、目標が十分に達成できたかを協議し、個別の指導計画の年度末評価に記入する。

### 2-2. 通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

- ・個別の教育支援計画及び個別の指導計画は、特別支援教育を担当する教員（通級による指導担当教員含む）と在籍学級担任、発達障害支援員（連携支援コーディネーターのこと）がケース検討会議で協議し作成する。
- ・学期ごとに全教員に聞き取りを行い、具体的な支援の状況や効果を確認し、必要に応じて指導内容を変更する。
- ・特別支援教育を担当する教員が在籍学級担任に対象生徒の通常の授業での様子について聞き取り、必要に応じてケース検討会議を開催する。
- ・通級による指導担当教員以外の教員が、通級による指導の具体的な実践内容や生徒への支援について学ぶことができるよう、1回に2～3人の教員が、年度初めに作成したローテーション表に基づき、校内研修の一環として通級による指導に参加している（ゲストティーチャー制）。

## 指導例

○対象生徒：高等学校4年生（ADHDの診断あり）

### 1. 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

- ・以下の項目について整理し、対象生徒について実態把握を行い、アセスメントシートに記入。

（チェックシートによる調査結果から）

入学時の情報、通常の学級での様子

（本人・保護者からの聞き取りから）

得意なこと、苦手なこと、抱えている問題、家庭での様子、地域での様子、落ち着く場所、対人関係でうまくいったこと など

- ・卒業後の生活に目を向けさせることで、前向きな気持ちを育めるよう優先すべき目標として「自分のよいところを伸ばし、就職するために必要な力をつける」と設定。
- ・進路決定に向けて、必要な力を1年で身につけられるよう年間指導計画を策定。
- ・指導内容については、授業後に振り返りと評価を行い、学習の成果や課題の確認を行うとともに、どのような指導・支援が生徒自身の気づきにつながるのかについて考慮して設定。

### コミュニティデザインA 指導案

○本時の目標・・・メモを取ることの意義と場面に合ったメモの取り方について考え、練習する。

#### ○授業の展開

時間設定	指導内容	留意点・評価の観点
10分	<b>「デザインファイル」記入</b> 1週間を振り返り、シートに記入する。	無理強いせず、見守り、発言しやすくなるよう声かけをする。
10分	<b>心身リセット</b> ① 2チームに分かれ、マット上に置いてあるストレッチポールの上を横歩きしながら進む。 ② 相手チームのメンバーと出会ったら、両手で相手とタッチしてからじゃんけんをする。 ③ 勝った人はそのまま前進し、負けた人はスタート地点に戻る。負けた人の呼びかけを合図に別のメンバーがスタートし、同じことを繰り返す。 ④ 相手チームのスタート地点に先にタッチしたチームの勝ち。	ストレッチポール上でバランスが取れるか確認する。  ルール通りに進められているか見ておく。  負けたことを自分のチームの次のプレイヤーに伝えられたか。
40分	<b>本日のメイン</b> ① メモを取ることの意味について考え、話し合う。 ② 自分の普段の生活で必要なメモの取り方について考える。 ③ 指示を聞き取り、メモを取る練習をする。 ④ どの箇所をメモする必要があったか	取組の意図を理解して、メモの仕方について考え、話し合いに参加していたか。  実際に指示を受ける時のことを意識し、練習に取り組んでいたか。

	考え、話し合う。 ⑤ 個別に指示を聞き取りメモし、指示内容を復唱する練習を積む。	
30 分	<b>本日の振り返り</b> ① 振り返りを「デザインファイル」に記入する。 ② セルフトレーニングに取り組む。 （メモを取る練習を続ける。） ③ 呼ばれた人は面談に応じる。	セルフトレーニングに取り組めたか。 面談は 1 対 1 で行い、自身の課題について確認させる。

- ・対象生徒は聞き取ったことをメモすることなどに課題があるが、他の通級による指導を受講している生徒の書いた内容を参考にし、自分に合ったメモの取り方を工夫することができるようになった。
- ・自分が工夫したことについて、他の通級による指導を受講している生徒に説明することができるようになった。
- ・他の通級による指導を受講している生徒からの助言を受け入れ、感謝の気持ちを言葉にして伝えることができた。

## 2. 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法

- ・対象生徒の実態について、在籍学級担任および教科担任と共有することにより、通級による指導の取組を在籍学級の指導内容につなげることができるよう、日常的に話し合う機会を持つなど、常に連携ができるよう意識して取り組んだ。
- ・卒業後に必要となることを目標や指導内容に取り入れた。
- ・他の通級による指導を受講する生徒と異なる課題に取り組むことに対して抵抗を感じていたが、学習を進めるにつれて成果を実感できるよう、授業後の振り返りや評価を行った。

[illegible]

チェック項目以外に気になる点がある生徒に関しては、下段の枠内に文章で記入してください。

[illegible]

チェックシート②（担任）

担任用			I			II																						
			学習			特性											対人関係							コミュニケーション				
			1	2		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		13	14	15	16	17	18		19				
クラス	生徒名	記入者	一斉の指示が通りにくい	私語が多い	合計	時間・期限を守れない	配布物などをすぐなくす	落ち着きがない、頻繁に席を立つ	話の途中に割り込む	急な予定変更があると混乱する	ルール・順序を守らない	こだわりがある	感情の起伏が激しい	集会などが苦手	合計	トラブルをよく起こす	友だち関係が極端に乏しい	攻撃的な言動が目立つ	反社会的な行動が目立つ	ネガティブな発言が目立つ	合計	ペア・グループ学習などが苦手	会話が一方的で発展しない	チック・緘黙傾向	合計	全体合計		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
					0										0						0				0	0		
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0										0						0				0	0			
				0																								

年組生徒氏名	
配慮すべき事項	とるべき対応
得意なこと・興味・関心	苦手なこと・抱えている問題
【家庭】家族関係様子	ほっとできる場所
【学校】人間関係様子	ストレッサー
【地域】人間関係施設	

**備考**

※追記に関しては手書きで行い、記入日も書き入れること。

表面化したトラブル・苦戦状況

これまでの対応（うまくいったこと・いかなかったこと）

**指導例：高等学校 1 年生～4 年生**

## ウ 通級による指導担当教員に対する研修の目標

### (7) 事業１年目の目標

- ・ アセスメントの適切な実施及び特性の課題に応じた指導内容の設定ができるように通級による指導担当教員の専門性向上を図る。
- ・ 校内において特別支援教育に関わる研修の立案・実践ができるとともに、外部機関や専門家と連携を図り、適切な指導が実施できる自校通級体制を構築する。

### (4) 事業２年目の目標

- ・ 生徒の社会的自立を見据え、指導の成果が多様な場面で応用・一般化できることを目標とした指導内容を検討し策定する。
- ・ 特別支援教育の視点を学校全体で共有し、通級による指導担当教員の専門性にのみ依存することのない指導体制と、学校全体の特別支援教育体制の構築を図る。
- ・ 府立高等学校全体に対して通級による指導に対する理解を普及し、ＩＣＴ活用を含めた特別支援教育の充実と取り組みの向上を図る。

## エ 取組の評価

### (7) 事業１年目の評価

通級による指導担当教員は特別支援学校の勤務経験者であり、特別支援教育に対する高い専門性を持っている。高等学校で通級による指導を実践するにあたり、10名の対象生徒に対して適切なアセスメントと自立活動を実践することができた。併せて、専門性を持った通級による指導担当教員（主担当）と学年担当等（副担当）による「通級指導チーム」での実践をすすめ、学校全体の特別支援教育の充実に繋がった。一方で、評価の妥当性について課題が残った。通級による指導で習得した知識・技能の発揮が教室や校内など限定的な場に留まるという報告を受けた。高校生段階に応じた自立活動の在り方について、更なる研究をすすめる必要がある。

### (4) 事業２年目の評価

拠点校は「一般化」をキーワードに指導内容の研究に取り組み、校内行事や地域イベントのスタッフ業務の経験、公共交通機関の利用体験等の活動的なプログラムを導入した。指導後には、生徒や保護者、通級による指導に直接に関わらない教職員からも肯定的な評価があり、指導方法が有効であったことが確認できる。

専門性の拡大を目標に指導体制の研究をすすめた。専門的なアセスメント及び個別の指導計画の作成については主担当が担うが、教室での実際の指導についても従来は主担当が全てを行っていた部分を、指導案をもとに副担当が指導を行い、主担当がサポートをする機会を徐々に増やす取組をすすめた。その結果、拠点校の実施した教員アンケートからは、前年度に比べ、副担当の意識の向上と「苦手意識」（普通教科の教員にとって、「通級による指導」は高度な専門性が必要な指導、すなわち＝敷居が高い、という意識が強い）の改善がすすんだことが分かった。

府内四つの地域に設置されている「特別支援教育研究協議会」において、拠点校の通級による指導担当教員が出向き、通級による指導の実践及び拠点校の支援体制等について研修を実施した。写真や動画を用いた具体的な説明は、高等学校における通級による指導についての理解を深め、各府立高等学校における特別支援教育の意識向上に繋がった。

### 1-3. 事業で実施した研修例

#### ア 事業で実施した研修一覧（抜粋）

時期	研修名	内容
H30. 8月	専門家による指導・助言	指導者：京都府 SSC、地域支援コーディネーター 内容：通級による指導対象生徒の選定について
H30. 8月	高等学校における個別の教育支援計画、指導計画の作成と活用	指導者：京都府 SSC、地域支援コーディネーター 対象：拠点校全教職員及び府立高等学校教職員 内容：説明及び指導計画の作成演習
H30. 10月	専門家による指導・助言	指導者：後野文雄 国立舞鶴高等専門学校特命教授 内容：通級の対象生徒への具体的対応について
H30. 10月	中学校訪問：宇治市立黄檗中学校	訪問者：拠点校管理職、通級による指導担当教員 内容：中学校における通級による指導の実際
H30. 11月	日本LD学会第27回大会（新潟） 自主シンポジウム	発表者：拠点校通級担当教員、京都府教育委員会指導主事 主題：「高等学校の通級による個別指導と全体指導との融合により社会的自立を目指す特別支援教育の在り方」
H30. 11月 H31. 2月	先進校視察：福岡県立ひびき高校 岡山県立岡山御津高校 島根県立宍道高校 教育委員会訪問：島根県教育委員会	訪問者：拠点校管理職、通級による指導担当教員、京都府教育委員会指導主事 内容：他校通級、巡回指導の実践と課題 通級による指導導入に対する教育委員会の姿勢
H30. 12月	感覚統合の視点に学ぶ高等学校における発達障害の理解と支援	指導者：加藤寿宏 京都大学大学院准教授 対象：拠点校全教職員及び府立高等学校教職員
H31. 1月	企業訪問：オムロン京都太陽株式会社	訪問者：拠点校管理職、通級による指導担当教員 内容：障害者雇用の実際と企業の対応について
H31. 2月	拠点校におけるICT研修	指導者：拠点校通級による指導担当教員 対象者：京都府北部新設高校（「府立清新高校」）教諭 内容：特別支援教育の視点からのICT活用

R1. 6月	専門家による指導・助言	指導者：後野文雄 国立舞鶴高等専門学校特命教授 京都府 SSC、地域支援コーディネーター 内容：通級による指導対象生徒の選定について
R1. 6月 ～ 10月	府立高等学校特別支援教育研究協議会における拠点校研修（全3地域）	発表者：拠点校通級による指導担当教員 対象：（各地域ごと）府立高等学校特別支援教育コーディネーター、地域支援コーディネーター 内容：拠点校における通級による指導の実践及び特別支援教育体制について
R1. 8月	高等学校における特別支援教育充実のための拠点校研修	指導者：中田正敏 明星大学客員教授 対象：府立高等学校教職員 内容：高等学校における組織的な特別支援教育の推進

時期	研修名	内容
R1. 11月	日本LD学会第28回大会（東京） 自主シンポジウム	発表者：拠点校通級による指導担当教員、教育委員会指導主事 主題：「高校に求められる通級による指導の実践研究」
R1. 11月 R2. 1月	先進校視察：①札幌市立北九条小学校 ②北海道教育大学函館校 ③富山大学アクセシビリティコミュニケーション支援室 ④明星大学発達支援研究センター	訪問者：拠点校通級による指導担当教員、「府立清新高校」教員、京都府教育委員会指導主事 内容：①義務教育段階の通級による指導の在り方 ②高大接続を意識した高等学校の支援の在り方 ③大学における就労を見据えた支援の在り方 ④学生支援プログラム「START」について

## イ 専門性向上と府立高等学校全体の特別支援教育の充実を目的とした取組例

### (7) 大学訪問（4カ所）

- ①研修対象 拠点校通級担当教諭・「府立清新高校」教諭
- ②実施時期 令和元年11月～令和2年1月
- ③研修内容 北海道教育大学函館校・富山大学アクセシビリティコミュニケーション支援室・明星大学発達支援研究センターの訪問
- ④研修目的 高校と大学の引き継ぎを意識した高校生段階に必要な支援の在り方、社会的自立を目的とした大学での学生支援の方法について学ぶ。
- ⑤研修効果 各大学の具体的な支援方法や実践プログラムを学び、指導方法の参考になるとともに、取組の方向性について妥当性を持つことができた。

### (1) 特別支援教育研究協議会における拠点校研修

- ①研修対象 （通学地域ごと）特別支援教育研究協議会（高等学校特別支援教育コーディネーター、地域支援コーディネーター等が出席）
- ②実施時期 令和元年6月・7月・10月
- ③研修内容 拠点校の通級による指導の実践発表及び拠点校の特別支援教育体制についての研修
- ④研修目的 府立高等学校全体に対して通級による指導に対する理解を普及するとともに、高等学校における特別支援教育の視点の拡充を図る。
- ⑤研修効果 動画等を用いた自立活動の具体的な説明等により、通級による指導の実際を学ぶ機会となった。あわせて、拠点校の特別支援教育に対する学校体制と取組についての説明は、自校での取組のヒントにもなり各校のコーディネーターの意識向上にも繋がった。

## 1-4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った取組

本事業において、拠点校の指導体制の充実と通級による指導担当教員の専門性を向上させるための最大の原動力となったのが、通級指導専門性充実検討会議である。会議の委員には特別支援教育に関わる高度な専門性を有した専門家の参加が実現し（表1）、拠点校と教育委員会は的確な指導と貴重な助言を受けることができた。拠点校に対しては対象と

なる生徒の選定及び具体的な指導について指導・助言を受け、LD学会の自主シンポジウムでは研究・発表にも参加をしていただき、通級による指導担当教員の専門性向上に尽力していただいた。また、府立高等学校の特別支援教育コーディネーターや教員対象の研修会においては御講演をいただき、高度な専門性を学ぶ機会となった。

表１ 京都府高等学校通級指導専門性充実検討会議の委員構成（外部専門家）

所属・職名	委員名・人数
大阪医科大学LDセンター 顧問	竹田 契一 氏
京都教育大学総合教育臨床センター 教授	相澤 雅文 氏
国立舞鶴工業高等専門学校 特命教授	後野 文雄 氏
教育ジャーナリスト	品川 裕香 氏
近畿大学心理系専攻 教授	小泉 隆平 氏
京都大学学生総合支援センター 准教授	村田 淳 氏
京都大学大学院発達障害リハビリテーション学 准教授	加藤 寿宏 氏

## 1－5. 今後の研修体制

### ア 委託事業を踏まえた今後の研修体制について

拠点校では、今後も外部機関や専門家との連携体制を継続しながら実践・研究をすすめ、京都府の高等学校における通級による指導のモデルを確立する。あわせて通級による指導担当教員は、府立高等学校の通級による指導の専門家の一人として、教育委員会と連携・協同した研修等を実施していく。研修は、地域ごとの特別支援教育研究協議会との連携や、生徒指導研究協議会・進路指導研究協議会、教務部長会との連携により実施し、高等学校教員全体に対しての一層の理解促進を図る機会とする。

### イ 令和２年度開校「清新高校」に対する研修について（予定）

- ①通級による指導担当教員を対象に、通級による指導対象生徒の選定について専門家からの指導・助言を受ける（６月）
- ②特別支援教育コーディネーターを対象とした研修会を実施し、自立活動の実際及び高等学校における特別支援教育体制の在り方について学ぶ機会を設ける（８月）
- ③国立特別支援教育総合研究所が実施する研修に通級による指導担当教員を派遣し、具体的な指導に必要な専門性の向上を図る（９月）
- ④京都府北部地域（両丹地域）特別支援教育研究協議会において、「清新高校」の取組に関わる研修会を設ける（１０月）

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例】

○通級による指導の経験年数：2年

○教員の経験年数：32年

○事業開始前までに受けた研修内容

	研修内容の概要	研修内容のテーマ
1	発達障害に関する基本的な知識と特性に対する理解及び必要な支援について	「発達障害の理解と支援の方法」 「発達障害と二次障害」 「生きにくさを感じる子ども達への支援」
2	通級による指導の制度化の経緯や法的な位置付けと、指導の形態及び教育課程の編成について	「なぜ高校で通級指導が求められるのか」
3	高等学校における自立活動の指導内容について	「自立活動について」 「社会が求める“社会的自立”とは」 「高校教育現場からみえる18歳からの社会的自立のために必要なこと」
4	合理的配慮の提供までの手順において留意すべき事柄について	「合理的配慮～バランスとプロセスによる支援」
5	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践の工夫について	「ユニバーサルデザインの授業について」

○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

(1) 身に付けていた専門性

- ・通級による指導の制度上の概要と発達障害についての基本的な知識と理解
- ・ホームルーム活動や総合的な探求の時間において、自己や他者の理解、コミュニケーションの育成、主体的な進路選択等に関する授業の実践
- ・電子黒板機能付きプロジェクター、パソコン、タブレット等のICT機器等を活用した授業の実施

(2) 身に付けたかった専門性

- ・収集した情報からの適切な実態把握と個別の指導計画の作成
- ・個別の指導計画の記載内容から自立活動の具体的な指導内容の設定
- ・通級による指導の開始に向けて、生徒、保護者、教職員に対して説明する力

○事業実施中に受けた研修内容

(1) 通級による指導を担当する教員の専門性を高める研修

	研修内容の概要	研修内容のテーマ
1	通級による指導を実施する高等学校での教育課程の編成や自立活動の指導の実践について	「京都市立高等学校における高校通級の実践と自立活動の指導の実際」
2	義務教育段階での特別な指導及び支援を必要とする児童生徒に対する指導と支援に向けた、教員の専門性と自立活動の指導内容及び留意することについて	「小学校における通級指導の在り方について」 (他府県への先進校視察) 「中学校における通級指導と自立活動の実際」 (拠点校の生徒が在籍した中学校視察)

	研修内容の概要	研修内容のテーマ
3	高等学校卒業後の進学先や就労先での支援について及び地域社会での継続した相談・支援体制について	「高大接続を意識した高校での支援の在り方について」（他府県への先進校視察） 「障害者を雇用する事業所の見学」 「京都府立発達障害者支援センターにおける支援の実際」
4	日本LD学会第28回大会（東京大会）に参加し、自主シンポジウムを企画	「高校に求められる通級による指導の実践研究」

（２）京都府立高等学校における特別支援教育を充実させる研修

	研修内容の概要	研修内容のテーマ
1	京都府立高等学校の特別支援教育の推進について（地域ごとの特別支援教育研究協議会に参加）	「京都府立清明高等学校の特別支援教育と通級による指導の実践について」（拠点校での取組の紹介。各校の実践についての交流。）
2	高等学校における特別支援教育を推進する体制づくりに関することについて	「通級による指導の制度上の位置付けと高等学校における特別支援教育の推進」 「高等学校における組織的な特別支援教育の推進」
3	障害のある生徒の一人一人の教育的ニーズの把握と適切な指導及び必要な支援について	「高等学校における個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と活用」、「感覚統合の視点に学ぶ高校における発達障害の理解と支援」
4	発達の特性に考慮した指導内容と教材の工夫について	「学習場面におけるタブレット端末を活用した支援の効果について」

○教員にとって役立つ研修・指導・助言の内容

（１）研修について

①高等学校における障害のある生徒に対する適切な教育的支援について

通級による指導を実施する小学校、中学校、高等学校への訪問や、さらに高校卒業後の進学・就労先等に関連する機関である、大学の学生支援室、障害者を雇用する事業所、発達障害者の相談窓口を行う発達障害者支援センターの視察を通じて、担当者からの説明や聞き取り及び意見交換を行った。この研修全体の参加を通じて、障害のある生徒一人一人に対して長期的な視点での支援の継続性の大切さを実感するとともに、高校生の発達段階を考慮した自立活動の指導のあり方について考える機会をもつことができた。中学校卒業後のほとんどの生徒が高等学校に進学をする現状において、高等学校が教育を受ける最後の機関と考えることができる。研修を通じて得た高等学校の通級による指導に求められていることを、自立活動の指導内容の設定や個別の教育支援計画の作成の視点として取り入れて活用することができた。

②個別の指導計画の作成と活用について

京都府スーパーサポートセンター及び管轄する特別支援学校に設置されている地域支援センターの方を講師として、個別の指導計画の作成と活用について研修を受けた。最初に個別の指導計画の作成についての必要性和基本的な考え方についての説明を受けた後、発達検査の結果や学習上又は生活上の困難さが記入された事例から指導

目標を設定することを行った。事例は特徴的なものについて扱われ、指導目標の設定については、参加者が意見交換する場面も設定され、実際に個別の指導計画を作成するワーキングを通じて、目標を記入する上でのポイントの説明を受けた。この研修を通じて対象生徒について実際に作成するときに、実態把握した内容から目標を設定し、目標を達成するための手立てを検討することに活用することができた。

### ③自己研鑽を深める機会となった拠点校での取組の実践発表について

日本ＬＤ学会第２８回（東京大会）では「高校に求められる通級による指導の実践研究」というテーマでの自主シンポジウムを企画し、拠点校で取り組んだ自立活動の実際と担当教員の専門性の拡大について実践発表を行った。また、京都府立学校の３つの地域（両丹地域、口丹地域、山城地域）の特別支援教育研究協議会において、拠点校の特別支援教育の体制と通級による指導の取組を紹介した。発表する立場で相手に伝えるためには自分自身が発表する内容について研鑽を深める必要がある。また、発表後に出席者から感想や助言を受けたり、意見交換をしたりすることで拠点校での取組に対する評価を直接受けることができ、今後の取組の参考とすることができた。

## （２）専門家からの指導・助言 について

### ①生徒、保護者への対象生徒の選定結果の説明について

対象生徒の選定については、選定に関わる校内組織で対象生徒の候補について案をまとめ、専門家の指導・助言を受けた後に、校内委員会での検討を経て候補者を決定する。専門家は京都府教育庁指導部高校教育課、京都府スーパーサポートセンター、管轄する特別支援学校に設置されている地域支援センターの各担当教員で構成されている。選定結果を生徒、保護者へ通知し合意形成を行う際の説明について、専門家から指導・助言を受けた。その内容は、対象の候補となった生徒及びその保護者に対しては、生徒の自立活動の目標を示して指導の終了時の姿を明確に伝えること。そして、対象の候補とならなかった生徒及び保護者に対しては、生徒の困りに対して拠点校が実施する特別支援教育の全体指導や個別指導において具体的な指導・支援を行っていくことを伝えること。選定されなかった不安や否定的な感情を持たないように、今後の生徒の様子を継続して観察していくことの説明を丁寧に行い、全家庭において理解を得ることができた。

### ②通級による指導を受講する生徒への具体的な指導・支援について

自立活動の指導を行っている生徒について、在籍学級の担任や教科担当等の関係教員によるケース会議を開催し、学校生活での現状の課題を出席者で共有し支援の内容について検討を行った。会議においては担任より学校生活全般について、教科担当からは授業での学習の取り組みについて報告がされた。この会議には専門家として、京都府スーパーサポートセンター専門委員の先生に同席していただき、対象の生徒の学習面や生活面でのつまずきの要因についての見立てや、障害特性に応じた具体的な手立てについて助言を受けた。助言の内容は対象生徒についての実態把握や個別の指導計画の作成及び自立活動の指導内容の設定に活用することができた。

### ③高等学校での通級による指導を担当する教員の専門性について

京都府高等学校通級指導専門性充実検討会議を年３回実施され、委員の方々から通級による指導に対してのそれぞれの立場から様々な意見をいただいた。そのなか

で、教員の専門性として生徒の適切な実態把握の重要性が指摘された。通級による指導の目標を立てるためには、対象生徒の実態を正確に把握する必要がある。高等学校において通級による指導を受ける生徒については、すでに中学校段階までに支援を受けており、その支援の内容について個別の教育支援計画等で引継いでいる場合が多い。その蓄積された情報をもとにして現時点（高校段階）の実態把握を行っていく上で、生徒の発達検査の報告が大切な情報の一つである。担当教員が検査結果を活用できること、さらに自ら検査を実施しその結果の分析を報告できることが専門性となる。

#### ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

##### ・生徒一人一人に応じた指導の視点をいかした教科指導

通級による指導では、対象生徒の実態を的確に把握し、障害の特性に応じた具体的な指導内容を定めた個別の指導計画をもとに自立活動の指導を行う。個別の指導計画の作成に向けては、生徒の学習上及び生活上のつまずきに「気づき」、困難さの要因を「見立て」、指導目標に対する「手立て」を考える過程を経る。さらに、指導の実施状況に応じては適宜評価に対して改善を図っていく。この適切なアセスメントに基づいたPDCAサイクルによる指導は、教科指導において学業不振の生徒に対しての個別指導に非常に有効であった。この事業を通じて、生徒一人一人に応じたアセスメントを意識した指導の視点の幅を広げることができ、教科指導における指導方法の工夫や改善にもつながった。

##### ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業

通級による指導においては、生徒にとって学習の見通しが持ちやすく、内容がわかりやすい教材を準備することとなる。通常の学級においても、教室の環境整備、板書の方法、指示の出し方、教材や教具の選定等を考慮することは、学習に困難がある生徒に対して非常に有効である。この事業を通じて、障害の有無にかかわらず全ての生徒にとってわかりやすい授業をめざして、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を大切に考えるようになった。

##### ・教員間、外部関係機関との連携

通級による指導では対象生徒の的確なアセスメントの実施を行う。実態把握に向けて生徒についての情報を収集したり行動を観察したりする。主に担任からは家庭や学校での様子について、教科担当からは学習状況や授業での様子について、外部の関係機関からは相談や検査結果等からわかる支援の方法について情報交換を行った。連携を通じて通級による指導担当教員の主観だけではなくより多角的にとらえ客観性のある生徒の実態把握となった。この事業を通じて、関係する教員間、外部関係機関が情報を共有し共通理解する機会を通して得たことを、対象生徒の指導方法の検討や見直しにつなげることができた。

## 2-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

拠点校における通級による指導は、本人・保護者からの申込み制を原則としている。通級による指導を申し込む際の提出資料として、生育歴・教育歴を正確に把握するための「通級による指導基礎調査票」を設けている。医療的診断を条件にはしていないが、対象生徒

の特性に応じた指導・支援を実施するため、診断名や発達検査・知能検査の実施時期・機関等の記入欄もある。また、通級による指導の希望理由、学習や生活上困っていること、通級による指導に期待すること等を記述式で質問する「事前ニーズ調査表」は本人用と保護者用をそれぞれ用意している（資料１・資料２）。

申込み後、対象生徒の選定時には、教職員による対象生徒の学校生活の行動観察に加え、京都府教育委員会が毎年、府立高校を対象に実施している「特別な教育的支援を必要とする生徒に関する実態調査」の結果も活用する。この調査はチェックリスト形式となっており、行動、社会性、コミュニケーション、学習面について評価がなされる。主たる評価者は在籍学級の担任としているが、担任の主観による評価の差を軽減することを目的に、副担任や支援員等、複数の教職員で評価するようにしている。

選定後に、通級による指導担当教員が対象生徒と保護者それぞれと面接機会を設定し、ニーズ（困っている内容とその場面・身近な人からよく指摘されること・身に付けたい力・希望する将来像等）を半構造化面接（注１）の形式により把握する。

その後生徒は「自立活動アセスメントチェック」（注２）を実施する。この「自立活動アセスメントチェック」では、生徒が自分自身をどのように捉えているかといった自己理解の状況に加え、どういったスキルの学習内容には意欲的に取り組むことができるかを見るようにしており、指導内容の設定の際に役立てている。また、具体的なスキルについて質問が用意されていることから、生徒が自己評価を進めながら自分自身の困難さや出来ることにも気付く機会となっている。

その他では、拠点校の通級による指導の対象生徒の特徴は、早期から医療・療育機関にかかっていたり、診断の有無に関わらず小・中学校における通級による指導を含め、個別に支援を受けてきたりしている生徒が多い。そのため、過去の個別の教育支援計画や個別の指導計画、標準化された発達検査等の結果を保護者や中学校から引き継ぐケースも多い。これらの情報も、生徒個々の目標設定や指導内容、手立てを設定する際の参考として活用している。

（注１）予め質問を用意しておくが、被面接者の状況や回答に応じて、質問の表現、順序、内容を変化させる面接法。

（注２）本校が独自に作成した学習や社会生活で必要と考えられる具体的なスキルの獲得状況及び獲得したいスキルの自己評価表。（資料３）

## ２－１－２．指導目標の設定

まず、実態把握から得られた情報から、学習上・生活上で困難になっていると考えられる状況を自立活動の視点で抽出・整理し、拠点校で作成している個別の指導計画の状況欄（学習、対人・社会性、コミュニケーション、生活・行動）に分類していく。その後、それぞれの状況に対する指導目標を設定していく。指導目標は、対象生徒が学校生活の適応や卒業後の社会的自立を図るために改善・克服すべき内容を設定するが、個々の生徒の実態や学年も踏まえた上で、達成可能で優先的な内容を検討するようにしている。

次に、設定したそれぞれの指導目標に対して自立活動の６区分 27 項目を設定するが、複数の生徒が同じような指導目標となっても、実態把握で得られた生徒それぞれの困難さの背景等によって、自立活動の区分・項目が異なる場合が出てくるため、丁寧に分析して

いる。指導内容の決定についても、単元における学習活動として設定したり、通級による指導の年間計画全体を通じて設定したりする等、生徒の実態や状況に即して意欲的に活動に取り組める設定上の工夫をしている。

また、個別の指導計画に定めた指導目標や指導内容等は、通級による指導の担当者間で検討・作成するだけでなく、生徒本人や保護者と協議・確認して作成する場合や、主治医の意見を反映させて作成する場合もある。関係者間で確認することは、生徒や保護者、担当者のそれぞれが安心感を持ってその後の指導を進めていくことにつながった。

### 2-1-3. 適切な評価

評価は、毎時の通級による指導における担当教員による生徒個々に設定する目標に対する評価、生徒自身による自己評価や振り返りシートの記述、在籍学級担任等の関係教員による指導後の生徒の変化（般化の状況）、通級による指導担当教員が生徒や保護者と面談をして聞き取った評価等を総合的にまとめ、通級による指導担当教員が個別の指導計画の評価欄に記載していく。

担当教員が通級による指導において行う評価は、毎時の目標に対する到達基準を文言で指導略案に標記しておき、生徒の取組状況に合わせてチェックする形で行った。「何が」「どれくらい」「どのように」できたという具体的な到達基準となるように意識することで、担当者が変わっても評価しやすく、複数の担当者が授業を行うチームティーチングにおいて、評価のズレが起こりにくいという利点があった。

また、拠点校の通級による指導では、教室内で学んだことを、校内（職員室や図書室、保健室や校内に設置された学食）、地域（公共施設等）へと徐々に広げる指導展開を意識している。これは、個々の生徒に対する指導目標に基づき設定した指導内容が、場所や相手等の変化に左右されず、日常生活に使える力として身に付いているかを評価するためである。ここでの評価は、生徒に対する指導内容や指導方法の設定についての点検にもつなげることができ、PDCAサイクルによる授業作りや手立てだけでなく、取組を通じた生徒の実態把握や指導目標の調整に役立てることができた。

自立活動の個別の指導計画の評価は、通級による指導の場面における評価だけでなく、今後に対象生徒が求められることや、学校生活も含めた社会的な場面においてどのような振る舞い等が必要かといったことも記載するようにし、本人・保護者、在籍学級の担任等と共有した。卒業する対象生徒については、通級による指導担当教員と在籍学級の担任が保護者や医師と相談の上、個別の教育支援計画を用いて、進路先への移行支援を行った。

支援の内容・時期といった支援終了後の総合的な評価は、通級による指導を終了した生徒が1名しかおらず実施に至ってはいない。しかし、高校における通級による指導が高校生のライフステージを踏まえて、卒業後の社会生活における適応や自己実現が大きなテーマであると考え、卒業生の実態調査等を通じて評価方法を検討していく必要がある。

### 2-2. 通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

拠点校では、自校通級の特徴を生かし、通級による指導の担当教員が通常の学級担任との連携を深化させるとともに、発達障害等の特性理解・指導方法に関する教員の専門性向上を図ることを目的として、通級による指導に在籍学級の担任が参画する組織体制を構築

した。ここには、通級による指導を一部の担当者に任せるのではなく、多くの教職員が当事者意識を持って推進するという校内文化を定着させ、取組に継続性を持たせる目的も含む。

具体的には、通級による指導を担当する教員は、障害のある生徒の特性理解や指導・支援方法等に一定の専門的知識を有する教員を主担当として配置（２名）し、在籍学級の担任を中心に授業にチームティーチングで入り込む教員を副担当（１３名）として配置している。主担当と副担当とが協同し、対象生徒への指導実施も含めて、実態把握から個別の指導計画の作成・評価までを行う。なお、副担当となる担任の教科指導の時間数は一定の軽減を行い、その分を通級による指導の時間として当てている。

対象生徒が決定した後、本人や保護者との連携は、在籍学級の担任が窓口となっていく。半構造化面接では、主担当が中心となっていく生徒及び保護者からニーズを聞き取り、副担当が同席して聞き取り情報や反応の様子を記録している。

また、個別の指導計画の作成は、本人や保護者から提出された資料や教員による行動観察の記録等を主担当と副担当が協力していく。一定の専門的知識を有する主担当と担任である副担当が共に作成を進めるため、生徒の日々の学校生活における実態と障害等による特性とを相互に関連付けながら実態把握や目標、指導内容等について設定していくことができた。

指導内容についても、普段から直接生徒と接したり、保護者と連絡を取り合ったりしている在籍学級の担任が指導に入るため、生徒の変化や保護者の課題意識等に応じて、弾力的に指導内容を調整し実践につなげることができた。例えば、対象生徒の保護者から、家庭において生徒が感じたことを直接的な言葉で表現することが多いあまり、家族以外の人との間にトラブルが起こりかねないとの心配が訴えられた際に、生徒に対するアサーティブなコミュニケーションを自立活動で取り組ませることができた。また、担任が生徒との日常的な関わりにおいて、自立活動の視点を意識して対応することにつながられた。

評価においても、在籍学級の担任が通級による指導に参画する体制としたことで、通級による指導の場における成果と課題に加え、学校生活等の変化も含めた総合的な評価ができるため、生徒の実態を幅広く正確に把握した評価を行う上では大変有効であった。

一方、通級による指導において、それぞれの生徒に設定している指導内容や効果的だった指導・支援及び評価等の情報共有について、担当者が個々に教科担当者との連携を図っているものの、全体で周知・共通理解するシステムが確立していないことは課題として残った。

## 指導例

○対象生徒：高等学校4年生

### 1. 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

生徒Aは、医師よりLDの診断を受けている男子である。高校における通級による指導は2年目で、小学校及び中学校においても通級による指導を受けてきた生徒である。

実態把握は、通級による指導の開始までに、日常の学校生活における行動観察及び行動観察に基づくチェックリスト（京都府教育委員会が作成している「特別な教育的支援を必要とする生徒に関する実態調査」）、半構造化面接による対象生徒と保護者それぞれのニーズの聞き取りを行った。また、生徒自身による「自立活動アセスメントチェック」の結果や、生徒Aが入学年次（1年生）に地域支援センターの巡回教育相談で受けた知能検査の結果等を活用した。

生徒Aは、学習やコミュニケーション、社会性の面にそれぞれ課題がある。学習面は、入学当初より各教科における個別指導も含めた丁寧な指導・支援を受けていた。そのため、通級による指導では、社会生活を目前に控えた高校生のライフステージも加味し、コミュニケーション及び対人・社会性に焦点をあてた自立活動を行うこととした。

生徒Aの実態は、真面目で教員等からの指示や課題の取組について、取組内容や方法が分かれば自分のペースでやり遂げようとする生徒であるが、複数の指示や課題が出された時には、取組遂行の調整や管理が困難になることがある。また、コミュニケーションが苦手であり、入学当初から困ったことがあっても質問や援助要求をすることができず、周囲の生徒を見て対応するか、教員から何かしらの働きかけがあるまで何もせずに待つことが頻繁にあった。さらに、見通しの持てないことへの不安が強いこともあり、問題解決に向かう行動ができないことや社会経験の不足がうかがえた。

これらを踏まえて、優先すべき指導目標を以下のように設定した。

- 日常的な予定や取組を把握し管理できる。
- 援助要求も含めて日常生活に必要な言葉が場面に応じて使える。
- 社会生活において、困った時に適切に対処することができる。
- 公共交通機関を自分で調べて利用することができる。

指導項目の設定の際には、既習知識の活用・応用による体験的な活動を通じたスキル獲得とともに自信をつけることが重要であると考え、知識習得のみの学習にとどめず通級による指導の場で学習したことや既習知識を活用し行動・対応させる具体的な場面設定を意識した。また、指導計画の策定にあたっては、行事や進路学習等も知識の活用・応用機会と捉え、学校全体の年間計画との関連性を持たせるように工夫した。

例えば、行事の指導項目については、校内の行事として「定期考査」、「学校説明会」、「校外学習」の指導内容を計画し、校外の行事として「ふれあい祭り」、「北コミ祭り」といった地域の祭りのボランティアスタッフに自立活動として参加するという指導内容を計画した（資料4）。なお、それぞれの行事については事前指導、事後指導を行っている。特に「定期考査」においては、事前指導で教科・科目、時間割、受験会場、提出課題の有無と提出期限の確認をさせて（単位制の高校で、履修科目によって受験科目や時間割、受験会場が違いため）、計画的に学習に取り組み、考査日までの見通し持って考査に臨むこと

をねらいとした。「定期考査」の学習は、年間を通じて実施される定期考査ごとに事前に立てた目標に対して、実施後に成果と反省を行い、次の考査に向けて目標を立てることで学習のつながりを持って実施できた。

また、「進路学習」の指導項目については、生徒本人の希望する進路（生徒Aは保育士を希望）に合わせて二つの学習指導を計画した。一つ目は、保育体験への参加に関係した学習内容である。体験実施前の説明会参加に向けた日時調整のための電話連絡、公共交通機関の調査、トラブル対応の仕方について指導を行った。電話では相手と言葉で適切なやりとりができること、公共交通機関の利用では自宅から体験先までの行程を作成できること、トラブル対応では体験中に困ったときに適切に対応できることをそれぞれねらいとした。二つ目は希望する進路の先取体験の学習内容である。保育士の仕事に就いたときを想像して、紙芝居と絵本の読み聞かせについて指導を行った。（指導の詳細は2.に後述）

生徒Aの指導に関わる毎時の指導案では、主担当の教員と副担当の在籍学級の担任からなるチームティーチングが基本であるためそれぞれの担当の役割分担を記載した。特に、実際の場面を想定したコミュニケーションの練習を行う際には、副担当がモデルとなって見本を示すなど教員の役割を明確化し、生徒Aに適切な立ち振る舞いが伝わりやすいようにした。また、通級による指導では毎時スライドを作成の上、プロジェクターで投影し、活動の流れや取組内容、説明を視覚的に提示することで、見通しづくりや内容理解の支援に役立てた（資料5）。

コミュニケーション力の向上をねらう指導において使用する教材は、スライドとワークシートを基本とした（資料6）。スライドは、説明や指示場面での使用に加え、伝える内容や伝え方を投影したままにしておき、コミュニケーションが必要な場面で本人が手掛かりとして確認できるようにした。ワークシートは、どの場面でどのように伝えるかを考えて記入をさせ、そのままコミュニケーションの手順の確認や台本として使用した。まずワークシートを使ったコミュニケーションの練習を通級による指導の教室内や校内等で実施し、力を身に付けるとともに自信がつくようにした。その後、地域で実践させる指導を展開した。

他には、本人からの援助要求を引き出すために、取組を遂行するために必要な教材を意図的に不足させておき、「〇〇が～個足りません。」と伝えさせるような工夫を行った。

生徒Aの変容については、入学当初より、困った場面で援助要求ができないばかりか、職員室で教員を呼び用事をこなすこともできなかったが、必要な場面で職員室へ入室し、用事のある教員を呼び出すことができるようになった。また、人への用件の伝え方や電話練習等を行ったことで、学校や進路先に自ら電話連絡ができるようになった。さらに、教員からの説明を受けて、分からないことをその場で直接質問できるようになったこと等があげられる。

初対面の人との関わりに対して意欲の低い生徒であったが、コミュニケーションを求められる校内の活動や地域のボランティア活動への参加にも抵抗感を示さなくなった。特に、ボランティア活動は、「楽しかった。次も参加したい。」と本人は話しており、様々な機会 で地域の活動に参加するようになった。

生徒 A の年間指導計画（指導内容の設定）

月	時間	単元名 (毎時の主な単元)	学習内容 1 (個別の学習)	自立活動の区分-(項目)
			学習内容 2 (小集団活動)	
4	2	新年度開始	自己プロフィール作成	3 人間関係の形成-(1)
			自己紹介	6 コミュニケーション-(3)
		新年度開始	インタビュー活動	4 環境の把握-(2)
			担当教員紹介	6 コミュニケーション-(3)
5	4	新年度開始	小集団ゲーム	3 人間関係の形成-(3)
			文章づくり (語彙と文法)	4 環境の把握-(2)
		新年度開始	文章づくり (語彙と文法)	4 環境の把握-(2)
			文章づくり発表	6 コミュニケーション-(3)
		ふれあい祭りのボランティア	当日の役割確認	6 コミュニケーション-(3)
			役割の練習	6 コミュニケーション-(5)
		ふれあい祭りのボランティア	活動の振り返り	3 人間関係の形成-(3)
			成果と課題の発表	6 コミュニケーション-(3)
6	3	自己管理 (定期考査)	定期考査の振り返り	3 人間関係の形成-(3)
			次回定期考査の目標設定と発表	6 コミュニケーション-(3)
		進路に向けた活動 (保育体験事前説明会)	活動内容の確認	3 人間関係の形成-(3)
			電話申込練習・本番	6 コミュニケーション-(3)
		進路に向けた活動 (保育体験事前説明会)	活動の心得と準備	5 身体の動き-(4)
			交通機関の利用方法	3 人間関係の形成-(1)
7	2	進路に向けた活動 (保育体験事前説明会)	活動の振り返り	5 身体の動き-(4)
			活動の報告	2 心理的な安定-(2)
		進路に向けた活動 (保育体験)	活動内容の確認、トラブル対応	6 コミュニケーション-(5)
			予定管理	2 心理的な安定-(2)
8	1	進路に向けた活動 (保育体験)	活動の振り返り	3 人間関係の形成-(3)
			軽作業 (学校案内シール)	6 コミュニケーション-(3)
9	3	自己管理 (定期考査)	定期考査の計画・目標設定	2 心理的な安定-(2)
			軽作業「カフェの装飾品作成」	6 コミュニケーション-(3)
		自己管理 (定期考査)	定期考査の振り返り	3 人間関係の形成-(3)
			軽作業「カフェの装飾品作成」	6 コミュニケーション-(3)
		学校説明会のボランティア	事前学習	2 心理的な安定-(2)
			軽作業「学校案内のシール貼り」	6 コミュニケーション-(5)

月	時間	単元名 (毎時の主な単元)	学習内容 1 (個別の学習)	自立活動の区分-(項目)
			学習内容 2 (小集団活動)	
10	3	学校説明会のボランティア	事後学習	2 心理的な安定-(2)
			軽作業「学校案内のシール貼り」	6 コミュニケーション-(5)
		しごとの学習	紙芝居に挑戦	6 コミュニケーション-(3)
			軽作業「学校案内のシール貼り」	6 コミュニケーション-(5)
		しごとの学習	紙芝居に挑戦	6 コミュニケーション-(3)
			軽作業「学校案内のシール貼り」	6 コミュニケーション-(5)
11	3	自己管理 (定期考査)	定期考査の計画・目標設定	3 心理的な安定-(2)
			紙芝居に挑戦	6 コミュニケーション-(5)
		自己管理 (定期考査)	定期考査の振り返り	3 心理的な安定-(3)
			紙芝居に挑戦	6 コミュニケーション-(5)
		校外学習	校外学習事前学習	5 身体の動き-(4)
			絵本の読み聞かせ	6 コミュニケーション-(5)
12	3	校外学習	校外学習の事後学習	5 身体の動き-(4)
			絵本の読み聞かせ	6 コミュニケーション-(5)
		進路に向けた活動 (先取体験)	小集団ゲーム (こころカルタ)	6 コミュニケーション-(2)
			絵本の読み聞かせ	6 コミュニケーション-(5)
		進路に向けた活動 (先取体験)	小集団ゲーム (こころカルタ)	6 コミュニケーション-(2)
			絵本の読み聞かせ	6 コミュニケーション-(5)
1	2	進路に向けた活動 (先取体験)	小集団ゲーム (こころカルタ)	6 コミュニケーション-(2)
			今年の目標設定	6 コミュニケーション-(3)
		自己管理 (定期考査)	定期考査の計画・目標設定	2 心理的な安定-(2)
			感情理解①	6 コミュニケーション-(5)
2	3	自己管理 (定期考査)	定期考査の振り返り	2 心理的な安定-(3)
			感情理解②	6 コミュニケーション-(5)
		進路先の紹介	感情のコントロール③	6 コミュニケーション-(5)
			進路先の紹介調べ学習	4 環境の把握-(2)
		進路先の紹介	スライド作成	4 環境の把握-(2)
			進路先の紹介発表	6 コミュニケーション-(3)

生徒 A の年間指導計画 (通級による指導以外の設定)

月	時間	単元名	活動内容	自立活動の区分-(項目)
5	4	ふれあい祭りのボランティア ※本校を会場に実施する区民祭り	チラシ配布、来場者対応	3 人間関係の形成-(1) 6 コミュニケーション-(5)
9	2	学校説明会のボランティア ※中学生・保護者対象の学校説明会	来校者対応	3 人間関係の形成-(1) 6 コミュニケーション-(5)
12	4	北コミ祭りのボランティア ※地区の公共施設を会場とした区民祭り	来場者	3 人間関係の形成-(1) 6 コミュニケーション-(5)

## 2. 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法

生徒Aは、小さな子どもに関わる仕事に就きたいという理由から保育分野の専門学校への進路を希望していた。通級による指導では、学年単位で実施する進路指導に、より具体性を持たせながら生徒Aの困難を改善させることを目的として、家庭科の内容（家庭基礎-(1)人の一生と家族・家庭及び福祉-イ 子どもの発達と保育）から、紙芝居や絵本の読み聞かせを取り扱って指導した。ここでは紙芝居の指導を紹介する。

自立活動として指導するにあたり、進路先に対する見通しを持ち、意欲的に活動すること（2心理的な安定-(2)状況の理解と変化の対応に関すること・(3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること）、相手を意識した関わり方や伝え方を意識すること（3人間関係の形成-(2)他者の意図や感情の理解に関すること／6コミュニケーション-(5)状況に応じたコミュニケーションに関すること）にねらいを設けた。短期目標は、相手に分かりやすく大きな声ではっきりと伝える（読む）とした。

年間計画の策定にあたり紙芝居等の読み聞かせは、活動自体に必然性を持たせて意欲的に取り組ませるために、生徒Aの進学が内定した後に設定した。

単元名は「進路に向けた活動」で、学習内容は「紙芝居に挑戦」とし、学習活動は授業時間の半分を使い、それぞれ4回ずつ設定した。なお、学習活動がスモールステップで展開できるように配慮し、各回における指導案の目標は、本人の取組状況の評価に合わせながら段階的に高められるように指導した。

教材として使用する紙芝居や絵本は、拠点校の図書館になかったため、公立図書館から幼稚園や保育所に通う幼児向けのもの数作品を取り寄せて活用した。

第1時は、複数の紙芝居の中から一つを選択させ、副担当と分担をして一通り最後まで読ませた。副担当が生徒Aのモデルになることを意図して、生徒Aが読み手のときは副担当が聞き手になり、副担当が読み手のときは生徒Aが聞き手になることを繰り返していく手順を進めた。授業のねらいは、「読むときは相手に向かって絵を向けて、相手に聞き取りやすい速度と声の大きさと読むこと」とした。活動の終了時には、取組を客観的に振り返ることができるよう、ねらいに対する自己評価と主担当や副担当からの評価だけでなく、副担当の読み方を評価させたり、副担当の自己評価を示したりした。これは、紙芝居に求められる技能を意識させることや、自他の比較により振り返りをしやすくするためである。生徒Aの第1時での取組は、読みには流暢さがあるものの、読むことに集中するあまり、視線を下げたまま小声で一方的な音読をする様子があった。本人自身の評価も「声が小さかった」と振り返っている。

第2時は第1時と同じ紙芝居の作品を使用した。第1時でのねらいに加え、聞き手の様子を見ながら読むために紙芝居を抜く前には、聞き手を見ることを加えた。生徒Aは、第1時と比較して大きな声量で音読することができた。本人自身も「前回より声が大きく出せた」と活動を振り返った。また、ぎこちなさはあるものの、一枚読んだ後に相手の様子を見てから紙芝居を抜くことを意識できるようになった。

第3時は、第1時と第2時で扱った紙芝居の作品とは別の作品を選択させ、第1時と同じ指導内容とねらいで行った。初見の作品では、どうしても読むことに集中してしまい、相手に聞き取りやすい速度と声の大きさと読むことが難しい様子であった。

第4時は、第3時で扱った紙芝居の作品について第2時と同じ指導内容とねらいで行った。第3時での経験があるため、声量を大きくすることができ、聞き手を意識して紙芝居を抜く前には相手を見るといったことができるようになった。また、一度に読む量を増やすこともできた。「紙芝居に挑戦」の学習において、生徒Aは繰り返し取り組むことで成果を上げられることが分かり、取組の最後には事前練習や本番を想定したりハーサルが効果的であるとともに、自分自身の安心感につながることを本人に対して評価した。

生徒Aは、保育分野の専門学校が内定している状況もあり、将来に向けたこの学習に対して最初から意欲的に取り組む姿勢がうかがえたが、専門学校から「入学前の学習案内」等があると、より積極的に参加する様子が見られるようになった。また、分からないことや確認したいことがあれば、進路指導を担当する分掌の教員に自ら質問して不明な点や不安を解決するようになり、進路に向けた見通し作りのために自ら行動できるようになったことは大きな変容であった。その結果、友人や担任だけでなく、教科担当教員やその他の教職員など会話ができる人の幅が広がり会話量が増加した。さらに、人前での発表は自信のなさから小声で早口になる傾向があったが、授業中の発表において相手を意識して大きな声で話すことが増えた。

拠点校では、自立活動の評価をする前に生徒にインタビューを行い、生徒A自身も「人前で発表する活動は、進路にも役に立つ内容だったので、ためになった。」「(通級による指導で)経験しなければできなかったかも知れない。」と、取組を振り返っている。

## (生徒用)「通級による指導」事前ニーズ調査票

学籍番号		クラス番号		氏名	
------	--	-------	--	----	--

1. 「通級による指導」を受けたい理由は何ですか

--

2. あなたが現在、困っていることは何ですか

学習をするとき	学校生活
家庭生活	外出したとき

3. 「通級による指導」でどのようなことに取り組みたいですか。

--

4. あなたの高校卒業後の進路希望は何ですか。

--

## (保護者用)「通級による指導」事前ニーズ調査票

学籍番号		クラス番号	
生徒氏名		保護者氏名	

1. 「通級による指導」を希望する理由をお書き下さい。

--

2. お子様の様子で気になることをお書き下さい。

学習面	学校生活
家庭生活	外出したとき

3. 「通級による指導」で期待されることをお書き下さい。

--

4. お子様の高校卒業後の希望進路や、期待する将来像をお書き下さい。

--

# 自立活動 アセスメント チェック

学籍番号 ( ) クラス番号 ( ) 氏名 ( )

A 5＝あてはまる 4＝ややあてはまる 3＝どちらとも言えない 2＝あまりあてはまらない 1＝あてはまらない

B 5＝ぜひしたい 4＝できればしたい 3＝どちらともいえない 2＝あまりしたくない 1＝したくない

			A	B	
項目 1	心理的な安定	1	自分が得意なこと苦手なことがわかっている。		
		2	行動する前にしっかり計画を立てる。		
		3	授業や課題に集中する。		
		4	与えられた役割を果たす。		
		5	最後までやり遂げる		
		6	失敗や予想外のことが起こっても柔軟に対応する。		
		7	自分のした行動を振り返る		
		8	自分のストレスに気づく。		
		9	感情的になっても気持ちをうまく切り替える		
	人間関係の形成	1	適度な距離で人と接する		
		2	人の目を適度に意識して振る舞う		
		3	場の雰囲気を感じ取る		
		4	保護者や兄弟との関係を良好に保つ。		
		5	自分から初対面の人にも話し掛ける。		
		6	仲間と会話を続ける。		
		7	仲間と趣味や興味のあることを共有する。		
		8	仲間と協力しながら仕事や作業をする。		
		9	異性の気持ちを理解する。		
		10	目上の人と話を合やす。		
	コミュニケーション	1	人前で発表やスピーチをする。		
		2	相手の話を関心を持って聴く。		
		3	相手のしぐさや表情から気持ちを読み取る		
		4	言葉の裏の意味を理解する。		
		5	自分が悪いときに謝る。		
		6	怒りや悔しさを言葉で表現する。		
		7	困った時に助けを求める。		
		8	嫌なことをしっかり断る。		
		9	わからないことを質問する。		
		10	うまく仲直りする。		
				A	B
項目 2		1	公共の交通機関を利用する。		
		2	地図で目的地を確認する。		
		3	整理整頓する。		
		4	栄養のバランスを考えて食事をする。		
		5	決まった時間に食事をする。		
		6	十分な睡眠時間を取る。		
		7	疲れたときは休むなど体調を管理する。		
		8	入浴や着替えなど衛生面の管理をする。		
		9	時間のスケジュールの管理をする。		
		10	小遣いなどの経済的な管理をする。		
		11	身だしなみに注意する。		
		12	家庭での仕事の分担の役割を果たす。		

A 5＝あてはまる 4＝ややあてはまる 3＝どちらとも言えない 2＝あまりあてはまらない 1＝あてはまらない

B 5＝ぜひ改善したい 4＝できれば改善したい 3＝どちらともいえない 2＝あまり改善したくない 1＝改善したくない

			A	B
項目 3	聞 く	1 聞き間違いをすることがある。		
		2 説明や大切なことを聞き漏らすことがある。		
		3 個別に指示されると聞き取れるが、集団場面では難しい。		
		4 指示内容の理解が難しいことがある（指示を聞いていても何をすればよいかわからない）。		
		5 話し合いが難しい（話しの流れが理解できず、ついていけない）。		
		6 適切な速さで話すことが難しい（話す速度が「速い」「遅い」と言われることがある）。		
	話 す	7 言葉に詰まったりする（話したい・説明したいことを表す言葉が出てこない）。		
		8 思いつままに話すなど、筋道と通った話しをするのが難しい。		
		9 内容を分かりやすく伝えることが難しい。		
	読む・書く	10 文章を読むとき、文字や行を飛ばしたり、行を繰り返して読んでしまうことが多い。		
		11 アルファベットのpとq、bとdをよく間違える。		
		12 読みにくい字を書く（へんとつくりのバランスが取れない、まっすぐに書けない）。		
		13 板書の文字をノートに書き写すことができない。または時間がかかる。		
	計算する	14 計算するのにとても時間がかかる。		
		15 四則混合の計算、2つ以上の立式を必要とする計算が苦手である。または時間を要する。		
		16 文章題を解くのが難しい。		
	推論する	17 時間や距離や重さや量などを表す単位を理解することが難しい。		
		18 原因と結果を予測することが難しい。		
		19 目的に沿って行動を計画し、必要に応じてそれを修正することが難しい。		
		20 早合点や、飛躍した考えをする。		

## R 1 年度

## 自立活動 指導略案

指導者：T 1、T 2

回	実施日	単元	内容
15	9月25日(水)5限	「学校説明会のボランティア」	事前学習と軽作業

活動内容	
1 「学校説明会のボランティア」事前学習	2 軽作業（学校案内の訂正シール貼り）

- 1 対象生徒 生徒A  
 2 指導場所 ○○○教室  
 3 本時の目標 (1) 学校説明会でのボランティアの活動内容がわかる。  
 (2) 作業で使う必要なことばが分かり、状況に合わせて相手に伝えることができる。  
 4 授業展開

	指導内容	備考
導入 5分	①あいさつ ②本時の内容について説明する。	全体指導 T 1
展開 1 15分	1. 「学校説明会のボランティア」事前学習（個別の学習） ①日時、活動場所、内容、留意事項を確認させて当日の目標を設定させる。 ②ワークシートは指導者の質問に口頭で回答させてから記入させる。	全体指導 T 1 個別指導 T 2
展開 2 20分	2. 軽作業（学校案内の訂正シール貼り）（小集団活動） ①軽作業の内容と手順、準備物の配置を確認させる。 ②場面に合わせて使う言葉を考え、練習をさせてから軽作業を行わせる。	全体指導 T 1 練習見本 T 2
展開 3 5分	3. ふりかえり ①振り返りと評価 ②次回の予告	全体指導 T 1

5 準備物：T 1（タブレット、授業スライド、軽作業材料）、T 2（学校説明会事前学習ワークシート）

## 6 生徒の本時の目標と手立て及び自立活動の視点

	目標と手立て	自立活動の視点
活動 1	学校説明会でのボランティア活動の内容を理解することができる。 プリントを使って時系列に活動内容を確認させる。	2 心理的な安定-(2)
活動 2	作業に必要な言葉を場面や状況に合わせて使うことができる。 伝える場面や内容をプロジェクターに投影して練習をさせる。	6 コミュニケーション-(5)

## 7 本時の評価 生徒A

	活動内容 1		活動内容 2
A	活動内容を理解することができた。	A	作業に必要な言葉が分かり、全ての場面・状況に合わせて使えた。
B	活動内容をほぼ理解することができた。	B	作業に必要な言葉が分かり、ほとんどの場面・状況に合わせて使えた。
C	活動内容をあまり理解することができなかった。	C	作業に必要な言葉を指導者の言葉かけで思い出し、場面・状況に合わせて使うことができた。
D	活動内容を理解することができなかった。	D	作業に必要な言葉を教員の言葉かけがあっても、場面・状況に合わせて使うことができなかった。

## 本日の内容

- ① 挨拶
- ② 授業の説明
- ③ 今後のスケジュール
- ④ 質問タイム
- ⑤ 定期考査に向けて
- ⑥ 軽作業
- ⑦ 挨拶
- ⑧ 片付け

## 軽作業(「カフェ」装飾品)

- ▶ 小集団の活動です
- ▶ 本校「カフェ」から「ハローウィン」の装飾品制作の依頼がきました
- ▶ 装飾品名「くるくるお化け」→ 作り方の説明
- ▶ 作業に必要な言葉を使う ← **本日の目標**
  - ①(取りに行ったとき) 「くるくるお化け制作セットを取りに来ました」
  - ②(受け取ったとき) (確認後)「くるくるお化け制作セットを受け取りました」
  - ③(できたとき) 「できました。確認をお願いします」
  - ④(作業中に質問するとき)
    - 「質問があります……………」(相手)「(回答)です」
    - (確認後) 「(回答)ですね」

自立活動	インタビュー活動		No.
	職員室入退室の手順・マナー		
	年 月 日( ) 限 担当:		
クラス番号[ ] 学籍番号[ ] 名前[ ]			

※場面ごとに必要な言葉や行動する時のマナー、ポイントを記入しよう。

1 職員室に入室する

入室時の言葉	入室時のマナー

2 先生に声をかける

声をかける時の言葉	声をかける時のマナー

3 インタビューをする

インタビュー開始の言葉	インタビューのマナーやポイント
インタビュー活動	
※事前に用意したシートに沿って質問する。	
インタビュー終了の言葉	

4 職員室を退室する

退室時の言葉	退室時のマナー

受託機関名：大阪府教育委員会

実践事例：対象教員の通級による指導経験年数１～３年

指導例：高等学校２～３年生

## １．通級による指導担当教員の専門性のポイントとそれを身に付けるための研修体制

### １－１．専門性のポイント

#### (1) 通級による指導の専門性

通級による指導は、担当教員が中心となって「個別の指導計画」の作成や、通級指導教室での指導を行うが、対象生徒の変容については、通級指導教室だけでなく、通常の学級や学校行事等における様子もふまえて把握することが必要である。そのためには、通級指導教室での成果発信を積極的に行うとともに、担任や授業担当教員等から情報を得ながら、指導目標や支援のてだての見直しを行うことが大切である。

表１ 通級による指導の専門性

専 門 性	内 容
「個別の指導計画」の作成と評価	・ 指導すべき課題の整理 ・ 指導終了時点の「通常の学級における生徒の様子」をイメージした目標設定
自立活動に関する知識	・ 生徒の実態をふまえた指導内容の選定 ・ 指導目標達成のために必要となる内容の関連付けや整理
授業づくり・教材づくりの工夫	・ 指導や支援のてだてを「見える化」 ・ 生徒の身のまわりのものごとを教材として活用
通級による指導の成果を学校全体で共有	・ 通常の学級において指導の成果を発揮するための仕掛けづくり ・ 生徒の変容について、通級による指導担当教員と授業担当教員等が双方向で情報を共有

#### (2) 概念図の作成

(1) で述べた専門性をもとに、概念図を作成した(図１)。概念図を用いることにより、通級指導教室(通級による指導のこと)設置校において、通級による指導担当教員に求められる専門性や通級指導教室の運営に必要な力の提示と、現時点での各校の専門性の状況や、今後充実させていくべき専門性の内容について、関係者間での共有が図りやすくなると考えている。今後、通級による指導担当教員対象の研修等において本概念図を活用し、通級指導教室設置校における専門性の把握や、必要となる専門性の「見える化」に取り組みたいと考えている。

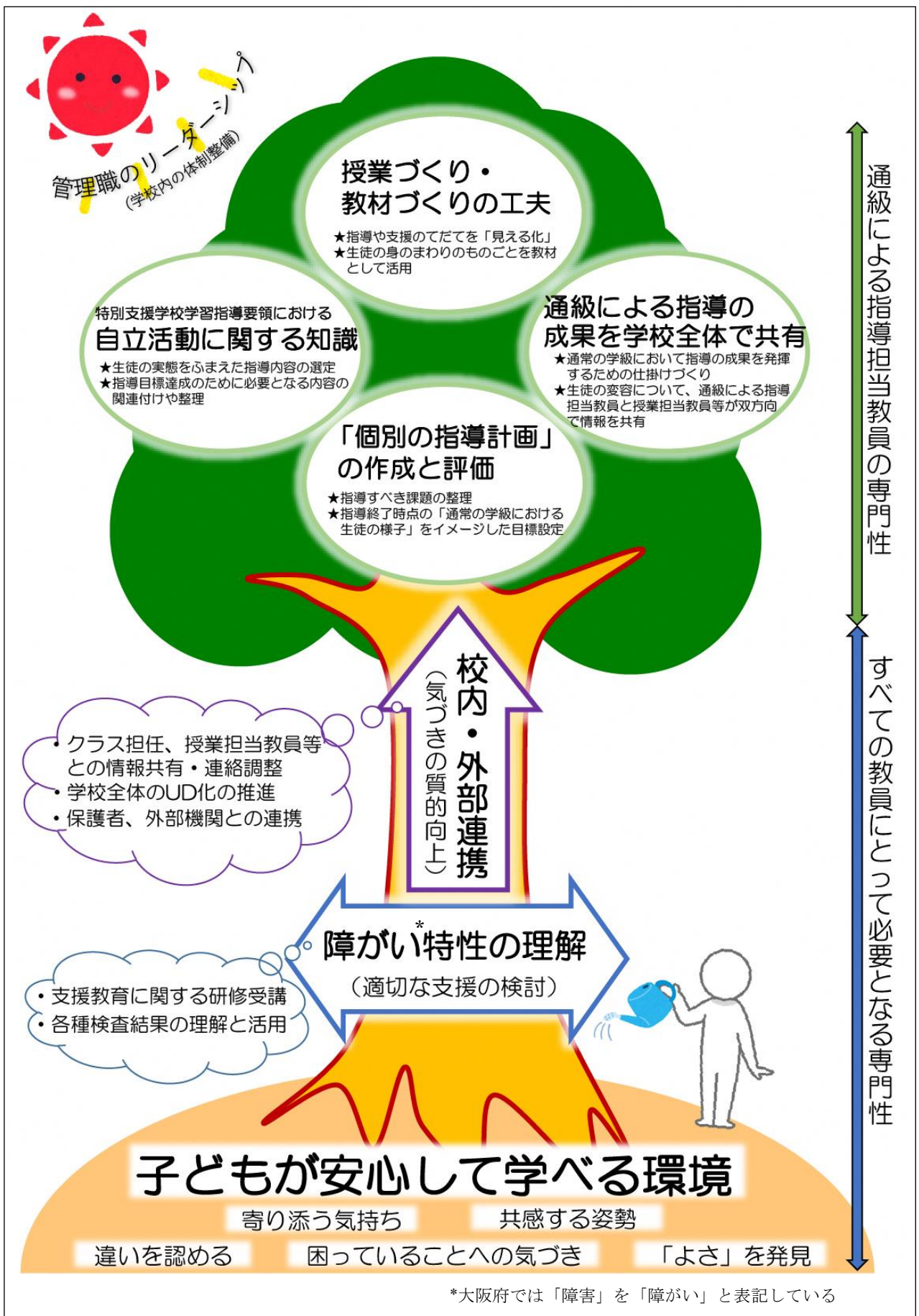


図1 通級による指導の専門性（概念図）

## 1-2. 研修体制について

### (1) 大阪府教育センターにおける教職員研修

大阪府教育センターにおいて、小学校、中学校、高等学校及び聴覚支援学校の通級による指導担当教員を対象に、「通級による指導担当教員研修」を実施した。また、高等学校における支援教育コーディネーター（特別支援教育コーディネーターのこと）を対象に、「高等学校における支援教育コーディネーター研修」を実施した。（表2）

表2 大阪府教育センターにおける教職員研修の概要

研修名	対象	実施月	研修テーマ・内容	講師等
通級による指導担当教員研修	【研修のねらい】 小・中学校、府立高等学校、府立聴覚支援学校の通級による指導担当教員に対し、通級指導教室の果たす役割や、通級による指導に必要な知識・技能についての研修を行い、実践的な指導力を養う			
	【受講者】72人 小・中学校、義務教育学校の通級による指導担当教員及び府立高等学校・府立聴覚支援学校の通級による指導担当教員	5月	・通級指導教室の現状と課題 ・通級指導教室における指導の実際 （講義・演習）	学識経験者 （桃山学院教育大学教授） 大阪府教育庁指導主事
		11月	・指導事例に基づく実践交流 （班別協議）	府内公立小学校・中学校教諭 大阪府教育センター指導主事
高等学校における支援教育コーディネーター研修	【研修のねらい】 高等学校において校内支援体制の充実を図り、支援教育（特別支援教育のこと）を推進するため、支援教育コーディネーターとしての実践的な指導力を身に付ける			
	【受講者】27人 高等学校の支援教育コーディネーター	6月	・大阪府における支援教育の現状と課題 ・「個別の指導計画」と「個別の教育支援計画」の作成・活用に向けて （講義・演習・班別協議）	府立高等学校指導教諭 大阪府教育庁指導主事 大阪府教育センター指導主事
		8月	・生徒理解の方法 ー教育アセスメントの結果を指導に生かすー （講義・演習）	学識経験者 （大阪大谷大学教授）
		9月	・自立活動の指導の実際 （講義・演習）	府立高等学校教諭 大阪府教育センター指導主事
		9月	下欄「支援教育合同研修」	
合同支援教育研修	【受講者】209人 他研修と合同開催	9月	・発達障がいのある子どもの理解と支援の在り方 （講義）	学識経験者 （梅花女子大学教授）

\* 高等学校教員には岸和田市立高校定時制課程教員も含む

## (2) 「高等学校における支援教育コーディネーター研修」における実践

「高等学校における支援教育コーディネーター研修」において、高等学校における通級による指導の取組紹介と、自立活動の内容を取り上げた研修を実施した（表3）。

表3 高等学校における支援教育コーディネーター研修「自立活動の指導の実際」

研修のねらい	通級による指導の取組内容について、支援教育コーディネーターを通じて、府立高等学校全体に発信する
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自立活動の指導」の考え方や指導区分を学ぶ</li> <li>・通級による指導における教材を作成する際のポイントを知る</li> <li>・「自立活動の指導」は、通級による指導の対象生徒だけでなく、すべての生徒への指導に有益であり、生徒指導や教科指導においても「自立活動の指導」の考え方や指導方法を活かすことができることを理解する</li> </ul>

### 研修の流れ

次第・形式・時間	講 師	内 容
1. 高等学校における通級による指導について 【講義：55分】	府立高等学校指導教諭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・拠点校における「自立活動の指導」の実施状況</li> <li>・本人保護者との信頼関係構築のためのポイント</li> <li>・入級までの流れと指導形態</li> <li>・「自立活動の指導」の具体的な取組内容の紹介と成果、今後の課題</li> </ul>
2. 自立活動の取組 －支援学校での経験を高等学校での実践に生かす－ 【講義：55分】	府立高等学校教諭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前任校の支援学校において取り組んだ「自立活動の指導」の実践内容</li> <li>・教材作成において意識したポイントや指導場面・内容</li> <li>・作成した教材の紹介（実物提示を含む）</li> <li>・「自立活動の指導」によって観察できた具体的な生徒の変容や成長の姿</li> <li>・生徒が「自立活動の指導」で学習した内容を学校生活全体や社会生活で活用するための工夫</li> <li>・教員自身の生徒観や指導観の変化</li> <li>・異動先の高等学校における、「自立活動の指導」の観点を活かした生徒指導や教科指導についての実践報告</li> </ul>
3. 自立活動の指導の目標・内容設定について 【講義・演習：60分】	府教育センター指導主事	<p>仮想事例（生徒の実態及び課題）を基に、</p> <p>【講義】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①指導目標や内容の設定</li> <li>②自立活動（6区分27項目）の位置づけ</li> <li>③「自立活動の指導」を行う上での課題設定と、優先順位の設定方法</li> </ul> <p>【演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>④③を基に、指導の優先順位を考える</li> <li>⑤授業時間（50分）を想定した、「自立活動の指導」の内容を考える</li> <li>⑥⑤の授業を展開するために必要な教材について考える</li> </ul>

「3. 自立活動の指導の目標・内容設定について」演習では、対象生徒の仮想事例として、以下の内容を提示し、指導目標や内容の設定、教材等についての班別協議を行った。本研修の実施により、通級による指導を実施していない高等学校においても、「自立活動の指導」についての知識を得ることで、生徒指導や教科指導に関する「気づき」があったことがうかがえる。

#### 【班別協議の概要】

##### ○班別協議における仮想事例（生徒の実態及び課題）

- ・ 聞く力よりも見る力の方が強い
- ・ 一度に複数の指示を出されると、混乱してしまうことがある
- ・ 間違いを指摘された時や自分の思い通りにならない時は、興奮して衝動的な行動を起こしてしまうことがある

##### ○班別協議における受講者の意見等

- ・ 授業において“進捗状況チェックシート”や“スケジュールカード”などを活用してはどうか
- ・ 例を示す場面を多く取り入れ、自ら学習や作業手順を立てることができることをめざす
- ・ “顔文字カード”や“今の気持ちメーター”など感情を「見える化」することで、生徒自身が自他の感情について理解しやすくなり、自分の言葉で相手に伝えやすくなるのではないか
- ・ 調理実習等の課題において、完成形の写真や実物を先に提示しておき、そこから必要な手順を自ら考えさせてみるという取組が有効なのではないか
- ・ 教科での授業や通常の学級、部活動での場面など、実際に起こった場面を活用してはどうか
- ・ 感情コントロールの方法やクールダウンの方法・場所を、生徒自身が知っておくことで、落ち着いて学校生活を送ることができる
- ・ 吹き出し付きのイラストや映像を活用することで、自他の気持ちを整理したりすることができるのではないか
- ・ 適切な行動についてその場で即時に褒めることで、自己肯定感を高め自信をつける
- ・ 周囲の生徒との関係性を広げ、理解し合える仲間を増やす取組が大切

##### ○研修受講者の感想

- ・ 校種や課程が異なりすぐに実践できる内容ではないが、「自立活動の指導」の取組は非常に参考になった
- ・ 工夫次第で効果のある取組ができる、ということがわかった
- ・ 「自立活動の指導」を卒業後の進路や社会生活に活かすという観点が大切だとわかった

### 1-3. 事業で実施した研修例

研究指定校の通級指導担当教員を含む教職員を対象とした専門講座を6回開催し、「教育」、「福祉」、「医療」、「心理」など異なるテーマを設定し、教職員の専門的な知識の向上を図るとともに、中高間のネットワーク構築を図った。（表4）

表4 通級指導担当教員等専門講座の概要

回	実施月	領域	内容	講師
1	5月	教育	「通級による指導について」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・通級による指導の役割</li> <li>・通級による指導担当教員に求められる専門性</li> <li>・高等学校における通級による指導の今後の課題</li> <li>・通級による指導と連動した通常の学級における取組</li> </ul>	大阪大谷大学 教授 小田浩伸氏
2	6月	心理	「アセスメントとコンサルテーション」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援のためのアセスメントのポイント</li> <li>・学校現場における観察のポイント</li> <li>・発達障がい特性の理解</li> <li>・グループワーク（事例検討、見立ての交流）</li> <li>・保護者との協働</li> </ul>	平安女学院大学 教授 清水里美氏
3	8月	療育	「特性に基づく自立をめざした支援」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障がい児の療育事業所について</li> <li>・「個別支援計画」について</li> <li>・保護者支援のポイント</li> <li>・具体的な指導事例</li> <li>・評価からの目標設定について</li> <li>・ライフステージに沿った支援と指導のポイント</li> </ul>	自閉症療育センター Link センター長 谷岡とし子氏
4	10月	医療	「特性に応じた指導について ー作業療法士の視点からー」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障がいを理解する（ASD、ADHD、SLD）</li> <li>・基本的な支援方法 確立操作、褒める、視覚支援、指示の明確化、 感覚過敏への対応、生活スキルを教える技術、 ストレスコーピング（余暇スキルの指導）</li> </ul>	関西福祉科学大学 教授 倉澤茂樹氏
5	11月	福祉 ・ 心理	「生徒理解・コンサルテーション 発達障がいの 理解と支援」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・府内の発達障がい者支援センターについて</li> <li>・発達障がいの理解のために</li> <li>・特性を背景にした思春期の課題について</li> <li>・実際の相談事例</li> <li>・将来に向けた支援のポイントについて</li> </ul> 「高校の通級指導 自分への必要性理解に向けて」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・障がいの特性に応じた指導</li> <li>・生徒自身の「主体性」育成</li> <li>・通級による指導の小中学校に高校の相違</li> <li>・就労、大学進学後の合理的配慮を見据えた支援</li> <li>・自己理解の不足が招いた困難事例</li> </ul>	大阪府発達障がい者 支援センター アクトおおさか 副センター長 柳屋美香氏  府立学校スクール カウンセリング・ スーパーバイザー 西井恵子氏

6	2月	教育	「切れ目ない一貫した支援に向けて」 ・事例検討 （生徒の実態把握から具体的な支援内容の決定、評価） ・「個別の指導計画」のPDCAサイクルについて	梅花女子大学 教授 閑喜美史氏
---	----	----	--	--------------------

参加者の感想を通級による指導の経験年数で比較すると、1年目の教員は、アセスメントや指導方法に関する記載が中心であった。対象となる生徒がどのような生徒なのか、どのように指導していけばよいのかということを模索していることがうかがえる。2年目から4年目の教員は、例えば、「講義の中の特定の事例について、もっと深めて学びたい。」等、これまでの自身の指導経験をとおして、学びたいことが徐々に明確になっていることがわかる。環境の調整や、通常の学級の担任との連携などの「横の連携」、卒業後を見据えた「縦の連携」等について課題意識を持っている担当者も見られた。5年目以上の教員の感想からは、通級による指導の位置づけや、通常の学級における取組の重要性を強く感じていることがわかった。通級による指導の実践を積み重ねてきたことで、校内支援体制の在り方等、学校運営に関することが多い傾向にあった。

また、経験年数に関わらず、「専門性を高めたい」という意見が非常に多く、担当教員の「学びたい」という意欲が非常に強いことがわかった。

#### 1－4. 通級による指導担当教員に必要な指導方法を身に付けさせるために教育委員会として行った取組

##### ○府立高等学校通級指導運営委員会の設置

大阪府立高等学校に設置する通級指導教室の運営のための指導助言機関として、大阪府教育庁内に府立高等学校通級指導運営委員会を設置している。(表5)

委員会では、通級指導教室設置校の取組状況を把握するとともに、通級による指導対象生徒の指導内容や評価に関する指導助言等を行っている。

表5 府立高等学校通級指導運営委員会の構成

有識者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学識経験者（教育・医療）</li> <li>・臨床心理士</li> </ul>
通級指導教室設置校担当者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・府立柴島高等学校 通級による指導担当</li> <li>・府立大手前高等学校 通級による指導担当</li> <li>・府立松原高等学校 通級による指導担当</li> <li>・府立岬高等学校 通級による指導担当</li> </ul>
大阪府教育庁	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育振興室高等学校課 首席指導主事</li> <li>・教育振興室支援教育課 首席指導主事</li> <li>・教育センターカリキュラム開発部支援教育推進室 指導主事</li> </ul>

#### 1－5. 今後の研修体制

##### ○教職員の専門性向上に向けた取組み

高等学校において通級指導教室の設置を拡充していくためには、通級による指導担当教員の育成が急務であり、大阪府教育センターと密接に連携しながら、教職員の専門性向上のための研修等の充実を図っていく。また、通級による指導を実施していない高等学校においても、「自立活動の指導」の観点を踏まえた取組を行うことで、各校における生活指導や教科指導のさらなる充実につながっていくことを研修やフォーラム等を通じて発信し、教職員の支援教育に係る専門性のさらなる向上につなげる。

また、各種研修受講者から「他校の取組についての交流」の希望が多く挙げられたことをふまえ、各校で使用している教材・教具、個別の指導計画等に関する情報交換や、事例検討の機会を研修に取り入れ、研修受講者の知識と技能の向上とともに学校間の連携強化を図りたい。

## 2. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例①】

○通級による指導の経験年数：1年

○教員の経験年数：4年

○事業開始前までに受けた研修内容：特になし

### ○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

発達障がいに関する書籍を複数読んでおり、ある程度の知識はあった。一方、発達障がいのある生徒への具体的な支援方法の蓄積が不足していたため、他の通級による指導担当者がどのような指導内容や指導方法を実践しているかについて、過去の様々な実践事例が知りたかった。

### ○事業実施中に受けた研修内容

心理、医療の有識者や、発達障がいのある当事者が講師を務める研修に参加し、発達障がいに関する基本的な知見を深めるとともに、基礎的環境整備と合理的配慮の関係や、通級による指導を進める上で必要な学校組織体制の在り方、対象生徒のアセスメント実施のポイント、適切な指導・支援につなげるためのコンサルテーション、高校卒業後の円滑な社会生活に向けて学校段階で必要な指導・支援内容等について学んだ。

### ○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

医療の専門家による、通級による指導の対象生徒に対するアセスメントとコンサルテーションを通じた実践的な研修は、生徒の実態をつかみ、具体的にどのような指導・支援をしていけばよいかの見通しを立てるためにかなり役立った。

中でも CO-OP\*という支援方法は、生徒本人に自分の困りやその改善方法を主体的に考える姿勢が育ち、未知の出来事に対しても立ち向かう自信や、失敗に対する回復力に繋がることを教員が実感でき、通級による指導方法、指導内容を組み立てる上での大いなる助けとなった。

\*CO-OP (Cognitive Orientation to daily Occupational Performance)

本人の感じている困難や目標に対し、本人が対処方法を考え、対処する技能を身に付けるための介入方法。支援者は解決方法ではなく、考えるための材料を提供する。

### ○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

当初、通級による指導とは、教員が生徒の困りの内容を明らかにし、対処法を提案して身につけさせるものだという捉えをしていた。しかし、生徒が、自分が今何に困っているのかを主体的に考え、教員は生徒と面談を重ねながら一緒に探り、その対処法と一緒に考えて計画し実施するという、生徒が試行錯誤を重ねながら自分に合った方法を見出していく方が、結果的に生徒の成長につながるという考えに行きついた。

「教員側が先回りして生徒の環境を整える」のではなく、「生徒の主体性を大切にしながら、教員が生徒と寄り添ってともに考え、模索していく」方が、対象生徒が通級指導教室の利用を終了した後、通常の学級や卒業後の社会生活において通級指導教室で学んだ内容をいかして円滑に過ごすために、役立つ経験となるであろう。

## 2-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

### 2-1-1. 実態把握

実態把握は、観点を明確にし（表6）、入学時から始め、通級による指導の開始後も必要に応じて実施した（図2）。

表6 実態把握の観点と把握方法

観点	把握方法
障がいの特性、対人関係、学習面、実行機能、運動面、感情のコントロール 等	行動観察 発達検査等の結果 医師の診断内容 学識等、専門家の意見
感覚の過敏、自己に対する評価、克服したいこと、なりたい自分像、生かしたい良さ、卒業後の進路希望 等	生徒からの聞き取り 保護者からの聞き取り

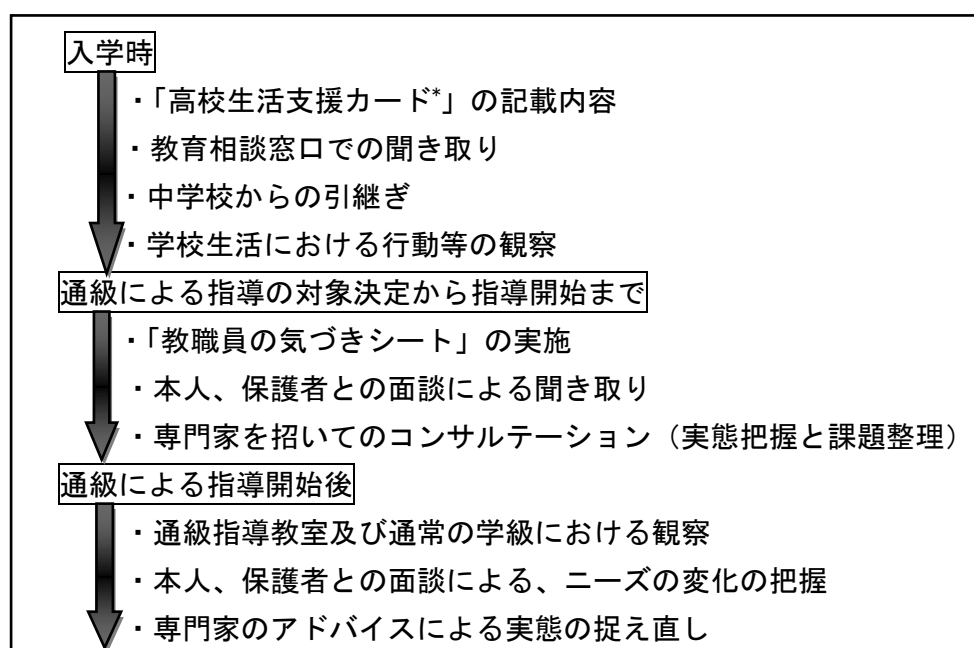


図2 実態把握の流れ

#### \* 「高校生活支援カード」

高等学校が生徒の状況や保護者のニーズを把握し、生徒、保護者、中学校の想いを受け止め、高等学校卒業後の社会的自立にむけて学校生活が送れるよう適切な指導・支援の充実につなげるために、すべての大阪府立高等学校で実施している。

【参考】<http://www.pref.osaka.lg.jp/kotogakko/seishi/seikatusiken.html>

### 2-1-2. 指導目標の設定

指導の流れを図3のように整理し、実態把握の中で捉えた本人の困りや課題の大きさから重点項目を考え、指導目標を立てた。さらに有識者の助言を含めたコンサルテーションにより、中心的な指導項目を導き出し、自立活動の6区分27項目に照らし合わせて関連付け、具体的な指導内容を決定した。

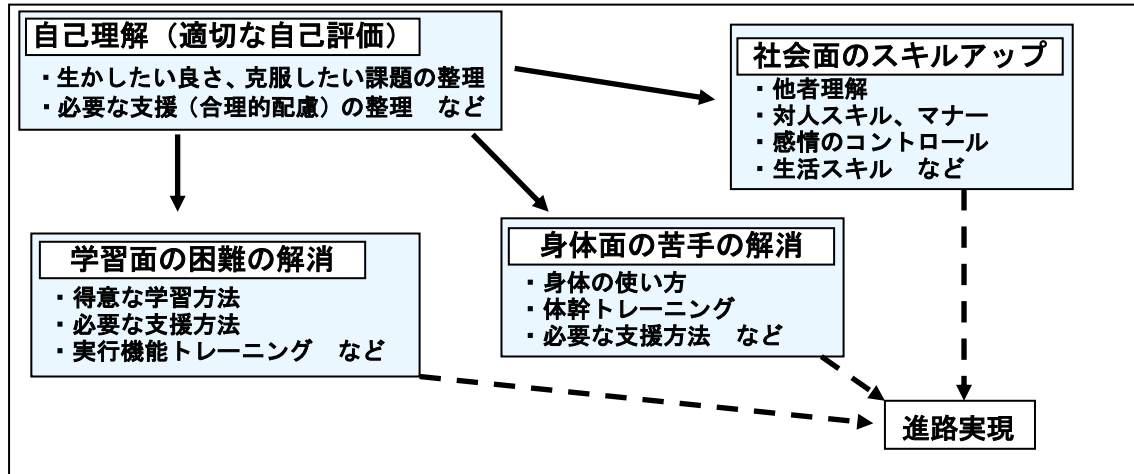


図3 指導の流れ

### 2-1-3. 適切な評価

他の教科・科目の評価時期と同様とし、半期ごとに設定した目標の到達度や目標に向かう取り組みの姿勢を評価する。評価後、生徒の状況等により通級による指導の継続が必要であれば、これまでの指導内容を踏まえながら、さらにステップアップをめざす目標を設定し、指導内容を決定する。

通級による指導を終了する場合は、教育相談等による継続した支援を行う。また、対象生徒が卒業する場合は、進路先との連携を図り、スムーズに卒業後の生活に移行できるよう支援する。

### 2-2. 通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

個別の教育支援計画は、中学校からの引継ぎがある生徒や、高校入学後に個別支援が必要となった生徒について、通常の学級の担任が作成し、通級による指導の個別の指導計画は、作成された個別の教育支援計画をふまえて、通級による指導の担当教員が作成して通常の学級の担任と共有する。また、有識者によるコンサルテーションを、実態把握や目標設定及び指導内容の決定の一助としているが、通常の学級の担任も参加し、理解と情報の共有を図っている。

通級による指導の内容は、記録や口頭で、通常の学級の担任や教科担当教員に伝えると共に、通常の学級における対象生徒の様子や困りの状況を観察・報告してもらい、通級による指導に反映している。また、通級による指導の内容を通常の学級で実践させたいときは、通常の学級の担任や教科担当教員と指導のねらいや観点を共有し、協力を仰ぐ。

通級による指導の担当教員は、各学年に配置しているため、学校生活全般にかかわる支援や配慮の必要性が生じた場合は、学年会議で生徒の状況や適切な支援方法について詳しく伝えることができる。

## 指導例①

○対象生徒：高等学校３年生（ＡＳＤ）

### １．発達障がいによる学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

#### <実態把握>

小、中学校で個別の支援を受けていた生徒であったので、入学前に中学校からの詳細な引継ぎに加え、本人・保護者との面談により把握した内容をもとに、個別の教育支援計画を作成した。また、通級指導教室の利用開始を契機に発達検査を行い、指導目標や指導内容決定の一助とした。通級による指導は２年の後期から開始した。

#### <指導目標・指導項目の設定及び指導内容と生徒の変容>

社会面でのスキルについての困りが明確に現れており、中学校ではその面での個別支援を受けていたので、支援内容を引き継いだ上で徐々にステップアップすることを中心に目標を設定した。また卒業後の進路をみすえ、高校生活で表出した新たな困りは半期ごとの評価の際に目標に反映させた。

指導目標は、半期で３つ設定し、自己理解を深めてから、社会面のスキルアップ、学習面の困難の解消、そして進路実現につながるよう指導内容を配した。対象生徒は、わずかな状況の変化でも、これまでの経験を応用して対応することが難しいという傾向があったので、できるだけ多くの具体的な状況を設定してロールプレイングを行った。さらに、通常の学級の担任等の協力を得て、通級による指導で学んだ行動パターンを「宿題」として通常の学級で実践し、その後の通級による指導で「宿題確認プリント」（図４）を活用しながら本人と評価するということを繰り返し行った。

この結果、通級による指導前は、何か困ったことがあるとまず教員に助けを求めることが多かったのが、指導を受けた後は、教員以外のクラスメイトを頼る様子が頻繁に見られるようになった。

今回の宿題行動		月	日
行動の種類			
誰に			
内容詳細 (状況や時間など)			

今回の宿題行動		月	日
行動の種類			
誰に			
内容詳細 (状況や時間など)			

今回の宿題行動		月	日
行動の種類			
誰に			
内容詳細 (状況や時間など)			

図４ 宿題確認プリント

## 2. 発達障がいの状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法

当該生徒は日常会話においても、自分の興味関心のある部分から突然話し始めて周囲の者が戸惑うということがしばしばあり、事柄をうまく関連付けながら相手に伝わりやすく話すということを苦手としていた。また、自分で「長い文章は書けない」という思いを強く持っていた。なお、検査結果では「言語理解」「概念化」に弱さが見られた。

本校では3年次に「卒業研究」（総合的な学習の時間）を設定しており、4,000～5,000字の論文を書くこととなる。そこで、「卒業研究」の内容を取り扱いながら、自らの考えを長文で表すことができるようになるために、パターンにあてはめながら書くことをめざした指導を行った（図5）。短期目標は、「伝わりやすい説明のポイントを意識した話し方ができるようになり、長文を書く時にも説明のポイントを生かすことができる」とした。

通級による指導前は、長文を書くにあたって、どこからどうやって取りかかればいいのか見通しを立てることができず不安を抱えていたが、説明のポイントを意識することや、情報をカテゴリーに分類しながら整理する練習を繰り返すことにより、文章を組み立てるポイントをつかみ、5,000字以上の卒業論文を書き上げることができた。

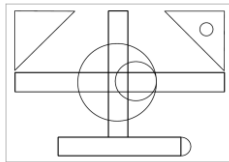
また、「難しそうだったけど、カテゴリーでやったらできた」「早く字数が増えるようになった」など、工夫すればできるという自信につながる発言が見られるとともに、卒業論文完成以降も文字数の多い文章を書く際、伝わりやすい説明のポイントやカテゴリーで分類することを意識して文章構成を工夫しようとする姿勢が見られるようになった。

## 【指導内容の流れ】

- ①「説明の仕方、伝わりやすさに違いがあることを感じる」
- ②「伝わりやすい説明のポイントを学ぶ」「カテゴリーに分類する」
- ③「卒業研究論文の作成に取り組む」

## 【使用した教材】

### ①「説明の仕方、伝わりやすさに違いがあることを感じる」



図形が組み合わさった図柄を言葉だけで相手に伝達する。  
1回目は細部の説明から、2回目は全体像の説明から行い、どちらの説明がよりわかりやすかったかを考える。

どちらの説明がわかりやすい？

- A かわいい犬と猫の絵がついていて、・・・  
B 長方形の赤いお弁当箱に、犬と猫の絵がついて・・・

### ②「伝わりやすい説明のポイントを学ぶ」

年 月 日

人にわかりやすく説明しよう

目的：相手にわかりやすい説明のしかたを考える  
⇒卒業研究の発表にも役立つ！

本日の課題：◎「わかりやすい説明のテンプレート」を使い、説明手順を考える  
◎カードゲームのルールを説明し、ゲームを行う  
◎振り返り

#### わかりやすい説明のテンプレート

1. これから話す内容の結論・タイトルを伝える  
・・・図「〇〇について説明します」「〇〇の件ですが」
2. 目的、ゴールを伝える  
・・・図「これは〇〇を目的としたものです」「これは〇〇を目指すんです」
3. 要点を3つ程度にまとめて伝える  
・・・図「まず最初に～、次に～、(まだあれば「次に～」、最後に～」
4. 要点の内容を説明する(3.で要点を挙げたときに説明してもよい)
5. 【必要があれば再度ゴールを伝え、説明を終える  
・・・図「これは〇〇を目指すものです、よろしくお願いします」  
「では始めましょう」

全体像を先に伝え、徐々に細部を伝えていくという「ピラミッド形説明」が伝わりやすい

全体→細部



※カードゲームの説明手順を「ピラミッド形説明」で考えよう※

振り返り	
1	タイトル
2	目的・ゴール
3・4	要点・内容
5	終える・始める

「わかりやすい説明のテンプレート」を元に、カードゲームの説明原稿を書く。説明時にはできるだけ原稿を見ないで、説明の流れを思い出しながら話す。

### 「カテゴリーに分類する」

情報シート  
この街には、花屋、八百屋、魚屋、病院、美容院がある。  
●●さんの隣に住んで  
△△さんの趣味はテニスで、××さんと呼ばれていて  
〇〇さんの右隣に住んでいる人は、映画鑑賞が趣味である。

断片的な情報が書かれた「情報シート」の情報を組み合わせて、「課題シート」に書かれた課題を解決する。  
情報整理のために、白紙の用紙、あるいは、縦横を情報の数に合わせた表を渡す。白紙より表のほうが見通しは立てやすい。

#### 課題シート

1. △△さんの仕事は何か
2. 〇〇さんの趣味は何か
3. ▼▼さんの向いの人は誰か

図5 指導の流れ

### 3. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例②】

○通級による指導の経験年数：1年

○教員の経験年数：17年

○事業開始前までに受けた研修内容：特になし。

○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

通級による指導を担当するうえで必要なアセスメント力、具体的な指導方法などを身につけたかった。

○事業実施中に受けた研修内容

大阪府教育センターにおける通級による指導担当教員研修、高等学校における支援教育コーディネーター研修・本事業における通級指導担当教員等専門講座・国立特別支援教育総合研究所における研修において、アセスメント、障がいの特性に応じた指導、生徒理解、切れ目ない一貫した支援、校内連携、組織づくり等について学んだ。

○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

発達障がいに関する基礎知識、アセスメントのポイント、また障がいの特性に応じた指導法についての研修は、実際に生徒を指導する上で大いに役立った。また、研修における各校の取組報告や情報・意見交換は、校内の組織づくりを検討する際に大変参考になった。通級による指導に関する専門性の深化については、有識者アドバイザーとの連携が最も役に立ち、有識者アドバイザーによる生徒のアセスメントやコンサルテーションの場に同席しその手法を学ぶとともに、アセスメントのフィードバックや指導助言を頂くことが、担当教員にとって最大の学びとなった。

○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

発達障がいの特性について理解を深めることで、生徒の認知スタイルや特性に寄り添った指導法を企画し、実践できるようになった。

通常の学級の担任や教科担当教員と共通理解を図る際に、生徒の障がいの特性や強みを客観的・論理的に伝えることができ、有効と思われる指導方法を積極的に提案できるようになった。

#### 3-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

##### 3-1-1. 実態把握

4月に通級による指導について教職員に周知の上、5月には「教職員の気づきシート」を全教職員に配付し、6月に回収の後、教育相談委員会にて集約した。その情報をもとに各学年と連携して通常の学級における生徒の強みや課題、生活・学習上の困難さについて実態把握した上で、7月に通級による指導の対象生徒を教育相談委員会

にて検討、決定した。

対象生徒決定後、通級による指導担当教員が生徒・保護者との面談を行い、入級希望のあった生徒のニーズ等を把握するとともに、在籍学級担任、教科担当教員、養護教諭等からの情報を集約し、これらの情報を基に「行動観察等によるアセスメントシート」を活用し、生徒の実態を自立活動の6区分に整理した。

### 3-1-2. 指導目標の設定

対象生徒と丁寧な面談を重ね、生徒本人が感じている困難さ、また希望する将来像を共有した上で、3-1-1の実態把握と照らし合わせながら、優先すべき課題を絞り込み、長期目標・短期目標を立てた。特に短期目標については、生徒本人の課題意識のうち、より高いものを日常生活に即した形で目標立てすることに留意した。自立活動の内容の区分、項目については特別支援学校学習指導要領を参考にした。

目標達成のための指導内容については、生活リズム、スケジュール管理、対人スキルなど具体的なテーマから、生徒自らがまず取り組みたい内容を選び、それに基づいて指導方法を生徒とともに検討した。

目標設定や指導内容を検討に当たっては、教員主導ではなく生徒が主体的に関わり、決定していくことを最も重要視した。

### 3-1-3. 適切な評価

学期途中で一度、通級による指導で取り組んで来た内容（テーマ）について、達成度・満足度という観点で生徒自身が評価し、目標の更新や見直しを行った。さらに学年末に生徒が通級による指導の中でまとめたレポートも評価の対象とした。その際には、生徒の自己理解の深化と困難を改善・克服するための具体的な対処行動・工夫の達成度に重きを置くことに留意した。それら生徒自身の評価や通級による指導の取組状況に加え、通常の学級における対象生徒の登校状況、学習状況、行事等の参加状況などの変容を合わせ、総合的に判断し評価した。

### 3-2. 通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

対象生徒の実態把握から通常の学級の担任、教科担当教員等が関わり、個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成を行った。普段の指導内容や指導状況については、生徒の記録ファイルの回覧や口頭による状況報告で随時情報共有し、通級による指導での学びが通常の学級でどのように活かされているかを日常的に確認することに努めた。また、全教職員向けに通信を発行し、通級による指導での取組内容や教材、生徒の変容について共有を図った。通級による指導を利用していない生徒についても、発達の課題等の可能性がある生徒については、必要に応じて面談や指導を行い、今後の指導の方向性について学年教員へ提案なども行った。今後は校内体制をより整え、全教員が特別支援教育の視点を共有し、通常の学級における指導に活用していくことを目指したい。

## 指導例②

○対象生徒：高等学校3年生（ASD）

### 1. 発達障がいによる学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

#### ＜目標設定＞

小学2年生時に広汎性発達障がいの診断を受けており、入学当初より個別の教育支援計画を立てていた生徒である。対象生徒を2年半担任している教員を中心に実態把握を行い、「行動観察等によるアセスメントシート」に沿って項目を整理した。

対象生徒・保護者との面談において課題意識や通級による指導を受ける目的意識を聞き取る中で、教員と生徒の意識に大きな差がないことがわかり、本人の困りや目標を最大限尊重する形で目標設定を進めることとした。

#### ＜指導方法＞

通級による指導の内容を「わたし研究」とし、対象生徒が主任研究員となり、生活上の困難を「研究テーマ」と捉え、自分の得意不得意や行動・認知傾向などの「自分データ」を集めながら、困難への対処法や工夫を「実験」し、その結果を「考察」する形で自己理解を深めた（図6）。「研究テーマ」は生徒が主体的に選び、それに合わせて教材を準備した。使用する教材については、市販のソーシャルスキルトレーニングワークシート等を参考に担当教員が作成した。

声の大きさを調節する、という研究テーマを選んだ際には、対象生徒の通級による指導の様子を動画撮影し、その動画を教材として使用した。このようなセルフモニタリングは生徒が他者視点に立つことに役立ち、「客観的に見てみると、不自然な動作をしていたり、変な声を出していたりすることがわかった。実際に自分の声を聞いて研究するのは初めてだったので、より自分の特徴や個性がわかった」など、たくさんの気づきを得た。その気づきが次の研究テーマにもつながった。

「わたし研究」は対象生徒による

**"IDEA"** You are Individual. Develop yourself. Educate yourself. Appreciate yourself.  
 「あなたはあなたらしく、素敵な個性を持ったひとりの人として、学び、成長し、そんなあなたをじっくり味わって生きていこう」

★用意するもの：「IDEA」用ファイル A4サイズ（2つ穴あき） →毎回持参  
 ★授業の流れ：1コマ <50分>

1. 導入（『今日のわたしの記録』記入・前回の振り返りなど） <5分>
2. 今日のテーマ <40分> ★途中休憩含む
3. 振り返り（『今日のわたしの記録』記入→ファイリング） <5分>
4. ファイル提出  
 →IDEA担当教員 チェック  
 →担任の先生 チェック  
 →担任の先生よりファイル返却（次回忘れずに持参してください）

ここでの大きなテーマは「わたし研究」。ここは「IDEA研究所」です。  
 <IDEA研究所 組織紹介>

研究室  
 ・主任研究員（ ）

- ①研究テーマを決める（何に困っている？もっと理解したいことは？）
- ②研究方法を決める（動画撮影して自分の姿を客観的に見てみる・周りの人にインタビューしてみる など）
- ③データを集める（自分の得意、不得意、快、不快、ありがちなパターンなどなど）
- ④実験・シミュレーションを行う（考えた対処法などを試してみる・ロールプレイなども）
- ⑤結果を検証、考察する（やってみてどうだったか、良かった点は？改善点は？）
- ⑥新しいIDEA、メソッドを提案、発表する（同じことで困っている人に新しいIDEAを提案できるかも！）

・研究アシスタント（＝IDEA担当教員・担任・教科担当者・友だち・家族 などなど）

- ①先行研究を調べる（先生の工夫を紹介、「こんな研究結果があるよ」など）
- ②資料を用意する（①の資料を準備）
- ③実験の準備、補助、観察、記録を行う（記録用紙を準備したり、実験を見守ったり、気づきを記録したり・・・）
- ④時々、気づいたことを伝える（アシスタントとしてのフィードバックを研究員に）

・研究マネージャー（＝IDEA担当教員）

- ①主任研究員へ研究依頼（研究員に研究してほしいテーマがあれば依頼）
- ②共同研究・研究発表の調整（グループワーク＝共同研究・研究室交流 と呼ぶ）

・所長（＝校長先生）

- ①研究所の環境整備、改善
- ②他研究所との連携（他校の通級との連携を図る）

図6 通級による指導 導入プリント

テーマ	内容	【達成率】				【達成率】			
		全くできていない	まあまあできていない	バッチリ！	もっとやりみたい！	まあまあできてる	バッチリ！	もっとやりみたい！	達成率
自己観察	声の大きさ	0			10	0			10
	理由:								
感情・心算	感情と対応法	0			10	0			10
	理由:								
対人スキル	相手の様子・気持ちへの入り方	0			10	0			10
	理由:								
ライフスキル	忘れ物対策	0			10	0			10
	理由:								

3. 考察：これまでの研究を振り返って、気づいたこと・嬉しかったこと・考えたことなど

図7【中間発表資料】

各テーマについて達成度・満足度を可視化

中間発表（図 7）、最終発表の場を設け、在籍学級担任や教科担当教員も参加することにより、取組経過や達成状況等を共有した。また、共同研究としてグループワークにも取り組み、令和元年度は 3 名の研究員（対象生徒）の共同研究のテーマとして、調理実習を含むクリスマスパーティーを計画、実行し、他者とのコミュニケーション等を学ぶ場とした。

### ＜生徒の変容＞

生活上の困難な場面に直面した際、以前はパニックになりがちだったが、「わたし研究」を進める中で、まず「どうしたらよいだろう」と自問し、落ち着いて考えようとする姿が増えた。また、セルフモニタリングした経験が他者視点に立つきっかけとなり、通常の学級においても衝動的な言動が減った。

通級による指導の中で一緒に考えた対処法を「実験」として積極的に試しており、その結果が成功体験につながることも多く、自信につながった。通級による指導の授業を通して、「自分がどう見られているかを意識できるようになってきたと思う。これまで色々なことを研究してきたけれど、心が落ち着いていれば大抵のことができることがわかった」との振り返りを行っている。

## 2. 発達障がいの状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法

令和元年度は通級による指導において、教科の内容を取り扱うことはなかった。

#### 4. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例③】

○通級による指導の経験年数：2年

○教員の経験年数：10年

○事業開始前までに受けた研修内容：特になし

○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

障がい児の美術製作にボランティアとして関わってきており、子供の個々の状況に応じた指導・支援の実践経験がある。自立活動の指導にあたって、アセスメント力の向上と評価方法に関心があった。

○事業実施中に受けた研修内容

医療や心理学等の有識者による、発達障がいのある生徒の個々の特性に応じた支援・指導の方法について。

○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

作業療法や認知行動療法からのアプローチや、応用行動分析の発想を身につけたことで、生徒が主体的に取組を進めるための支援、指導を行うことができるようになった。

○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

これまで、感覚で指導にあたってきた部分について、適切な実態把握によるアセスメントに基づき指導目標を設定し、また、指導と評価の一体化を意識できるようになった。

#### 4-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

##### 4-1-1. 実態把握

実態把握にあたっては、入学時に生徒本人、保護者が記載する「高校生活支援カード」の内容に加え、中学校からの引継ぎの情報も参考に、通級による指導の対象となりそうな生徒について、通常の学級の担任や教科担当教員等が週1回の学年会を節目にモニタリングを行う。その後、通常の学級の担任と通級による指導チーム（管理職や支援教育コーディネーター、通級による指導担当教員が参画）で（高校1年であれば、10月～11月にかけて）ケース検討を行う。ケース検討では、「教職員の気づきシート」や「行動観察等によるアセスメントシート」を活用し、自立活動の6区分と関連づけた指導の対象として適切か検討する。

指導目標の設定にあたって最も重要視しているのは、「本人および保護者のニーズ」である。特に「高校生活支援カード」は本人の言葉でこれまでの経験や希望が語られている記録であるとの認識のもと活用している。

#### **4－1－2．指導目標の設定**

実態把握により指導すべき課題を整理し、本人のニーズや進路等の希望の達成のために高校生段階で学べるスキルや態度に優先順位をつけた上で、本人、保護者による目標の確認を行う。

また、設定した自立活動の各項目で学んだことが通常の学級等で発揮される場面が高校３年間のどの時期にあるか整理し、具体的な指導内容の検討を行った。

#### **4－1－3．適切な評価**

１か月ごとに開催するアセスメント会議で通級による指導の進捗を確認し、目標とする行動の回数や内容で達成度を測る。その際、必要に応じて目標とする標的行動と、内容の見直しを行う。また、半年に１度を目安に、短期目標の見直しを行う。

#### **4－2．通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携**

通級指導教室の利用決定のためのケース検討に通常の学級の担任が参加している。入級検討前に個別の教育支援計画を作成している場合は、その長期目標を通級による指導の個別の指導計画とリンクさせている。

日常的な行動観察等による生徒の実態把握は、週１回の学年会で通常の学級の担任や教科担当教員と情報共有している。また、年４回開催する成績会議の場でも、通級による指導の進捗について全体化している。

さらに、通級による指導の場面に通常の学級の担任をゲストとして迎えたり、必要に応じて授業の様子を撮影した内容を学年会等で共有したりしている。

### 指導例③

○対象生徒：高等学校３年生（ＬＤ，ＡＤＨＤ，ＡＳＤなど）

#### １．発達障がいによる学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法

入学時より、障がいによる特性について本人、保護者から申し出があった生徒である。以降、中学校からの引継ぎの情報も参考にしながら、通常の学級の担任が中心になってモニタリングし、学年担当教員の会議で週１回の共有を継続して行った。高校１年の２月に、通常の学級の担任と通級による指導チームでケース検討を行い、「教職員の気づきシート」や「行動観察等によるアセスメントシート」を活用し、課題を整理した。なお、「教員の気づきシート」について生徒本人にも記入してもらったところ、教員のものとほぼ内容が一致した。

指導目標や項目の設定に当たっては、具体的に生徒本人に学習上や生活上で感じている困りを複数挙げてもらい、学校生活上で自己理解を深めたり困ったときの対処方法の練習をしたりできる内容を優先し、１年間の学習の流れを、通常の学級におけるＨＲ活動を軸に整理し、「生徒がどの時期のどの場面でどうなっていたいか」から逆算して、目標や計画を策定した。

指導内容は、通級による指導チームの会議でアイデアを練り、生徒の主体的な取組となるよう検討した。生徒が、自分の願いを遂げるためにどんな支援が自分には有効か、具体的にどう行動したらいいかを主体的に考えることにより、「誰かを手伝うためにはよく観察することが大切」「実際に行動するには心がけだけでは難しいが、何か合図があればできる」など、生徒自身の気づきによるアイデアや対処法の選択肢が増えるなどの変容につながった。

#### ２．発達障がいの状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法

対象生徒は、他者に自分のことを積極的に伝えたいという気持ちを持っているが、自分の思いや考えを正確にアウトプットすることに困難を感じていた。特に書くことへの苦手意識が強かったが、卒業後は福祉分野での進学を志望しており、「書いて伝える」スキルを獲得したいという思いを強く持っていた。

そこで、読書感想文や論文を書くという教科の内容を取り扱った指導を行った。指導に当たっては、対象生徒が、話すことが好きなこと、聞いて理解することが得意であることを生かした取組を行った。まず、自分の伝えたい内容をいきなり文章に起こすのではなく、「話す」「キーワードをメモする」などのステップを設けた。次に、音声入力アプリを使用して文章を入力し、入力した文章は読み上げて自分が伝えたい内容になっているかを確認するようにした。この指導により、400字程度の読書感想文や3000字程度の論文課題を完成させることができるようになった。何よりも生徒自身が「苦手なことも工夫すればできる。自分の得意を生かした工夫ができる」ことを生徒が実感したことで、その他の困りについてもアプリケーション等を活用するなどの工夫をするようになった。

## 5. 拠点校における通級による指導担当教員の取組【実践事例④】

○通級による指導の経験年数：1年

○教員の経験年数：13年

○事業開始前までに受けた研修内容：特になし

○事業実施前に身に付けていた専門性と身に付けたかった専門性

発達障がいの特性など基本的な知識や、アセスメント方法、障がいの特性に応じた指導方法、評価方法、知能検査等の検査結果の分析力を身につけたかった。

○事業実施中に受けた研修内容

有識者による、生徒の実態把握や見立ての方法、課題整理や目標の設定方法に関する内容、放課後等デイサービスの児童発達支援管理責任者による運動療法に関する研修に参加した。

○教員にとって役立った研修・指導・助言の内容

有識者による生徒のアセスメントや通級による指導への継続的な助言は、指導の目標設定、指導方法や評価基準などについて中間検証と柔軟な見直しを促すことになり、教員の指導力や専門性の向上につながった。

また、運動療法を主として実施している放課後等デイサービスと提携した、児童発達支援管理責任者からの研修は、通級による対象生徒の身体運動における特性のとらえ方や、姿勢の安定化を図るための体幹強化、四肢の動作向上を目的とした指導方法や評価方法について、指示の出し方、休憩をとるタイミング等も含め、具体的に学ぶことができ、実践を進める上で、非常に役立った。

これらに加え、特別支援教育総合研究所で実施された「高等学校における通級による指導に関わる指導者研究協議会」による、各都道府県の取組の成果と課題の共有や、高等学校における通級による指導の軸について協議する機会を得ることで、高校卒業後の社会生活に求められる力を習得させるためのキャリア教育にライフスキルの向上をめざす内容が理想であるという方向性を確認できたことは大きかった。

さらに、府立高等学校に設置する通級指導教室の運営のための指導助言機関として府教育庁内に設けられた「大阪府立高等学校通級指導運営委員会」や本事業の「通級指導専門性充実検討会議」は、府内の通級指導教室間の情報共有や、有識者等の意見を求めることができる場となり、非常に参考となった。

○事業前後における教員の指導方法の変容や効果

学校生活等における生徒の困りや問題行動にのみとらわれるのではなく様々な観点で行動観察を行うこと、特に運動時の動作観察を加えることで、生徒の状況をより正確に把握することができるようになった。また、「できないこと」だけに注

目して改善をめざすのではなく、生徒が持つストロングポイントを伸ばす指導を行うことによって、ウィークポイントの改善に寄与することを実際の生徒の変容から実感できたことで、「生徒の良さ」に注目した実態把握や指導を実施できるようになった。

また、通級による指導における個々の生徒の変容や成長に視点を置いた評価の観点は、通級による指導以外の一般教科の評価にも同様の視点を取り入れる必要があると感じた。

## 5-1. 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方

### 5-1-1. 実態把握

#### <行動観察>

入学当初は生徒にとって、中学校等と学びの場が異なる初めての場面であり、この時の行動観察は非常に重要である。主に座学を中心とする授業では、他者との関わり方や座り方などの様子や、書字の特徴等を、体育や家庭科など実技を伴う授業では、体幹の強さや反応の速さ、模倣の正確さなどを観点とする。また、授業時間だけでなく、登下校や休憩時間、昼食時等の様子も観察する。これらは、通常の学級の担任、教科担当教員による「教員の気づきシート」や「行動観察等によるアセスメントシート」等を活用しながら把握する。

#### <情報収集>

大阪府立高校全校で「高校生活支援カード」を活用しているが、本校ではそこに自尊感情の傾向を把握するための設問を追加し、全ての入学生について分析を行っている。通級による指導を受ける生徒については、各学期末に自尊感情の傾向を把握し、その変容を指導内容や指導方法の検討に反映させている。

また、中学校からの引き継ぎは、「高校生活支援カード」での申請内容に加え、生徒の状況をより正確に把握するための、重要な機会となっている。

### 5-1-2. 指導目標の設定

上記の行動観察と情報収集による生徒の実態把握に、生徒や保護者との面談等による卒業後の進路希望等を聴取した上で、以下の手順で目標等を設定する。

- ①把握した生徒の実態をストロングポイントとウィークポイントに分別する。
- ②ウィークポイントを自立活動の6区分27項目に分け、その中で重点的に取り組む項目を選定する(項目数は限定しない)。また、必ず生徒、保護者の進路希望や希望就業職種なども加味して選定を行う。
- ③選定した項目に属する実態の関連性を整理し、優先する指導目標を決定する。
- ④指導目標を達成するために、優先的に取り組む項目を3～4項目に絞り込む。

指導内容は、複数の項目を関連付け、かつ生徒の関心・意欲を高めながら持続できるよう、体験的な活動を重点的に行うこと、個々の生徒のストロングポイントを活かす活動を計画に含めることに留意した。また、指導目標の達成に向けて、1年間の活動を、

学期を想定した概ね３つの段階で小目標をたててスモールステップとすることで、チェックやフィードバックを繰り返しながら活動を行うようにした。

### ５－１－３．適切な評価

通級による指導は、本校の支援教育推進の中心でもある「パスファインダー（通級による指導検討チーム。管理職や支援教育コーディネーター、通級による指導担当教員で組織。以下「パスファインダー」とする）」が中心となり、実施している。「パスファインダー」は週に１回会議を開催し、前週に行われた通級による指導の報告と検証を行い、進捗を確認するとともに、必要に応じて指導内容や小目標に修正を加えている。

評価は、「パスファインダー」のメンバーに通常の学級の担任を加え実施する。指導目標の達成状況に加え、生徒の取組状況や通常の学級での変容、定期的に測定していた自尊感情の傾向の変容を検証し、「自己評価・自己受容」、「自己主張・自己決定」と「関係の中での自己」の３つの観点の変容を評価に加えた。

### ５－２．通級による指導の担当教員と在籍学級担任及び教科担任との連携

#### ＜個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成＞

「パスファインダー」は本校の支援教育全体に関わっているため、個別の教育支援計画の作成に当たっては、通級による指導の対象生徒だけでなく、「高校生活支援カード」で学習面や生活面で特別な支援を希望すると回答した生徒や、高校入学後の観察等で必要があると判断された場合も含め、通常の学級の担任と連携する。

まず、通常の学級の担任が「高校生活支援カード」に記載されたデータと、本人・保護者との面談内容をもとに個別の教育支援計画の原案を作成し、「パスファインダー」が原案の内容が適切なものかチームによるアセスメント結果と照らし合わせて検証し、内容を確定する。

「パスファインダー」には、各学年に１名ずつ配置している支援教育コーディネーターが属しており、作成された個別の教育支援計画の内容は、各学年会議で全職員に周知している。

通級による指導を含む、各教科等の個別の指導計画の作成にあたっては、通常の学級の教科担任が授業内で確認できた課題等を把握し、目標設定を行う。

#### ＜在籍学級担任や教科担当者への支援＞

通常の学級の経営や教科指導等の教育実践における教員からの相談等は、「パスファインダー」の各学年支援教育コーディネーターが把握し、個別支援や学年会議等において課題解決に向けたアドバイスを行う。また、必要に応じて「パスファインダー」会議で検討した上で、速やかにアドバイスをしている。通常の学級の担任や教科担任による対応が困難なケースについては、「パスファインダー」のメンバーが直接、生徒・保護者対応にあたる場合もある。

#### ＜通級による指導における連携＞

通常の学級の担任及び教科担任等に対して、通級における指導の内容を通常の学級

において取り入れる方法や、集団に対する指導において見落とされがちな生徒の困難の状態や特性を、わかりやすく伝えるために、以下の工夫を行っている。

- ①通級による指導の対象生徒の実態把握、目標、指導内容、手だて等を共有フォルダ等で確認できる仕組みを作るとともに、いつどこでどのような指導を行っているかを記載した月間予定表を掲示し、特に通常の学級の担任や学年主任等が定期的に見学する場を設定。
- ②学年会議等の定期的な会議だけでなく、頻繁に学年職員室等において、通常の学級の担任に生徒の変化を報告。
- ③通常の学級の担任や教科担任などすべての教員に対象生徒の行動観察等を依頼することで、双方向で情報共有できる体制を構築。

この取組により、教科担任が通常の学級での授業において、通級による指導の対象生徒のストロングポイントを活かせる学習内容の工夫を行うようになってきた。通常の学級の担任や教科担任と「パスファインダー」が連携し、通常の学級の授業で生徒が活躍する場面を作ることで、生徒の自尊感情や自己肯定感の高まりにつながっている。

なお、情報を全ての教員で共有するにあたって、個人情報保護の観点から、例えばプリントアウトや複写は不可といったルールや、情報共有の対象範囲を明確に定めて徹底した。

○対象生徒：高等学校3年生（ADHD）

対象生徒は感情のコントロールが得意ではなく、不快や怒りの感情を暴言や暴力で表してしまうことがあるなど、本校に通級による指導が導入される前から自立活動（特に心理的な安定と人間関係の形成）に相当する指導を必要とする場面が多々あり、通常の学級の担任だけでなく、学年教員をはじめ学校全体で支援、配慮を行ってきた生徒である。中学校からの引き継ぎも十分行っており、入学後は多くの教員が行動観察等に関わっている。

3年生に進級し、卒業後の進路や社会参加等を考える時期ということもあり、2年生までに比べるとかかるストレスの種類も量も増えていった。それまでのストレスは忘れ物をした時、他者からからかわれた時、他者に負けた時等であったが、これに加えて保護者から進路を早く決定するよう言われたり、卒業後の自分の生活を考えることで不安になったりといったことからストレスを抱えることが増えていった。そこで、まずは「感情のコントロール」をテーマに、場面ごとの状況下での対処法を考えていくことにした(図8)。

- ①さまざまな感情について考える（感情の一般的な定義と自分の認識を比較）
- ②どういう状況のときにその感情が起こるのか考える
- ③自分にとって最もコントロールが難しい感情を考える（「怒り」と回答）
- ④自分が「怒り」を感じる内容や場面をあげ、「怒り」の度合いを順位付けする
- ⑤どの状況下になると感情を抑えられず暴力に結びつくのかを考える
- ⑥暴言や暴力でない対処法を、自分の特性やこれまでの成功例をもとに考える
- ⑦考えた対処法を実践する

感情	122の感覚	一般の立場
1番、100% 100%	自分いかに愛されて 相手も自分の思い通りに 相手が自分の思い通りに 相手が自分の思い通りに	相手に満足して貰うか 相手に満足して貰うか 相手に満足して貰うか
信頼	相手の友人関係を まじった時	心配するに、信じて 心配するに、信じて
恐れ	初手がなにかになる	言葉や態度で相手に 言葉や態度で相手に
好き	思っている初めに たら	相手の事を好きになる 相手の事を好きになる
走し	人が死んだら	相手の死んだら、死んだら 相手の死んだら、死んだら
嫉妬	限りなく相手の事が 嫌になら	憎しみ、それ感じ、嫉妬 憎しみ、それ感じ、嫉妬
怒り	相手が好きでない事を に時、思いつく、相手が に時、思いつく、相手が	相手に好まれない、相手に 相手に好まれない、相手に
期待	相手に「早く」 信じてるものごと、	相手に「早く」 相手に「早く」

日付: 6月25日 場所: 3の5教室前  
 ・おしゃべりしてその教室(き)へ  
 何があったのか: 工日によりおしゃべりおしゃべり  
 その時の気分: うれしかった  
 怒りの度合い: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

10月17日 通達し、関係者へ 既済した内容に関して

[illegible]

図8 「感情のコントロール」

指導前はストレスがかかると即座に物にあたったり、他者への暴言や暴力に結びついたりすることがあり、その行動の原因を教員から尋ねられても説明することができなかった。しかし、通級による指導で学んだ実践を繰り返すことで、イライラするとその場から離れ、気持ちを落ち着けるなどの対処をすることができるようになった。また、教員に対して何が原因でイライラするのか等を具体的に説明したり、その対処法について自ら考えたりすることができるようになってきている。

## 2. 発達障がいの状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法

本校の通級による指導は体験的な活動を重点的に行っており、自立活動の内容の区分「心理的な安定」や「身体の動き」の項目に即した指導目標に対する指導内容の設定として、体育等の内容を取り扱い、姿勢の安定化を図るための体幹強化、四肢の動作向上を図る等の指導を行った。特に、通級による指導を含む学校におけるすべての取組が、生徒の自尊感情と大きくかかわるとの認識のもと、本校の特色である豊かな自然環境に恵まれた立地条件を生かし、SUP（スタンドアップパドルボード）等、これまでに生徒が体験していない内容を設定し、姿勢保持や運動・動作の基本的技能の習得に加え、達成感と成功体験を重ねることで自尊感情の醸成を図った（図9）。

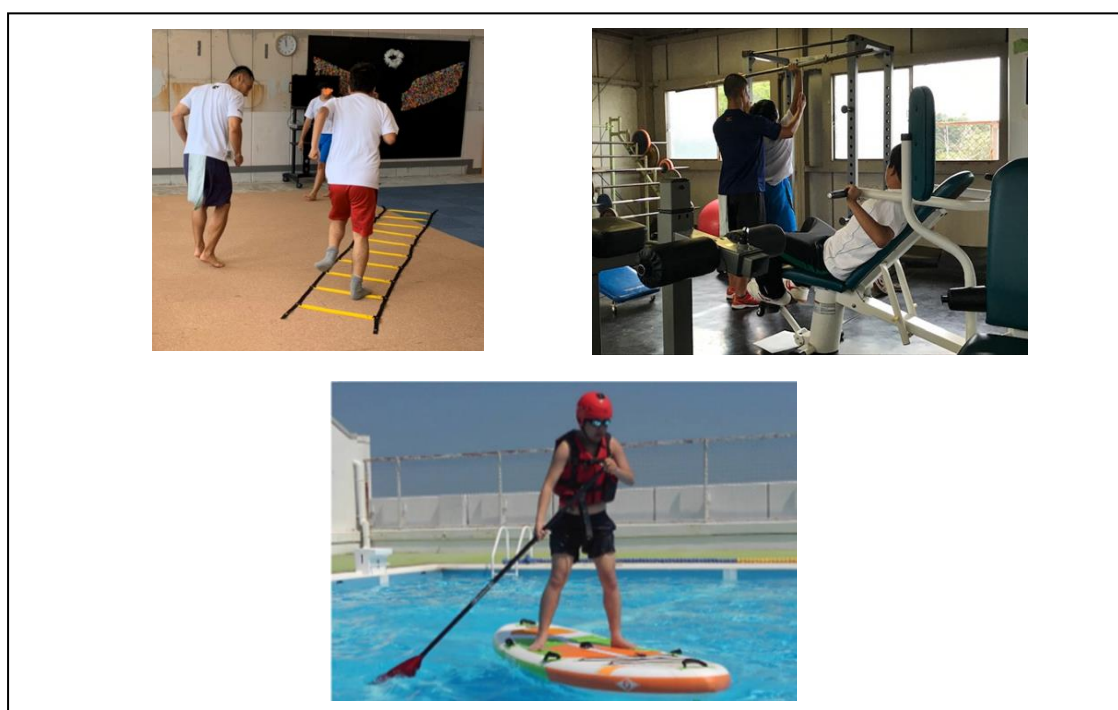


図9 教科の内容を取り扱った指導

さらに、本校は生徒の「わかる喜び」や「学ぶ意欲」を引き出し、しっかりとした学力と社会で頑張る力を身につけることをめざす「エンパワメントスクール」として設置されており、その取組の1つとして、全ホームルームに装備された単焦点プロジェクターによる視覚面からのアプローチを積極的に行い、学校全体で「わかる授業づくり」を推進している。